ISSN 0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第82号

佐山遺跡第３次の発掘調査 ---------- 竹原　一彦・伊賀　高弘 -- 1
木津城山遺跡の発掘調査とその成果 ---------- 筒井　崇史 -- 9
沖田遺跡出土の縄文・弥生土器 ---------- 中川　和哉・山口　早苗・松田早映子 -- 15
久我畷の発掘調査 ---------- 中島(松尾)　史子 -- 23
共同研究　方形周溝墓の成立 ---------- 藤井　　整 -- 31
平成13年度発掘調査略報 ---------- 41
4．東禅寺古墳群
5．杉北遺跡第７次
6．長岡京跡右京第704次・井ノ内遺跡
7．内里八丁遺跡第17次
8．女谷横穴Ｃ支群
9．稲葉遺跡第７次
10．井手寺跡・栢ノ木遺跡
長岡京跡調査だより・79 ---------- 55
センターの動向 ---------- 57
受贈図書一覧 ---------- 59

2001年12月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

佐山（さやま）遺跡第３次の発掘調査

竹原　一彦・伊賀　高弘

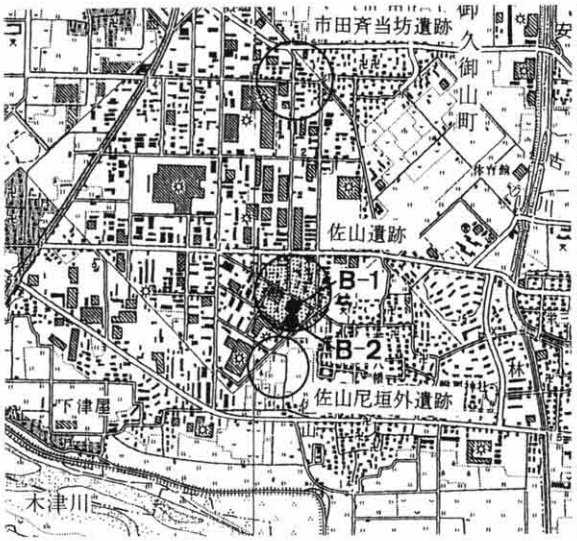
１．はじめに

佐山遺跡は久世郡久御山町佐古小字外屋敷、佐山小字新開地に所在する。当調査研究センターは、国土交通省と日本道路公団が進める国道１号京都南道路および第二京阪道路建設に伴い、久御山町域の路線計画地内に存在する市田斉当坊遺跡・佐山遺跡・佐山尼垣外遺跡の発掘調査を実施してきている。佐山遺跡の発掘調査は、平成９年度の範囲確認を目的とした試掘調査に始まる。平成11年度（第１次調査）には、遺跡北部のＡ－１地区で上層遺構の発掘調査を行い、平成12年度（第２次調査）には、Ａ－１地区下層、Ａ－２地区、Ｂ－１地区上層の調査を実施した。この調査によって、佐山遺跡は弥生時代後期～古墳時代、平安時代～鎌倉時代の２時期を中心とした、複合遺跡であることが判明した。弥生時代後期～古墳時代では多数の竪穴式住居跡、平安時代～鎌倉時代では久世郡条里に関連する道路・溝などを検出し、多くの成果を得てきている。

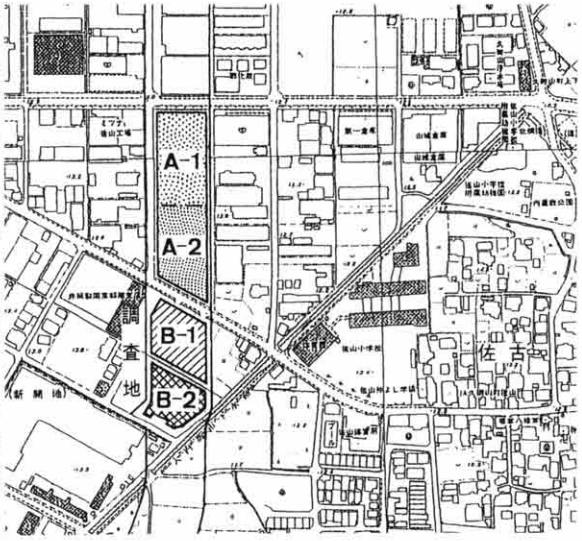
今回は、平成13年度に第３次調査として実施した遺跡南部のＢ－１地区下層と、その南に位置するＢ－２地区の調査成果について、概略を報告する。

２．調査の概要

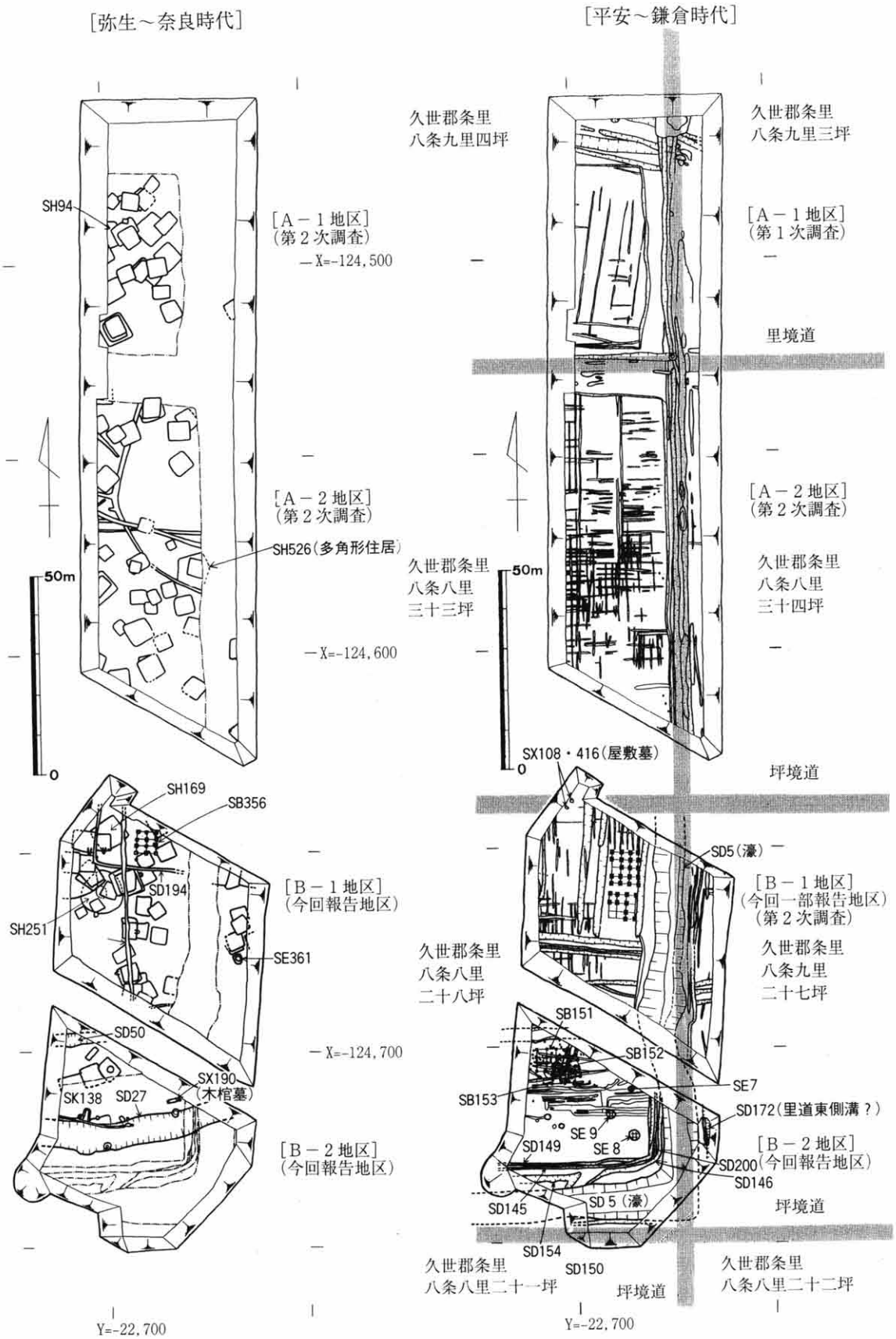
今回の調査では、Ａ地区調査で得られなかった時期の遺物・遺構が新たに確認された。遺物においては、わずかであるが、縄文時代晩期の土器、埴輪、布目瓦などの小片が調査区の各所から出土した。遺構では、Ｂ－１地区から奈良時代に属する掘立柱建物跡・土坑を検出した。



第１図　調査地位置図（1/3,000）



第２図　調査区配置図（1/7,000）


[弥生～奈良時代]
[平安～鎌倉時代]
SH94
[A－1地区]
(第2次調査)
X=-124,500
[A－2地区]
(第2次調査)
SH526(多角形住居)
50m
0
X=-124,600
SH169
SB356
SD194
SH251
[B－1地区]
(今回報告地区)
SE361
SD50
X=-124,700
SX190
(木棺墓)
SK138
SD27
[B－2地区]
(今回報告地区)
Y=-22,700
久世郡条里
八条九里四坪
久世郡条里
八条九里三坪
[A－1地区]
(第1次調査)
里境道
[A－2地区]
(第2次調査)
久世郡条里
八条八里
三十三坪
久世郡条里
八条八里
三十四坪
SX108・416(屋敷墓)
坪境道
SD5(濠)
[B－1地区]
(今回一部報告地区)
(第2次調査)
久世郡条里
八条八里
二十八坪
久世郡条里
八条九里
二十七坪
SB151
SB152
SE7
SB153
SD172(里道東側溝？)
SE 9
SE 8
SD149
[B－2地区]
(今回報告地区)
SD200
SD146
SD145
SD 5 (濠)
坪境道
SD154
SD150
久世郡条里
八条八里二十一坪
坪境道
久世郡条里
八条八里二十二坪
Y=-22,700

第3図　遺構平面図

(1)弥生時代後期～奈良時代

この時期に該当する遺構は、機能した時期や性格から、主として竪穴式住居跡で構成された集落に関連するものと、規模の大きな掘立柱建物跡１棟を含む古代(奈良時代)に属するものに大きく分けられる。

集落遺構は、すでに調査を終えたＡ地区で確認していたものの南方への延長部にあたり、Ｂ－１・Ｂ－２地区において、竪穴式住居跡を中心とした遺構が非常に高い密度で展開している様子が判明した。その分布状況は、後世の土地利用にかかる地形の改変を多少は反映するものの、とりあえず時期差を無視してその傾向をみると、Ｂ地区全体をみた場合、とくにその北西地区にひとつの集中域がある。さらに、西側への情報はないが、そこから周囲に向かって、遺構の密度が低くなっていく傾向が読み取れる。とくに南側については、Ｂ－２調査区において、生活面として利用された自然堤防起源の微高地の南限を、南側に向かって降下する傾斜面を検出し、集落遺構が、これを越えて展開しないことが分かった。

個別の遺構については、出土遺物の整理が現時点で充分できていないので、ここでは、この間の成果を基に予見を交えて、その概略を提示するにとどめておく。

検出された竪穴式住居跡の総数は、Ｂ地区全体で45基を数える。周壁の平面形は方形プランが大半を占め、その傾向はＡ地区の在り方を踏襲する。ただ、新たな知見として、Ｂ－１地区では直径11.5mを測る大形の円形住居跡(ＳＨ251)を１基確認した。方形住居跡の平面規模は、一辺4.0～5.0m(床面積16～25m²)に集中する傾向があり、これを標準に、最小2.5mから最大7.8mまでの幅がある。

住居跡内の主柱穴の配置は、４本の柱穴を同一円周上に等間隔で配す方式を基本とする。しかし、中には柱穴の配置が不規則であったり、４本柱の一部が欠落する住居も、少なからずみられる。こうした住居跡の多くは、柱穴や周壁溝の掘形が浅かったり、周壁そのものの遺存度が低い場合が多い。また、方形住居跡の中で最大規模を測るＳＨ169は、周壁や周壁溝の残りは非常に良好にもかかわらず、明確な柱穴を見い出し得なかった。これらの解釈として、ＳＨ169を例示すると、同住居の壁高は0.3mと比較的深い。しかし、竪穴の掘り込み(掘形)の底面は、床面として利用するには不安定な砂層に達している。すなわち、安定した床面を確保する目的で、粘性のある土を用いた整地(貼床)を想定し、かさ上げされた床面から柱穴が掘り込まれたとみるのも一案であろう。

住居の「ヒドコ」に関しては、炉と竈の２形態を確認した。その多くは、床面のほぼ中央もしくは周壁に近い位置に、焼土・炭の薄い堆積がみられる小さな広がりがあったり、被熱により基盤層が赤変硬化するといった状況をとどめる程度で、その詳細は不明である。

写真１　Ｂ－１地区ＳＨ251全景(南から)

そうした中で、比較的遺存状態のよい竈を、

住居の南辺周壁の中央に作り付けている住居２基（ＳＨ226・229）については、ＴＫ23～47型式の須恵器が製塩土器や勾玉形滑石製模造品などとともに出土しており、古墳時代中期後半に住居の造営時期が求められる。

一方、大形の円形住居跡（ＳＨ251）の中央では、周囲に地山を削り残して造り出した土堤を円形（直径3.0m）にめぐらせ、その内側の中央に径1.0m、深さ0.25mの土坑を穿った特殊な遺構を付設しており、周堤の内側には炭が薄く全面に堆積していた。類例に乏しいが、都出比呂志氏が提唱した「灰穴炉」として整理できる特殊な炉跡と考えられる。(注1)

住居跡の時期については、充分な遺物の検討を経たうえで、検討すべきであるが、現時点で確認できる事項を簡単に示しておく。

Ｂ地区において最も古い住居跡は、出土した土器から、弥生時代後期中葉頃の大形円形住居（ＳＨ251）と推定される。その後、目立った空白期を置かず、住居プランを方形に切替え（弥生系の甕の比率が依然として相当高い中で、庄内系の土器が一定量組成する段階）、さらに、床面積を縮小しながらも、古墳時代前半期（布留３）まで活発な集落経営が維持される。さらに、初期須恵器の段階（ＴＫ73～208）の断絶期を経て陶邑ＴＫ23～47型式併行期に再び竈を伴う方形の竪穴式住居跡が営まれ、集落の再形成がみられるものの、長期には及ばず、６世紀後半の土器の出土（Ｂ－２地区のＳＤ50など）を最後に集落は終焉をむかえる。

竪穴式住居跡以外の遺構としては、素掘りの井戸ＳＥ361（布留期）や鍵形に折れる溝ＳＤ194（６世紀）・木棺墓ＳＸ190（弥生時代後期）などがある。

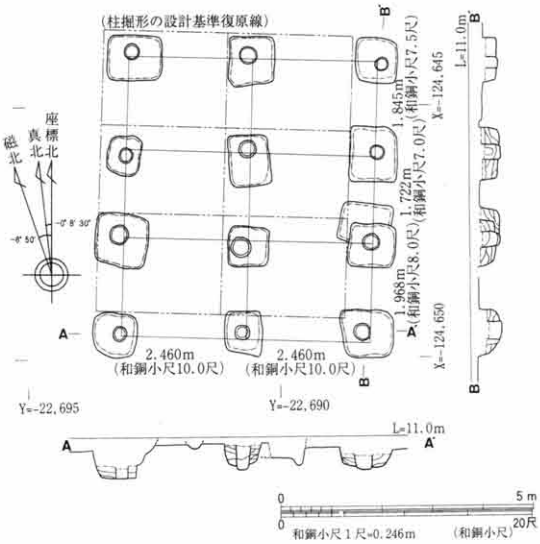
このうち、Ｂ－２地区の中程において、中心点を北にしてゆるく円弧を描くように東西方向に展開する溝状遺構（ＳＤ27）について若干付言しておく。この溝状遺構は集落遺構が占地する微高地状の高まりの南側の周縁部にみられる幅約8.0mの弥生時代後期末～古墳時代初頭を中心とする土器が帯状に集中する地点である。その横断面形は浅い皿状を呈する。上層は著しく削平されており、自然地形との区別も不明瞭なか所が目立つが、南北両岸の立ち上がりを部分的に確認しており、人工的に掘削された溝である可能性が高い。

次に、佐山遺跡の一連の調査の中で、今回得られた新たな知見として、奈良時代を中心とする古代の遺構が検出されたことが挙げられる。その内容は掘立柱建物跡と溝・土坑で、いずれもＢ－１地区で検出した。全遺構の中での占める割合は少ないものの、その内容が示すところは軽視できない。

掘立柱建物跡（ＳＢ356）は、南北（桁行）３間（柱間総長5.27～5.59m）、東西（梁間）２間（柱間総長4.83～5.00m）の総柱構造を採る。掘形は、一辺1.0m前後（0.75～1.06m）の方形プランで、その４辺は正しく正方位に揃える。中柱と側柱の規模に変化はなく、総束柱構造を想定できる。土壌の環境から柱根は遺存しないが、柱痕跡を明瞭に確認できた（直径29～40cm）。総束柱のため、施工後の柱通りや柱間に厳密な規則性は失われているものの、詳細に検討した結果、設計尺度は和銅尺（１尺＝0.246m）を用いる。柱間構成は、桁行は不等間隔柱間を採り、北から1.845m（小尺7.5尺）→1.722m（小尺7.0尺）→1.968m（小尺8.0尺）。梁間は2.460m（小尺10.0尺）等間で設計

されているものとみられる。建物方位は真北に対して東に約２°振っている。掘形内の遺物量は少なく、その大半は先行する集落遺構に帰する２次的な混入だが、下限を示す資料中に、詳細な時期を特定できないものの、須恵器杯Ｂ高台部分の小片が認められた。

溝ＳＤ170は、Ｂ－１地区西寄りを南北方向に直線的に貫く幅約1.0m、検出面からの深さ約0.6mを測る「Ｕ」字形断面の素掘り溝である。主軸線の示す方位は、真北に対して西に約３°振っている。出土遺物は、検出長(46.0m)の割には少ないが、ほかの遺構との重複関係や出土遺物(須恵器杯Ｂ・甕)などから、奈良時代に掘削された可能性がある。ちなみに、この溝の位置は、坪内の１段を限る地割線とおおむね一致する(坪境線から西へ21.8m＝12間(歩)＝1/5町)。



第４図　ＳＢ356実測図(Ｓ＝1/150)

土坑ＳＫ228は、各辺を正方位に揃えた一辺1.1mの正方形プランの箱形断面を呈する土坑である。内部から完存率の高い須恵器杯Ａ・Ｂ、同環状把手付蓋、土師器杯Ａ・Ｃ、同甕、凸面に縄目叩きを施した平瓦、製塩土器などが、炭化物とともに出土した。その内容から平城Ⅲ期(８世紀第２四半期)の一括資料とみられ、上記の遺構の年代を知る手掛かりとなる。

(2)平安時代～鎌倉時代

前年度に調査を終えたＢ－１地区上層では、条里地割に規制された屋敷地を囲む大規模な濠(ＳＤ５)、掘立柱建物跡２棟・墓、条里坪境溝などの遺構を検出した。ＳＤ５は屋敷地の東側を画するものであり、濠内から多量の中世土器が出土した。

Ｂ－２地区の調査では、Ｂ－１地区から南に続く濠(ＳＤ５)を検出した。また、この濠は調査区の南部で西側にほぼ直角に折れる状況にある。その他の主な遺構として、屋敷地区画溝(ＳＤ145・146・149・154・200)、掘立柱建物跡３棟(ＳＢ151～153)、井戸３基(ＳＥ07～09)、条里区画溝(ＳＤ150・172)などが検出された。調査区北西部で検出した３棟の掘立柱建物跡は重複して検出し、同一場所での２度の建て替えを行っている。建物の規模はＢ－１地区ＳＢ１・２に比べ小規模であり、屋敷地内では副次的な建物とみられる。井戸は、屋敷地の南東部にみられる。溝ＳＤ150・172は、検出位置から条里地割の坪境道に伴う溝とみている。

濠ＳＤ５　屋敷地の周囲をめぐると判断する大規模な濠であり、Ｂ－２地区では直角に折れる東南角部を検出した。調査地東部で検出した南北方向部分は、屋敷地南東隅から北にＢ－１地区北端まで、一部未調査地を含むが約80m分を検出した。南部では東西方向の濠を約27m分を検出した。ＳＤ５の断面形はゆるやかに湾曲するすり鉢状を呈し、溝幅は８～10m、深さは1.5m前後を測る。ＳＤ５はＢ－１地区の調査成果から、平安時代後期(11世紀後葉～12世紀前半)に掘削されたとみられる。濠内堆積土はシルト系微砂・砂・粗砂を主としたもので、ラミナ堆積も認め

写真２　Ｂ－２地区　ＳＤ５
護岸施設と牛・馬骨格(南から)

られるところから、濠は常に水を湛えていたとみている。濠内および調査区東壁面の土層観察から、ＳＤ５は何度か再掘削されたことが明らかである。屋敷地をめぐる濠も早くから土砂の堆積が進み、13世紀前半には南側の東西方向部分は埋没している。一方、南北方向部分は13世紀前半とみる再掘削時点で西に折れることはなく、調査区外(南もしくは東)に延びる状況にあるが、13世紀中葉には一旦その機能を終えている。濠は元々素掘りであるが、再掘削時には軟弱地盤部分で護岸を施している。東西部分の東端付近から、大規模な護岸施設(ＳＸ100)を検出した。ＳＸ100は、幅を減じた再掘削時の濠南肩部に杭・板・竹を使用して設けられた、長さ約11mにわたる護岸施設である。護岸施設の内側(南側)では、頭を西に向けた牛と馬のほぼ完全骨格が各一頭分出土した。

濠内からは多くの遺物が出土している。多量の中世土器に混じって、鉄器・木製品・獣骨が出土した。鉄器では、腰刀とみる短刀(刃渡り20～22cm)３点が底付近から出土した。うち１点は黒漆塗りの鞘と柄が伴い、さらにもう１点には柄が伴う。木製品の多くは南北濠南部の中層付近から出土した。木製品には柿経(妙法蓮華経)１点の他、形代(人形・鏃形など)・下駄・漆器椀・底板・部材など多くの種類がみられる。獣骨は牛・馬の下顎・大腿骨などである。

溝ＳＤ145・146・149・154・200　ＳＤ５の内側をめぐる形で併走する。出土遺物や切り合い状況から、溝ＳＤ５に先行して設けられた屋敷地を囲む溝と判断している。溝ＳＤ145では、コーナー付近から11世紀中葉の瓦器椀・土師器皿が集中して出土し、完形品が多数を占める。屋敷地南面で、同一軸線上を東西方向に走るＳＤ146とＳＤ154は、ＳＤ５の内側コーナーから西に18m付近を中心に約５mにわたって途切れ、同地点から両溝は南西方向に折れ曲がり併走する。この18mの数値は、おおむね１町では６分の１、１町から濠幅(20m)を引いた屋敷地では５分の１の数値に合致する。この溝の途切れ部は、屋敷地に対する規格性のある位置関係から、屋敷地の出入り口、溝の併走部は屋敷地と外部を結ぶ通路と判断してよかろう。

３．ま と め

今回の調査成果を時間軸に沿って概観し、その内容を簡単に整理してまとめとしたい。

(1)弥生時代後期から古墳時代にかけて営まれた集落遺構については、遺物の出土量が膨大で現在鋭意整理作業を進めている。したがって、遺物の充分な検討を待って全体の評価を下すべきで、ここでは事実報告に対して若干の補足を加える程度に留めておきたい。

集落の時期ごとの変遷過程については、その大筋を遺構の概要で述べた。これに敢えて付言するなら、集落の黎明期(弥生後期中葉)の状況が、より充実してきた点を指摘したい。

今回の調査で判明した最古の住居はＳＨ251で、過去の調査例も含め佐山遺跡では最大規模を

測り（最大径11.5m、床面積約104㎡）、しかも周壁の平面形は、唯一、円形である。径が10mを越えるこの時期の竪穴式住居跡は近年各地で類例が確認されつつあるが、いずれも上屋を支える建築構造の限界を反映するのか10m前後に留まり、それを大きく越えるものはない。また、１集落に複数存在するのは稀で、１基だけ単独に存在するケースが多い。佐山遺跡例の場合、住居中央には、都出氏が後の火鉢や囲炉裏の原理に通じると考えた巨大な「灰穴炉」を付設する。同氏はこうした特異なヒドコに西方からの影響を指摘するが、遺物の上からもそれを追認できそうである。北に隣接するＡ地区で検出された同時期の住居の１基（ＳＨ526）が多角形プランを呈し、規模が他を圧倒している点、土器に播磨や摂津の色彩が窺えることなど、共通する点が確認できる。

次に、集落の規模について手掛かりが得られたので紹介する。すなわち、低地において安定した生活が可能である微高地の南限をＳＤ27の存在を含めて確認できたことである。平成９年度に実施した試掘調査（８tr.）で北限を押さえており、自然堤防起源の微高地の範囲が少なくとも南北方向に300m及んでいることが想定できるようになった。道路建設を原因とするため線的な状況を確認したに過ぎないが、仮にこれを直径として円を描くと約７haの面積が求められる。唐古鍵・池上曽根・吉野ヶ里などの巨大環濠集落にはとても及ばないが、例えば愛知県の朝日遺跡や福岡県の平塚川添遺跡とほぼ同規模で、京都府内では最大級の規模を有する中核的な集落といえる。

(2)古代の遺構に関しては、検出地点が佐山遺跡の一連の調査の中にあって、Ｂ－１地区に限定され、ほかの時期の遺構に比べて広域な展開を示さず、かつ疎らな分布状況を示す。ここではその性格の手掛かりを掘立柱建物跡に求めて検討を試みる。

この建物遺構のもつ属性をいくつか列挙すると、①床面積が約30㎡を測り、一般集落内にみられる総柱高床倉庫の床面積（20㎡を越えることはない）を上回ること。②柱穴は、掘形が一辺1.0m前後で、直径30cm前後の柱材を用いていること。③柱間寸法が５尺以上と広く、完数尺で設計されていること。④平面形式の３間×２間は、４間×３間とともに郡衙クラスの正倉の中核をなし、正倉を代表する形式であること。これらの諸点は、この建物が一般集落の中に営まれた施設（クラ）とみることに対する否定要素となる。

次に、造営時期について考えておく。先にも記したように、遺物の上から時期を検討するのは難しい。そこで、上記で触れた造営尺について再び確認しておくと、当建物の基準尺は和銅６(713)年の用尺変更（唐大尺六尺一歩制）後の尺貫基準を用いている可能性があることが確認できた。したがって、その上限は和銅６年に求められる。ただ、和銅尺はその後しばらくの間基準尺として多用されるので時間幅が広く、これ以上の絞り込みは不可能である。むしろ、柱穴の規模や形態が古相を示す点や、廃棄土坑ＳＫ228を同じ施設内の遺構とみてその出土資料（平城Ⅲ期）を積極的に利用して、古代でもその前半期に造営（経営）の一点を求めておくのが妥当ではないだろうか。

その性格については、報告書をまとめる中で充分検討を重ね、分析を試みたいと思う。

いずれにせよ、今回検出された古代とみられる遺構は、全成果からみれば地味な位置にあるが、投げ掛ける問題点は多岐にわたり、貴重な成果といえよう。

(3)平安時代～鎌倉時代にかけての佐山遺跡Ｂ地区は、大規模な濠をめぐらせる推定一町四方の屋敷地東部域と判断する。現時点では遺構・遺物の十分な検討ができていないが、屋敷地について簡単に整理してみたい。

濠ＳＤ５は条里地割の規制を受けており、北側のＡ地区では延長部が検出できないことから、坪境となるＡ・Ｂ両地区間の現道路下で西に折れ、屋敷地をめぐっていると推測される。濠については、多くの類例(長原遺跡[注2]・柏原Ｋ遺跡[注3]・小泉堂遺跡[注4])に比べ、10m規模の本遺跡例は傑出している。

屋敷地は１町四方とみられ、数棟の建物と井戸・墓などで構成されていたとみられる。出土遺物から、およそ10世紀には屋敷地が営まれた可能性が高く、13世紀中葉には廃絶したとみられる。また、建物跡・区画溝など遺構の切り合い関係から、最低３時期の変遷がみてとれる。

屋敷地の住人については、在地有力者(領主層)階級が考えられる。水を湛えた大規模な濠は、木津川の水運に深く関与した人物とみることもできよう。また、中世段階では当地に荘園を多く抱えていた石清水八幡宮に関連する領主などがその候補に挙げられる。ちなみに、Ｂ－１地区のＳＤ５から、「政所」の墨書土器が出土している。政所は、中世頃には荘園領主などの家政機関に対しても使用され、領主の存在を補強する資料のひとつとなる。また、多くの輸入陶磁器、精巧な作りの刀装具をもつ腰刀の出土など、一般集落を越える遺物や遺構の内容からも領主層の一端が垣間みえる。

今後、整理作業を進めて遺構・遺物に対し検討を加え、佐山遺跡の性格を明らかにしていきたい。

(たけはら・かずひこ＝当センター調査第２課調査第３係主任調査員)
(いが・たかひろ＝当センター調査第２課調査第３係主査調査員)

注１　都出比呂志　『日本農耕社会の成立過程』　岩波書店　1989

注２　井藤徹ほか　『長原－近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』　大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター　1978

注３　山崎純男ほか　『柏原遺跡群Ⅲ－柏原Ｋ・Ｌ遺跡・中世居館址と中世水田の調査－』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第157集)　福岡市教育委員会　1987

注４　本村充保「小泉堂遺跡」(『大和を掘る』)　奈良県立橿原考古学研究所　2001

木津城山（きづしろやま）遺跡の発掘調査とその成果

筒井　崇史

1．はじめに

木津城山遺跡は相楽郡木津町木津片山に所在する（第１図）。本遺跡の調査は、「関西文化学術研究都市」の整備事業に伴い、都市基盤整備公団の依頼を受けて、平成９年度から継続して実施している。平成13年度の調査は、第５次調査に当たり、今回の調査で造成対象地における当遺跡の調査を終了する予定である[注1]。小文では、第５次調査の概要について報告するとともに、１次から５次までの調査成果についてまとめることにしたい。

なお、当遺跡については、現在、報告書にむけての整理作業を行っており、後日、正報告書を刊行する予定である。

2．第５次調査の概要

第５次調査は、調査第２課調査第２係長伊野近富、同調査員筒井崇史が担当した。調査期間は平成13年６月１日から９月25日までである。調査面積は約1,000㎡である。今回の調査は、平成11年度（第３次）調査の結果を受けて、平成９年度（第１次）・平成10年度（第２次）調査地の西側および南側の丘陵斜面を対象とし、昨年度（第４次）調査に引き続き、Ｄ・Ｅ・Ｆの３つの調査区を設定した（第２図）。

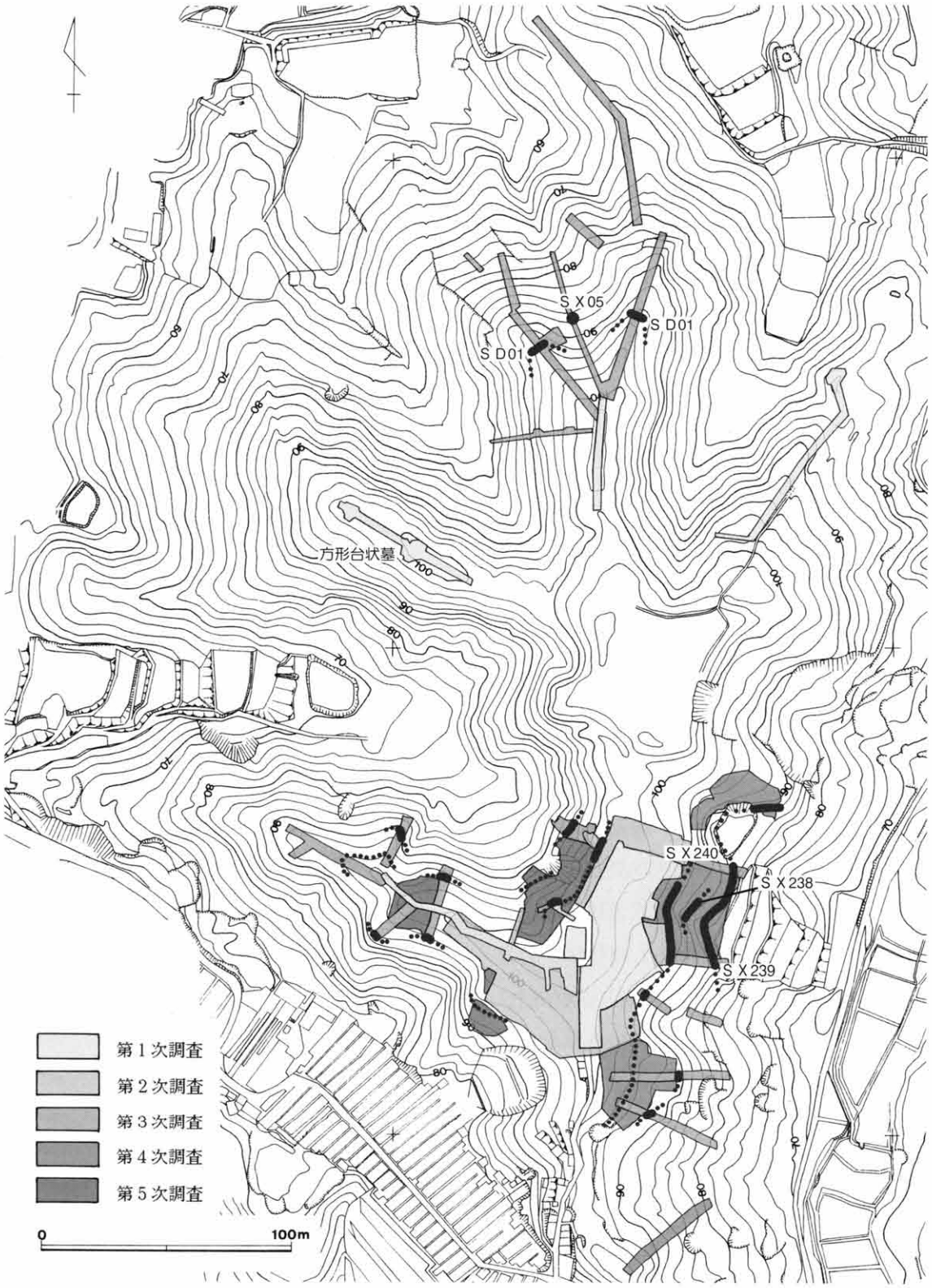
①Ｄ地区　標高90～100mの丘陵斜面に位置する。遺構は、溝状遺構ＳＸ262を検出したのみで、竪穴式住居跡などは検出されなかった。ＳＸ262は、第４次調査で検出した平坦面とほぼ同じ標高（約94m）であることから、集落を区画する遺構の可能性を考えているが、出土遺物がなく詳細は不明である。なお、Ｄ地区は調査区全体が急峻な丘陵斜面であるために、竪穴式住居跡などを造成できなかったと判断される。遺物は、調査区中央付近の丘陵斜面で多数の弥生土器が出土した。おそらく竪穴式住居跡などが検出された丘陵頂部から転落したものと考えられる。

第１図　調査地位置図（1/50,000）

②Ｅ地区　標高92～98mの丘陵斜面に位置する。遺構は、段状遺構[注2]４基（ＳＸ251～253・256）を検出した。このうちＳＸ251・256はその一部が第３次調査で確認されていたものである。ＳＸ252は検出長６ｍ、検出最大幅２ｍを測り、平坦

面上に溝を伴う。ＳＸ253は検出長７ｍを測るが、調査区南壁に接するため幅は不明である。ＳＸ252同様、平坦面上に溝を伴う。遺物は、ＳＸ252・253の埋土から多数の弥生土器が出土した。

③Ｆ地区　標高90～94ｍの丘陵斜面に位置する。第２次調査地に隣接することから、竪穴式住居跡などの存在が予想された。しかし、調査の結果、顕著な遺構は検出されなかった。遺物は、



第２図　調査次数別トレンチ配置図(1/2,500)

東側に位置する谷状地形から、多数の弥生土器が出土した。これらは、丘陵斜面上方に位置する竪穴式住居跡から廃棄されたり、転落したりしたものと考えられる。

3．木津城山遺跡の調査成果

次に、5次におよぶ調査成果について、簡単にまとめていくことにする。

①住居跡　調査の結果、竪穴式住居跡30基以上、段状遺構10基以上を検出した(残欠も含む)。段状遺構が、必ずしも居住用とは限らないことから、実際の住居として使用されたのは前者が大半を占めると考えられる。各住居跡などの存続期間は、現在、検討中であるが、後述のように、少なくとも3ないし4段階の時期区分が可能である。また、広範囲な調査を実施した南地区では、竪穴式住居跡と段状遺構のほとんどすべてが南斜面および東斜面に分布している(第3図)。これは、丘陵の西側斜面が急峻であったことや、日照など実際の生活面が考慮されたためと考えられる。

②方形台状墓　第1次調査の際に、木津城跡から北西にのびる尾根で、方形台状墓2基を確認したが、その後の造成計画の変更などによって、部分的な調査にとどまっている。したがって詳細は不明であるが、検出された区画溝や後世の攪乱を一部掘削した結果、弥生土器(第4図1～3)と獣帯鏡(破鏡、第4図4)が出土した。高杯は、当遺跡出土資料の中でもっとも古く位置づけられる資料と考えられる。集落出土土器と比較すると、方形台状墓は、集落の成立期、もしくはそれに先行して造営されたものと考えられる。獣帯鏡については、概報を参照されたい。(注3)

③集落を区画する遺構　第3次調査の際に北地区で、尾根の主軸方向に直交するように掘削された溝ＳＤ01を検出した。標高94m付近に位置する。第4次調査でも、標高94m付近で人為的な平坦面ＳＸ240を検出した。また、同じ調査区で、標高91m付近と標高87m付近にも人為的な平坦面を確認した(ＳＸ238・239)。第4次調査の平坦面は堆積状況から同時に存在したのではなく別々に営まれたものと判断される。また、調査年次を問わず、急峻な崖状地形が確認されており、これらの始まりも東側や南側の斜面では標高94m付近、西側斜面では100m付近に求められる。崖状地形は、必ずしも人為的な掘削によるとは限らないが、溝や平坦面などとほぼ同一の標高で検出されること、竪穴式住居跡や段状遺構の大半が、平坦面や崖状遺構よりも標高の高い側に位置することなどから、ＳＤ01やＳＸ240などが集落を区画する遺構であった可能性は高い。(注4) なお、竪穴式住居跡や段状遺構のなかには、標高94m以下に営まれているものがごく少数存在する。

④弥生土器　当遺跡の調査では、多数の弥生土器が出土したが、現在、報告書にむけての整理作業中であるため、ここでは主に出土状況について述べたい。

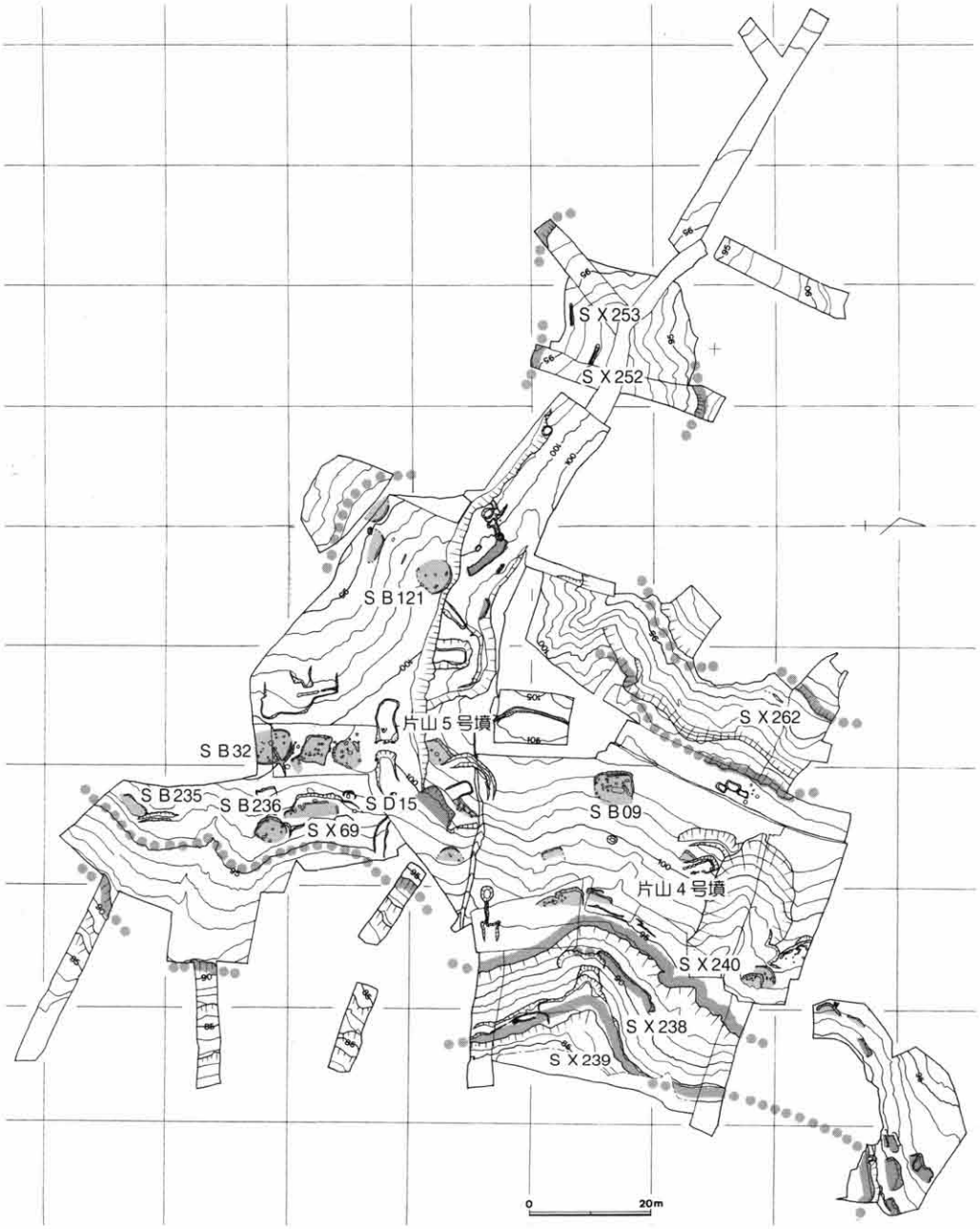
まず、竪穴式住居跡や段状遺構出土資料の大半は埋土中の出土であり、住居跡の廃棄後に堆積したものと考えられる。当然、直ちに住居跡の時期を決定するものではないが、住居跡ごとに相違が認められる。また、丘陵斜面から出土したものが総出土数の半分以上を占める。

このように、出土土器の大半は2次堆積したもので、一括資料と呼べるものは非常に少ない。また、各個体の遺存状態も良好とは言えず、完形に復原できる資料も少ない。そうした中で、第3次調査で出土した供献土器群(土器溜まりＳＸ05)は、当遺跡では数少ない一括資料である(注5)(第

4図7～13)。個体の遺存状態も良好である。高杯の型式から方形台状墓出土高杯よりも後出する資料と考えられる。一方、竪穴式住居跡や段状遺構、丘陵斜面から出土した資料のうち、高杯をみると、ＳＸ05出土高杯よりも口縁部が長く延びたものや外反度の増したものがある。

以上のように形式的変化の追いやすい高杯から、当遺跡出土土器は、相対的な時期区分として、少なくとも３ないし４段階に区分できると考える。

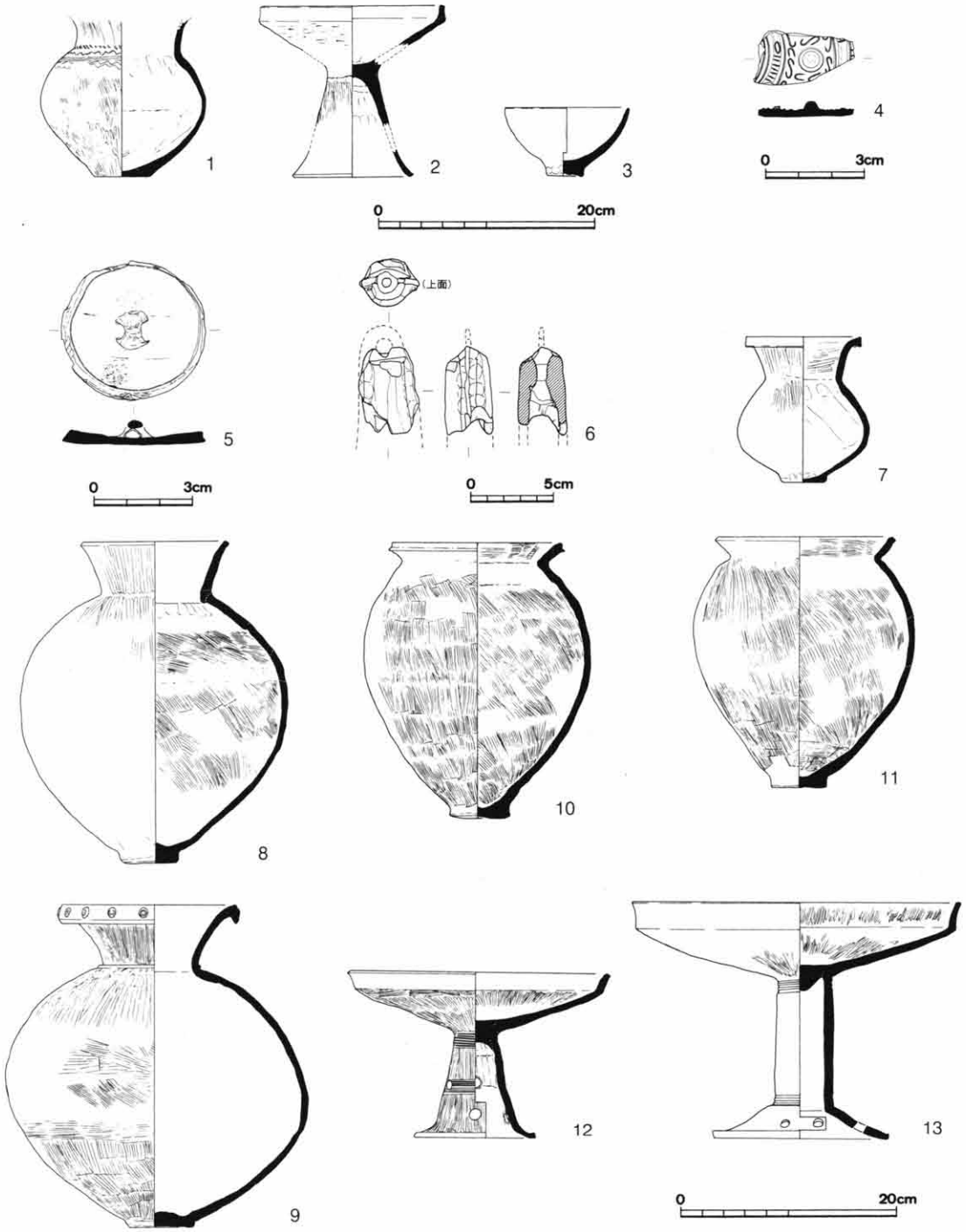
次に、器種構成に目を向けてみると、すべての資料について統計的な処理ができていないため、器種構成の比率を提示することはできないが、壺・甕・鉢が少なく、高杯・器台が多い傾向がある。特に鉢の出土例が極端に少ない。また、長頸壺が少ない。一方、高杯は出土量が多く、その中で脚部に段を有する個体が多いという傾向がある。甕の大半は最終調整としてハケ調整を施し



第３図　南地区主要遺構配置図(1/1,200)

ており、タタキ調整を有するものはごくわずかである。

⑤その他の遺物　弥生土器以外の出土遺物としては、第１次調査で、方形台状墓２の主体部ＳＸ09から先述の獣帯鏡（第４図４）が出土したほか、竪穴式住居跡ＳＢ32から素文鏡（第４図５）が出土した。同じく、第１次調査で土器溜まりＳＸ37から銅鐸形土製品（第４図６）も出土した。これに対して、石器や鉄器といった、生活に必要な利器が皆無と言っていいほど出土していないことは注意される。これらの遺物については報告書で改めて検討することにしたい。



第４図　出土遺物実測図（１～３・７～13：S=1/6、４・５：S=1/2、６：S=1/4）

4．まとめ

木津城山遺跡が弥生時代の高地性集落であることは、すでに概報などによって明らかされているが、今回は各調査年次ごとの成果を改めてまとめてみた。

まず、その存続時期は、出土した土器の特徴からおおよそ弥生時代後期前半から中葉に位置づけられる。当該期の資料は、南山城地域では、これまで出土例が少なく、この地域の弥生土器研究を進める上で重要な資料と考えられる。このほかに後葉に位置づけられる資料(タタキ調整痕のみられる甕など)も少数ながら確認できるが、すでに集落としての機能はすでに停止していたと考えられる。

次に、竪穴式住居跡や段状遺構の営まれた範囲がおおよそ明らかになったことや、集落域を区画する遺構を複数検出したことなどから、集落の範囲を明らかにするための成果を得ることができた。ただ、竪穴式住居跡や集落を区画する遺構の中で時期差が認められることから、時期によって集落規模は変化していると考えられる。そこで、もっとも広範囲に集落を区画する遺構群が検出されている標高94m付近の遺構群で集落の範囲を復原すると、南北340m、東西140mを測る。

以上、木津城山遺跡の調査成果についてまとめた。紙幅の都合もあり、必ずしも十分でない点もあるが、その点は今後刊行予定の報告書の中でその責を果たしたい。また、本遺跡出土弥生土器の編年的検討や周辺諸地域との比較検討などは、いずれも正式報告書で改めて検討したい。

(つつい・たかふみ＝当センター調査第２課調査第２係調査員)

注１　これまでの木津城山遺跡に関する調査概要報告としては以下のものがある。

①第１次調査　伊賀高弘・萩谷良太「木津地区所在遺跡平成９年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第85冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1998

②第２次調査　伊賀高弘・萩谷良太「木津地区所在遺跡平成10年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第90冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1999

③第３次調査　戸原和人・筒井崇史「木津地区所在遺跡平成11年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第95冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2000

④第４次調査　戸原和人・伊賀高弘・筒井崇史「木津地区所在遺跡平成12年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第101冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2001

注２　本遺跡の調査でいう「段状遺構」とは、丘陵の斜面を掘削して平坦な空間を等高線に沿って長く造成した遺構をさす名称として使用しているが、その用途などは不明である。

注３　注１文献①　82～83頁

注４　集落を区画する遺構の多くは時期を確定できる遺物を伴わないため、木津城跡に付随する遺構の可能性がある。しかし、木津城主郭とその周辺部以外で明らかに中世と思われる遺構がほとんど検出されていないことや、中世の遺構であるならば現地表においてその痕跡が認められる可能性が高いにもかかわらず、そうした痕跡が確認されなかったことなどから、ここに述べた遺構群は、弥生時代の高地性集落に伴うものであると考える。

注５　注１文献③参照。

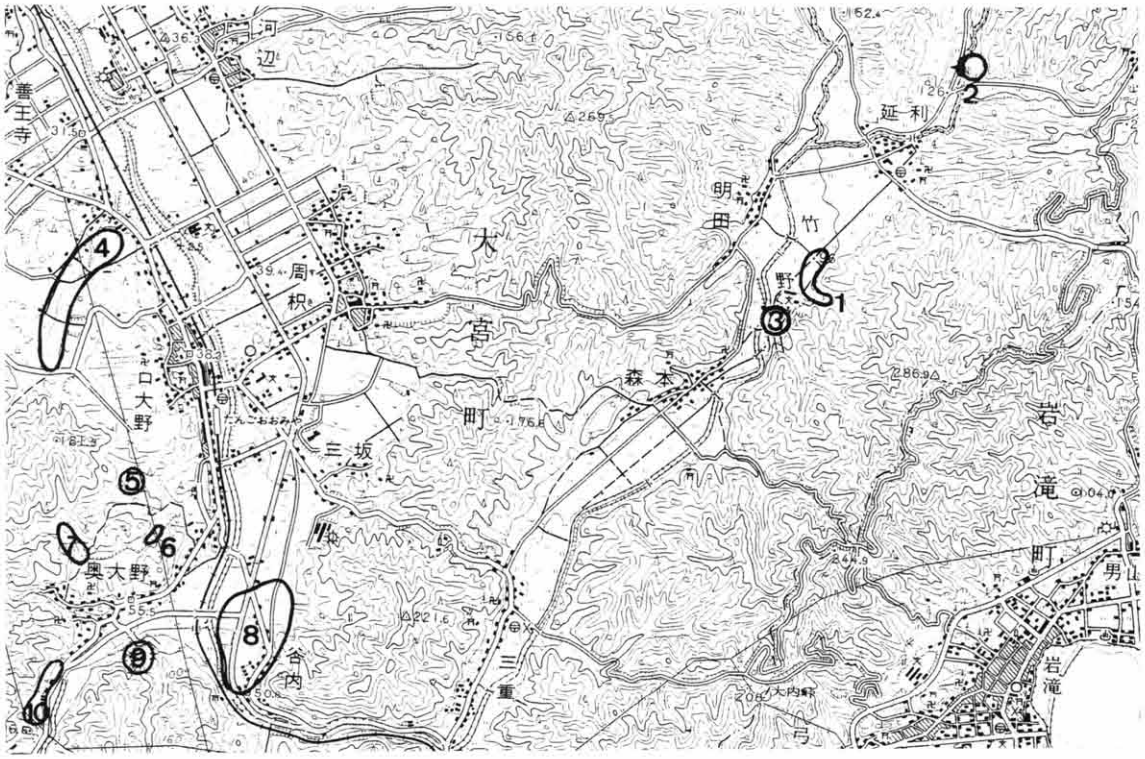
沖田（おきた）遺跡出土の縄文・弥生土器

中川　和哉・山口　早苗・松田　早映子

はじめに

今回紹介する遺物は、「沖田遺跡第２次調査概要」[注1]で紹介できなかった縄文時代、弥生時代の土器である。沖田遺跡は中郡大宮町大字森本小字井内口に所在する縄文時代から中世に至る複合遺跡である。第２次調査は、試掘調査となる第１次調査[注2]を受け平成12年５月９日から同年７月28日まで実施された。調査面積は約1,200㎡である。

沖田遺跡は丹後半島の主要河川である竹野川左岸の丘陵裾部に立地している。遺跡から分水嶺を越えると、宮津湾の奥に位置する天橋立によって区切られた阿蘇海に出ることができる。調査時に検出された遺構は、溝、掘立柱建物跡、竪穴式住居跡などの中世と古墳時代後期のものが大半で、奈良時代、弥生時代末のものも含まれている。出土遺物は整理箱80箱以上出土しており、調査面積の割には豊富である。注目すべき遺物には、多くの木製品がある。人形や船形木製品、杓子、曲物、下駄など多岐に富む。ここで紹介する土器は、包含層中または後世の遺構から出土したもので、原位置で出土したものはない。



第１図　調査地および周辺縄文土器出土遺跡分布図(1/50,000)

1.沖田遺跡　2.五十河遺跡　3.松山遺跡　4.菅外遺跡　5.枯木谷遺跡
6.シンボガイ遺跡　7.奥大野遺跡　8.谷内遺跡　9.裏陰遺跡　10.正垣遺跡

1．縄文土器（1～105）

沖田遺跡出土の縄文土器は、大きく早期、早期末～前期、前期、中期前葉、中期末～後期に分けられる。この他に施文が認められるが小片で型式の特定が困難なもの、無文の体部片などは紙面の都合上割愛した。

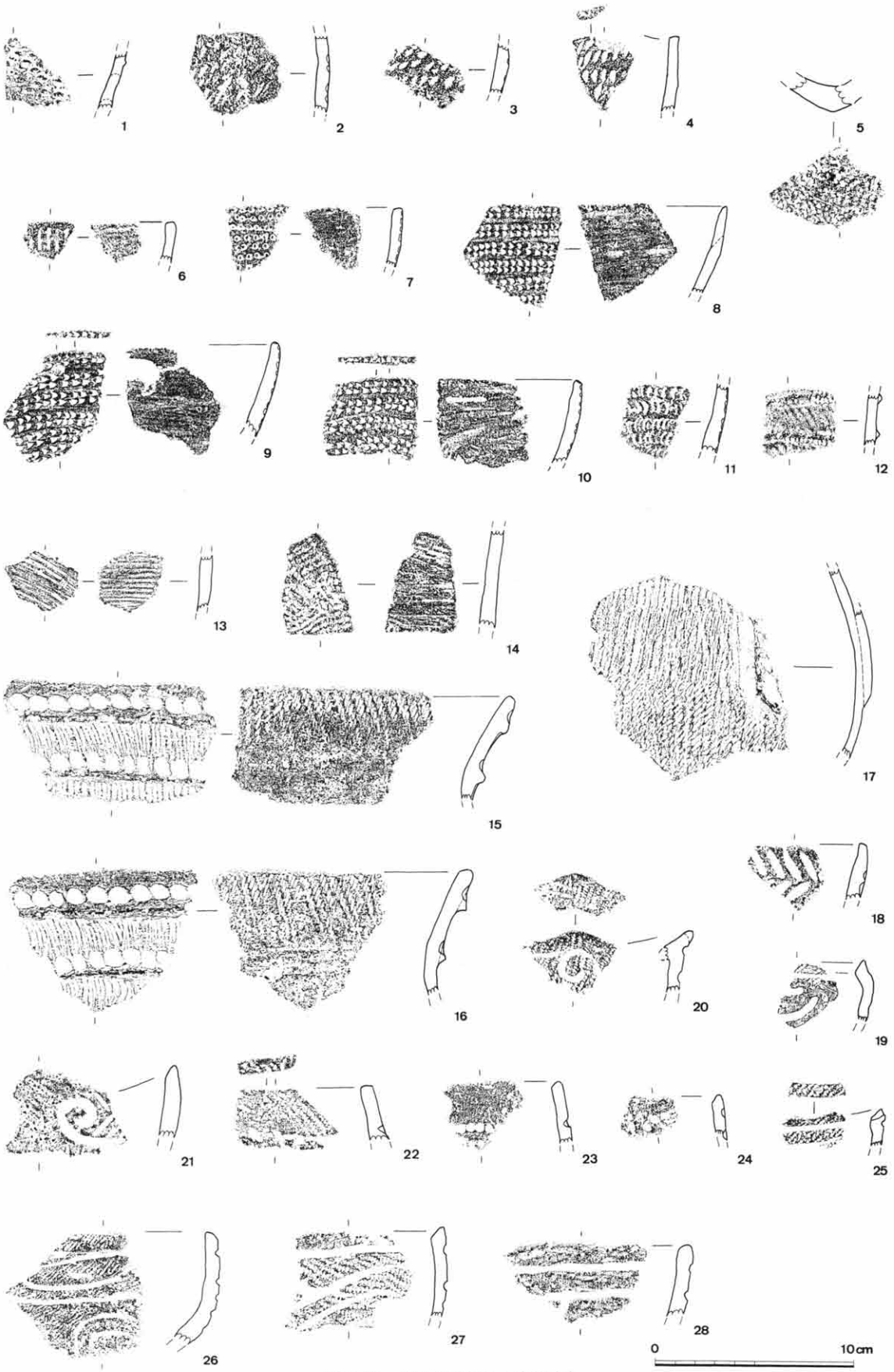
早期：ポジティブな楕円文を有する押型文土器である。

早期末～前期（2～14）：2～5は早期末に比定される。2～4は爪形文を施す土器である。4は口縁部破片で波状口縁になる。口縁部に「×」状のキザミをもつ。5は器表面に縄文が施された土器の尖底部と考えられる。6～14は前期に位置付けられる土器である。6は幅広の刺突が施されている。7は竹管刺突が施されたもので、羽島下層Ⅱ式に並行するものと考えられる。8～10は外面に半截竹管2連規制による刺突が見られる羽島下層Ⅱ式土器である。内面には条痕がみられる。9・10は口縁端部に「D」字状の刺突が施される。11は「C」字形と逆「C」字形の爪形文を併せ持つ北白川下層Ⅰb式土器である。12は器表面の磨滅が激しいが、北白川下層Ⅲ式土器と考えられる。13は両面条痕を有する土器である。14は外面に縄文、内面に条痕を有する土器である。胎土には砂粒が少なく、特徴的である。

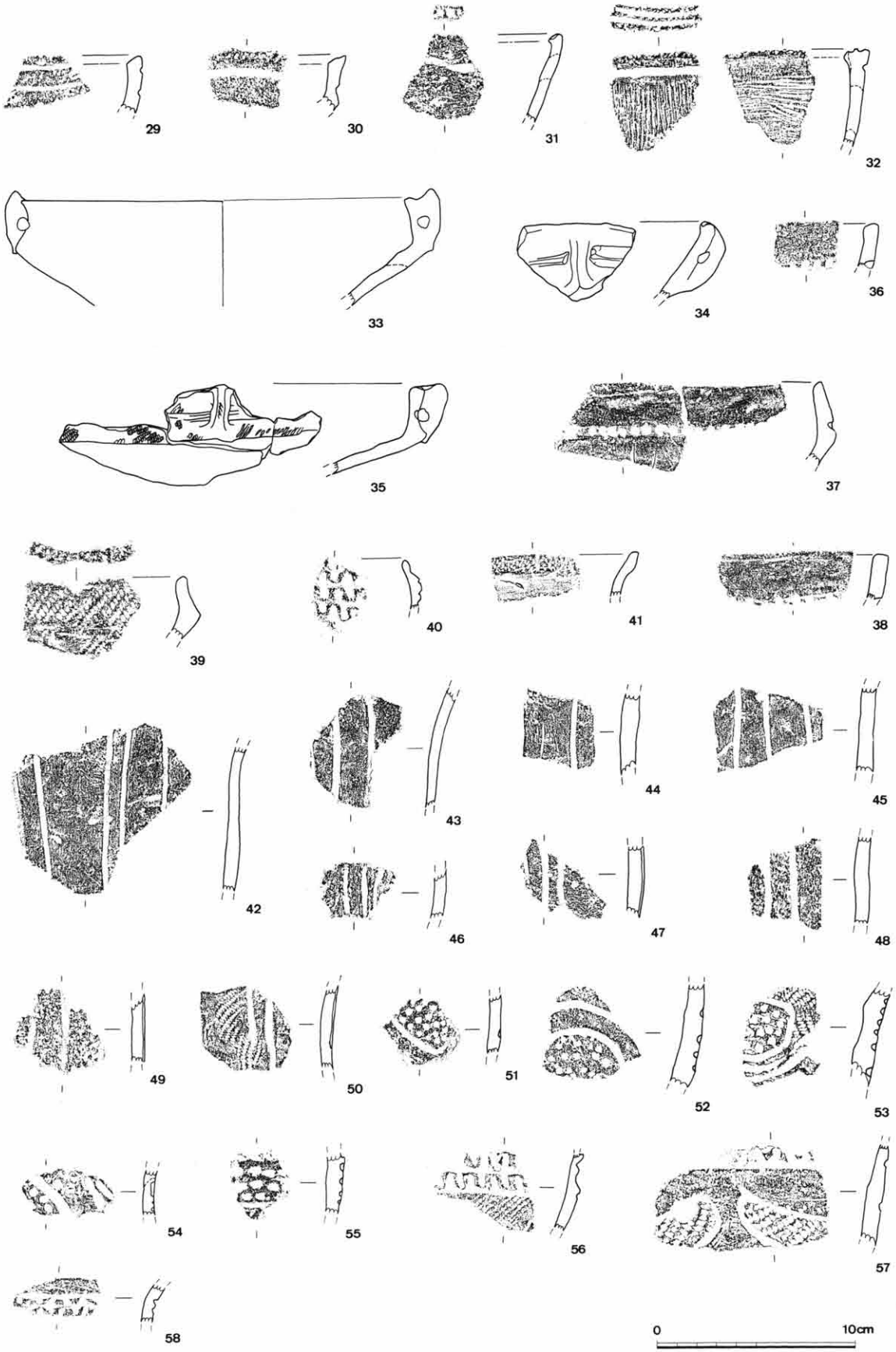
中期前葉（15～17）：15・16は船元Ⅱ式の深鉢の口縁部片である。17は外面に突帯が貼り付けられている。土器片の中央部を境に、上下で縄文の撚りが異なる。

中期末～後期（18～101）：18～28は中期末に属する有文深鉢形土器の口縁部の破片である。19は北白川C式の深鉢A類に含まれる可能性がある。21は口縁部の文様帯に渦巻状の沈線による区画が施され、その中に短沈線によって矢羽根状の文様が施されている。28は中津式土器である。

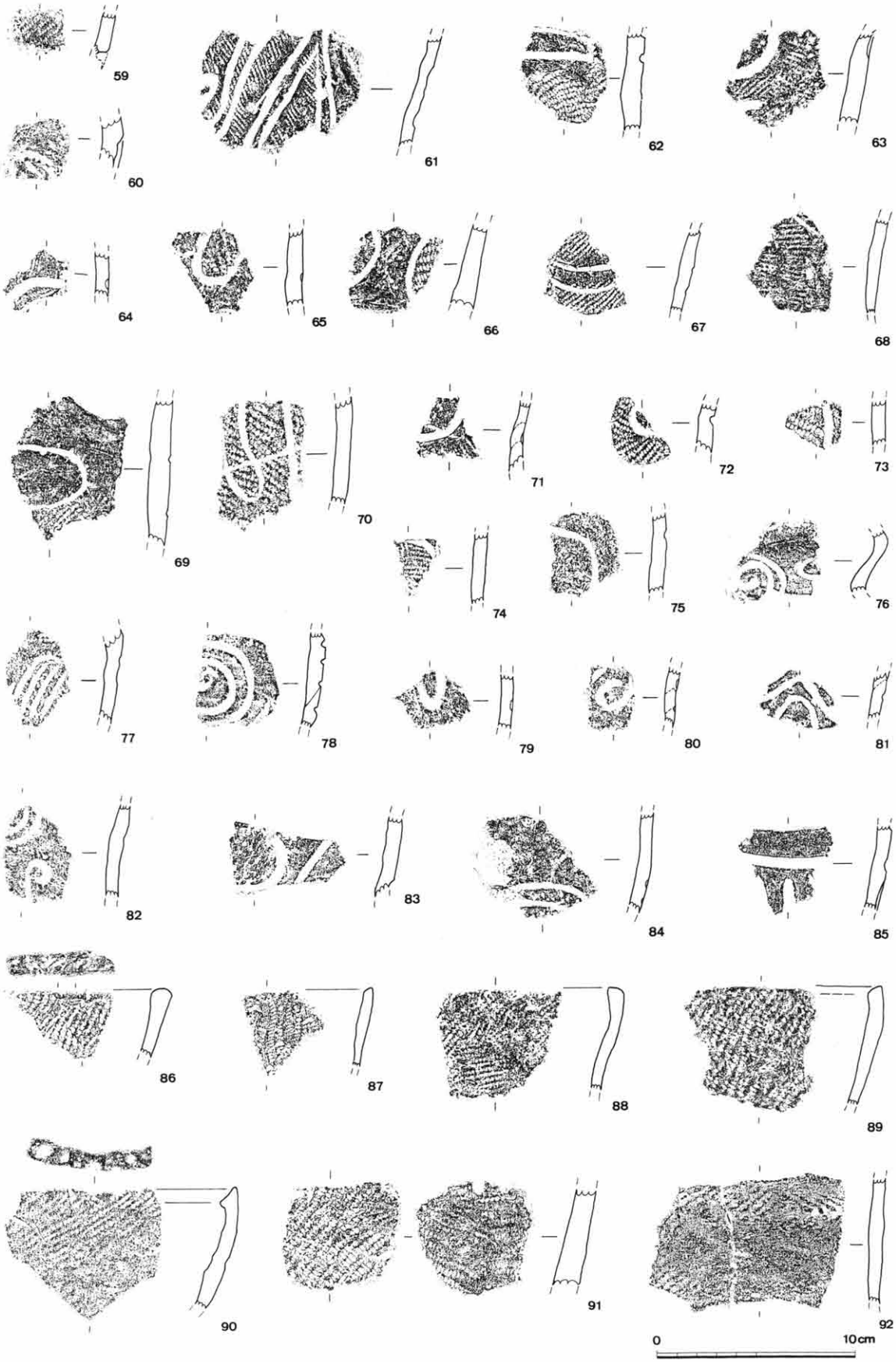
写真　沖田遺跡調査前風景（南西から）



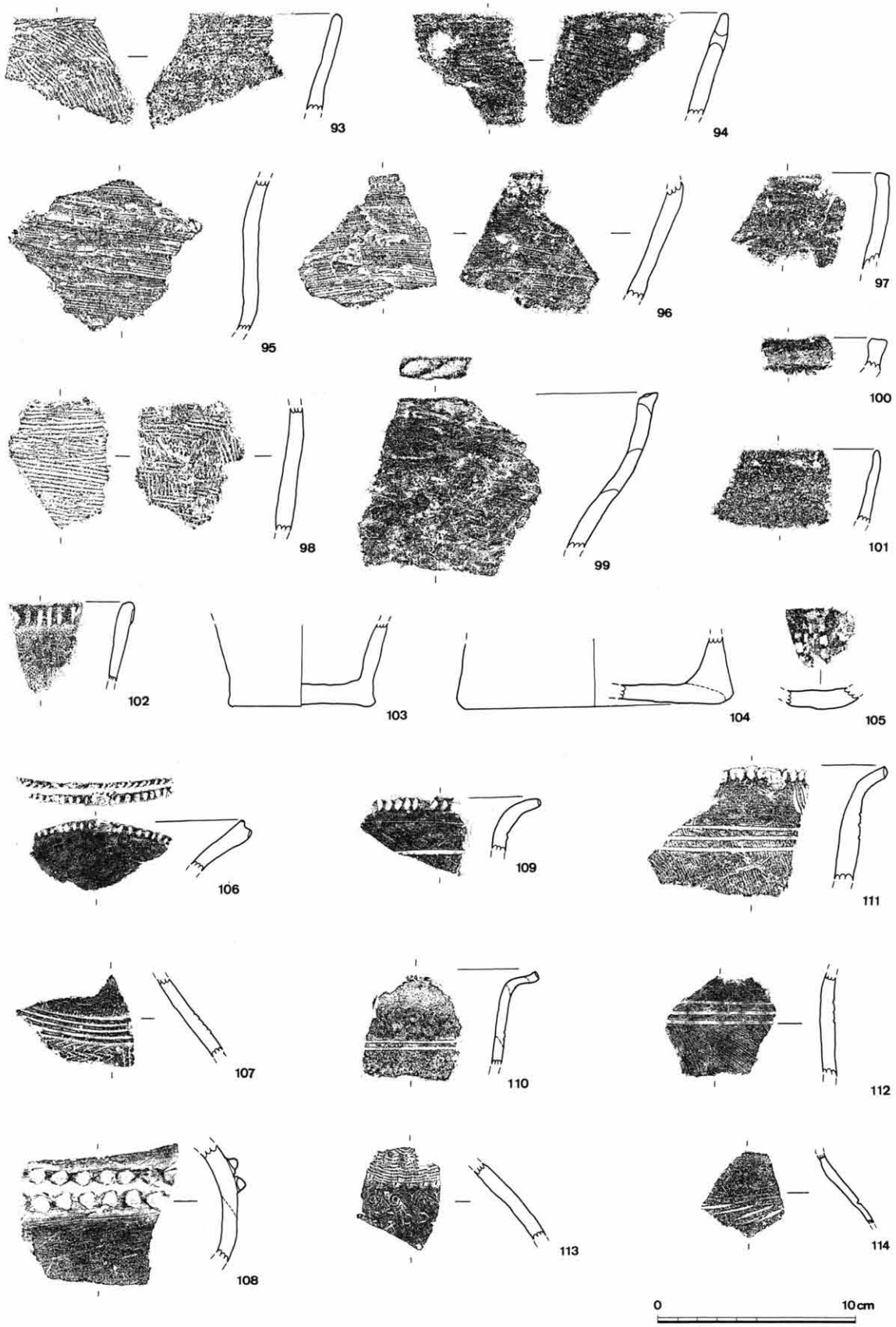
第２図　沖田遺跡出土遺物(1)



第３図　沖田遺跡出土遺物(2)



第４図　沖田遺跡出土遺物(3)



第５図　沖田遺跡出土遺物(4)

29～31は後円部の破片である。32は後期前葉に属する土器と考えられる。33～41は浅鉢形土器の口縁部片である。33～35は口縁部端の突起に横方向から穿孔されている。35はLRの縄文が施されている。39は口縁端部、器表面全面にLRの縄文が施されている。40は平式土器に見られる相互刺突が認められる。41は縄文時代後期に属する。42～85は有文深鉢形土器の胴部片である。42～50は垂下沈線を持つ北白川C式土器である。42～45は同一個体の可能性がある。51～60は沈線と刺突が施された土器片である。56～58は相互刺突が施された土器片である。59・60は沈線内に刺突が施されている。61～74は磨消縄文が施された土器片である。75～85は沈線を持つ土器片である。86～101は粗製土器片である。86～92は縄文が施された土器である。93～98は条痕文土器である。99～101は無文土器である。

時期不詳：102は口縁部外面が肥厚する土器で縦方向にキザミが認められる。103～105は底部である。

2．弥生土器(106～114)

弥生時代前期：106は壺の口縁部の破片である。口縁端面には板状工具の小口部によるキザミの後、沈線が中央部に施される。器表面の調整は内外面ともに横方向のミガキである。107は壺の肩部片で削り出し凸帯上に3条の沈線がめぐる。削り出し凸帯の下には貝殻工具よる縦方向の沈線に区画された中に羽状文が施される。器表面の調整は内外面ともにミガキである。108は壺の体部片で、胴部に2条の貼付け突帯があり上部にキザミが施される。器表面の調整は内面がナデ・ミガキ、外面がミガキである。109は端部にキザミを持つ甕の口縁部である。頸部にはヘラ描き沈線が1条めぐる。器表面の調整は内面がナデ、外面がハケ後ナデである。110は端部にキザミを持つ甕の口縁部である。胴部にはヘラ描き沈線が1条めぐる。器表面の調整は内外面ともにナデである。111は端部にキザミを持つ甕の口縁部である。頸部にはヘラ描き沈線が3条めぐる。器表面の調整は内面がナデ、外面がハケ後ナデである。112は甕の体部で3条の沈線がめぐる。器表面の調整は内面がナデ、外面がハケである。

弥生時代後期：113は壺の体部でスタンプ文を有する。114は甕の体部でヘラ状工具の小口面による列点文が施文されている。器表面の調整は内外面ともにミガキである。器表面の調整は内面がケズリ、外面がナデである。

ま と め

沖田遺跡と同じ竹野川流域の縄文時代遺跡としては下流の谷内遺跡(注4)、裏陰遺跡(注5)、菅外遺跡(注6)、正垣遺跡(注7)、シンボガイ遺跡(注8)、奥大野遺跡(注9)、枯木谷遺跡(注10)、松山遺跡(注11)がある。上流には五十河遺跡(注12)が所在している。沖田遺跡出土の縄文土器はこれらの遺跡の中でも、裏陰遺跡についで出土量が多く、貴重な資料と考えられる。谷内遺跡、裏陰遺跡、正垣遺跡、奥大野遺跡は縄文時代早期の押型文土器が出土している遺跡で、沖田遺跡の最も古い時期にも広く生活痕跡が大宮町に認められることがわかった。これまでのところ、どの遺跡でも遺構は検出されていないが、遺跡の密度が高い

ことから近い将来遺構が検出されることと考えられる。

なおこの資料紹介にあたっては、石尾政信、小島孝修、岡田憲一の各氏からご教示を賜った。文末ではあるが、記してお礼申し上げたい。

（なかがわ・かずや＝当センター調査第２課調査第２係調査員）
（やまぐち・さなえ＝奈良大学学生）
（まつだ・さえこ＝奈良大学学生）

注１　石尾政信「沖田遺跡第２次」（『京都府遺跡調査概報』第99冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2001　１～20頁

注２　奈良康正「沖田遺跡」（『埋蔵文化財発掘調査概報』　京都府教育委員会）　2001　35～38頁

注３　泉拓良「中期末の縄文土器の分析」（『京都大学埋蔵文化財調査報告』３）　1985

注４　①細川康晴「谷内遺跡第４次」（『京都府遺跡調査概報』第28冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1988　１～22頁

②三好博喜「埋もれた縄文土器(1)―正垣遺跡・谷内遺跡」（『京都府埋蔵文化財情報』第41号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1991　25～27頁

注５　杉原和雄・長谷川達ほか『裏陰遺跡発掘調査概報』　大宮町教育委員会　1979

注６　今田昇一『菅外遺跡発掘調査概報Ⅰ』　大宮町教育委員会　1990

注７　注４②と同じ

注８　今田昇一『シンボガイ遺跡・奥大野遺跡発掘調査概報』　大宮町教育委員会　1996

注９　注４②と同じ

注10　肥後弘幸・細川康晴・肥塚隆保「国営農地開発事業関係遺跡平成５年度発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報』　京都府教育委員会）　1994　69～166頁

注11　大宮町史編纂委員会編『大宮町史』　大宮町　1982

注12　引原茂治「五十河遺跡」（『京都府遺跡調査概報』第94冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2000　１～16頁

久我畷（こがなわて）の発掘調査

中島（松尾）　史子

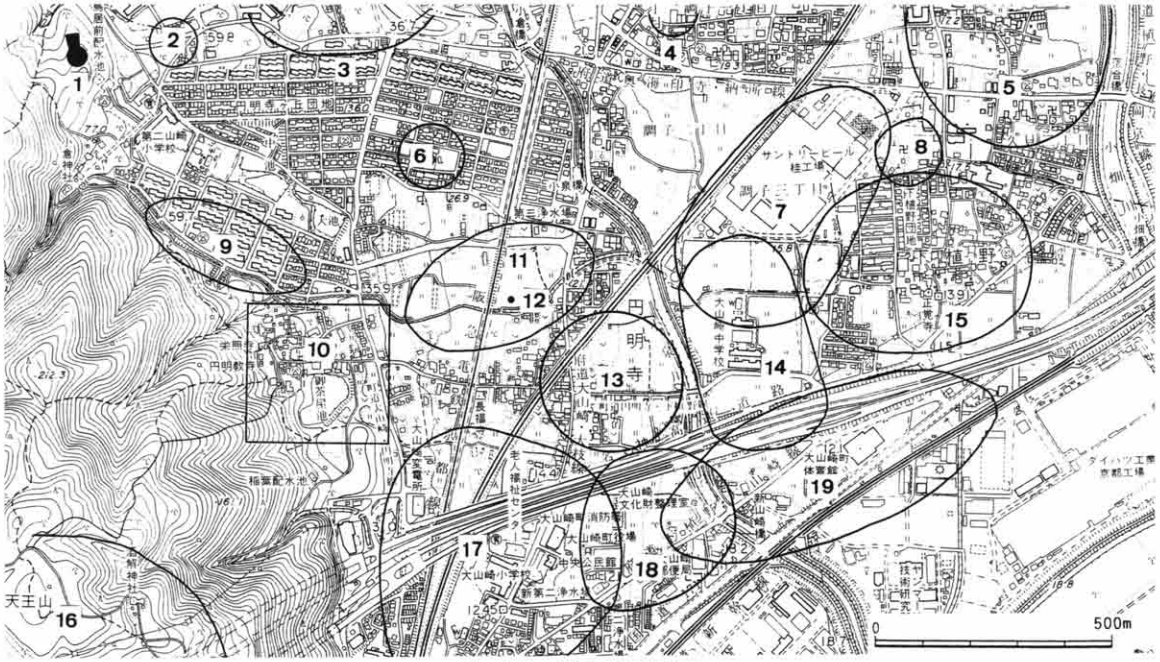
1．はじめに

久我畷は、現在まで道路として機能している古道である。『山城名勝誌』（巻之六）によると近世には「鳥羽より山崎迄の道」と認識されており、明治22年の測量図にも久我のあたりから下植野を通って山崎までの直線的な地割りとして残っている。歴史地理学の分野では、「久我畷は平安京から鳥羽の作り道を経て山崎に至る道で、山陽・南海併用道として平安京建都の際に計画された官道である」と考えられている。[注1] 考古学においては、長岡京跡左京第53次調査の成果により古代道路の両側溝が確認され、その敷設時期は平安時代前半に求められた。[注2]

本稿では、平成12年度から13年度にかけて実施した大山崎町下植野南遺跡での久我畷の調査概要を報告するとともに久我畷の変遷について整理してみたい。

2．久我畷の調査

下植野南遺跡では中央自動車道西宮線大山崎ジャンクション建設に伴い平成９年度から発掘調査を行っている。調査は、これまで国道171号線より北側の門田地区を主体に実施してきており、

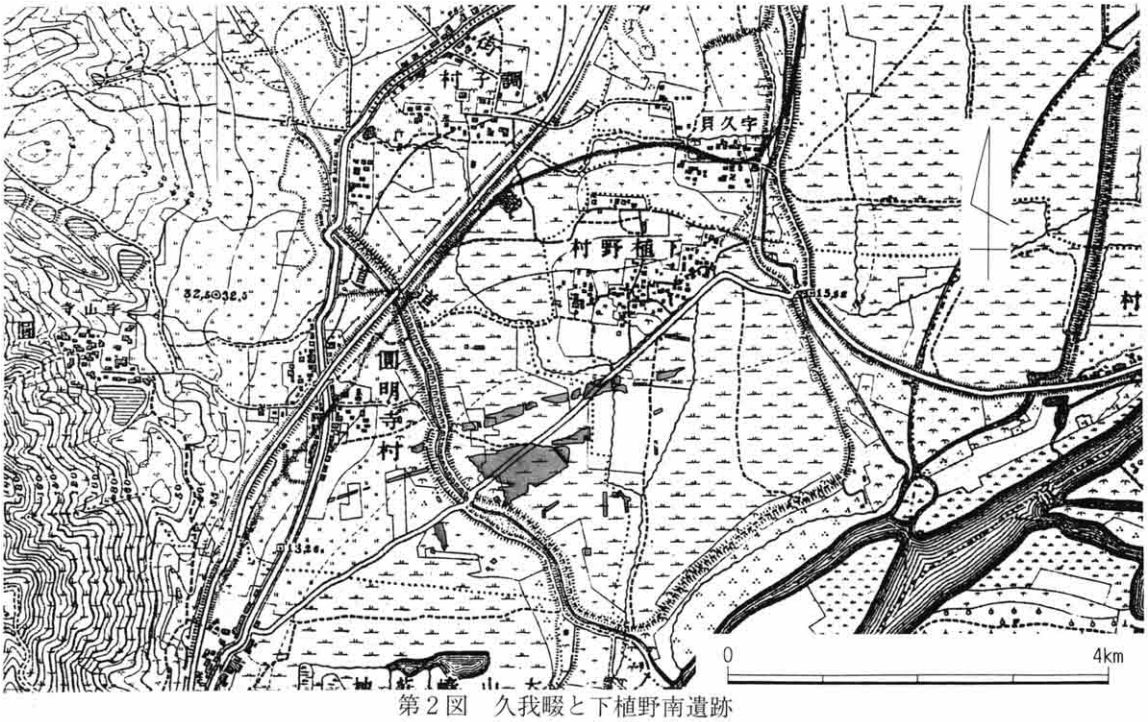


第１図　調査地位置図

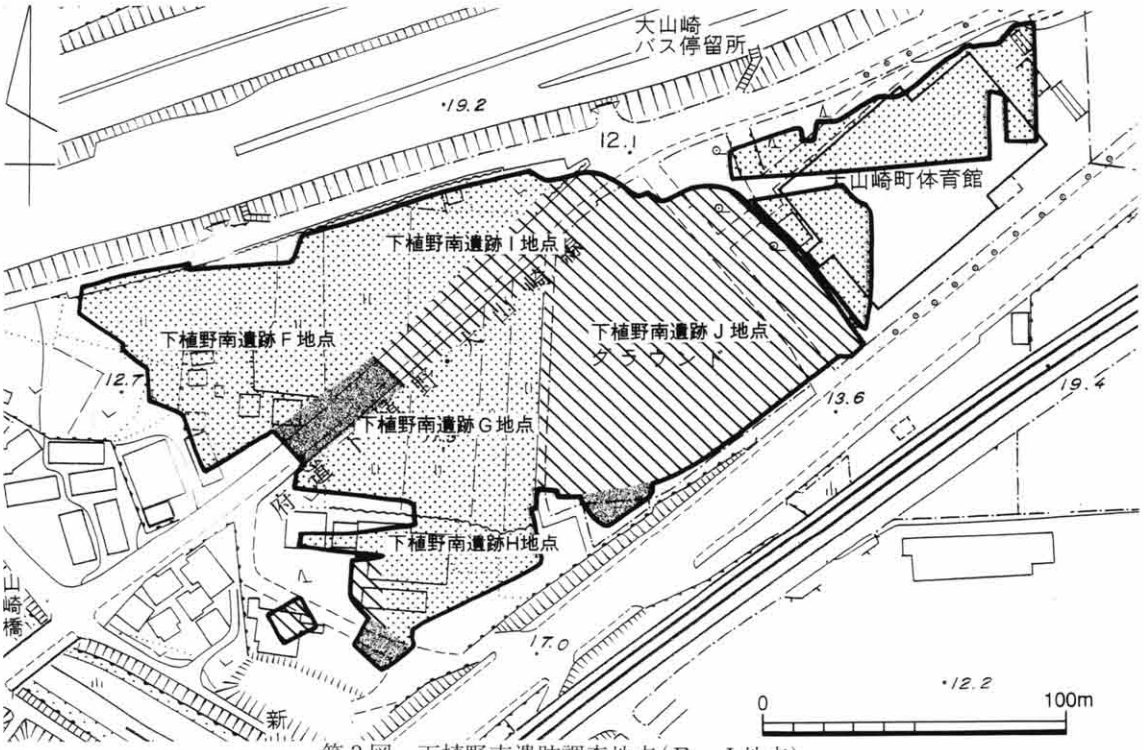
1．友岡遺跡　2．大縄遺跡　3．調子城跡　4．恵解山古墳　5．南栗ヶ塚遺跡　6．硲遺跡
7．脇山遺跡　8．境野古墳　9．石倉遺跡　10．鳥居前古墳　11．葛原親王屋敷跡　12．西法寺遺跡
13．円明寺跡　14．久保川遺跡　15．里後古墳　16．金蔵遺跡　17．松田遺跡　18．宮脇遺跡
19．下植野南遺跡

弥生時代中期の方形周溝墓群や古墳時代前期・後期および奈良時代の集落跡が確認されている。(注3)
門田地区のほぼ中央を走る府道121号線は、「久我畷」と推定されており、注目されていた。この府道部分については、道路の付け替え後、平成12年度から調査を行い、平成13年度８月末に調査を終了したところである。

府道部分の調査は全長約130mおよび、Ｉ地点という名称で調査を実施した(第３図)。府道には多くの埋設管があり、Ｉトレンチ(調査地中央部)、Ｉ－１トレンチ(調査地東部)、Ｉ－２ト



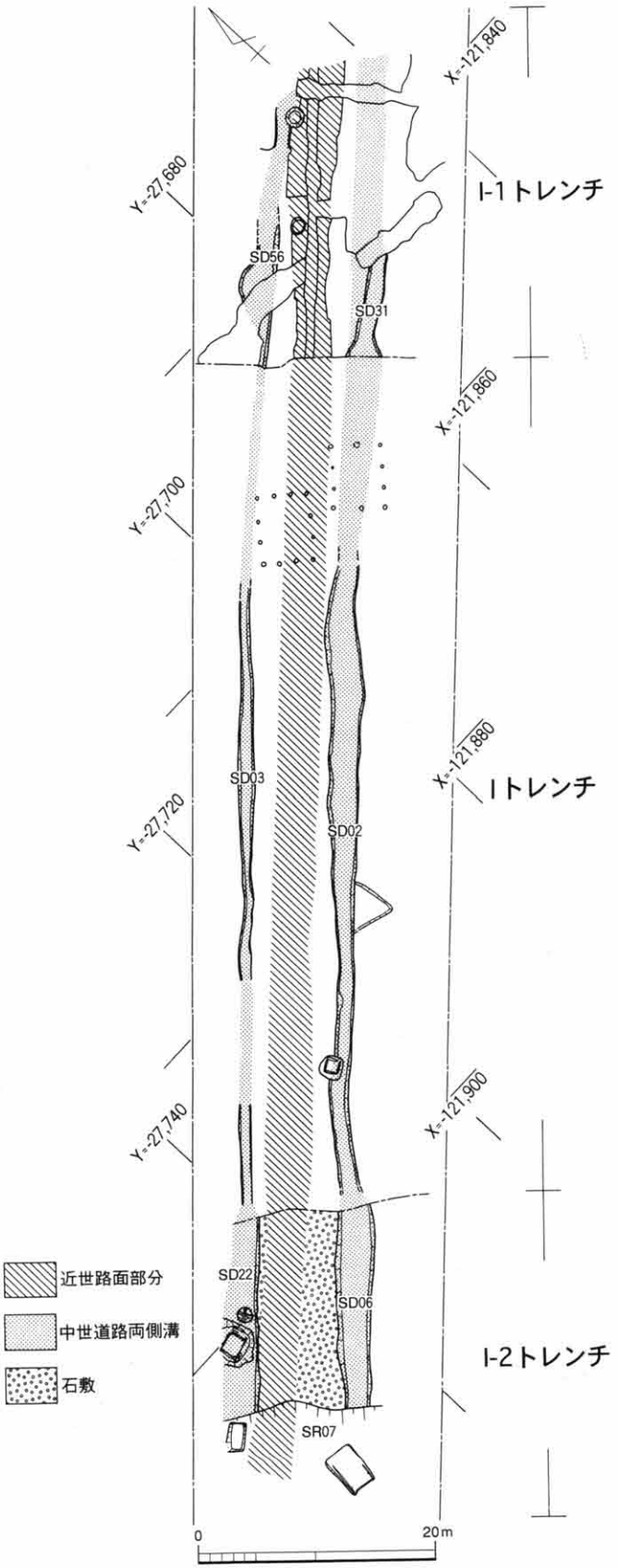
第２図　久我畷と下植野南遺跡



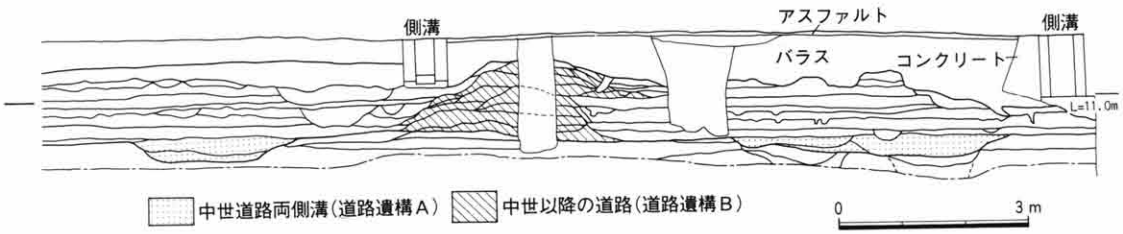
第３図　下植野南遺跡調査地点(Ｆ～Ｊ地点)

レンチ(調査地西部)の3地区に分割し、地区ごとに掘削方法を変えて調査した。Ｉトレンチでは、埋設管の攪乱が及んでいない深さまで慎重に重機で掘削したあと、人力による精査を行った。Ｉ－１・２トレンチでは、現道のアスファルトを除去したのち、人力掘削により順に調査を進めた。調査の結果、中世から現代までの道路遺構を長さ約100m分検出した。以下、トレンチごとに遺構の検出状況を説明する(第４図)。

Ｉトレンチでは、現道路面から深さ約1.7mの濁褐色礫混粘土上面で、道路側溝ＳＤ03・ＳＤ02を約60m分検出した。道路は北で約45°東に振れ幅は両側溝の心々間で約10mである。北側溝ＳＤ03は、幅約３m、深さ約0.2～0.3m、南側溝ＳＤ02は、幅約２m、深さ約0.2～0.3mである。道路部分に石敷きや轍跡などはなかった。両側溝の埋土からは土師器、須恵器のほか黒色土器、瓦器椀が出土した。なお、トレンチ東端での断面観察の結果、両側溝の埋没したあとに、その上に盛り土をして構築された道路遺構を確認した(第５図)。これにより久我畷は、側溝の間を路面とする時期と盛り土で構築された時期の大きく２時期に分けられることが明らかになった。説明の都合上、以下、前者を道路遺構Ａ、後者を道路遺構Ｂと仮称する。道路遺構Ｂは、現代の改修を除いて３回の大規模な盛り土が確認でき、それぞれ砂・



第４図　Ｉ、Ｉ－１・２トレンチ平面概略図



第５図　久我畷土層断面図

礫・粘土などを高さ約40cm積み上げて造られている。これらを古い方からＢ－１期、Ｂ－２期、Ｂ－３期とする。いずれの時期も道路の裾幅約６ｍ、路面幅約２ｍである。

なお、現道は道路遺構Ｂの上にバラス層とアスファルト舗装によってさらに約40cm盛り土して造られており、道路幅は側溝心々で約10ｍに拡張されている。

Ｉ－１トレンチでは、現代の排水管が合流する地点であったため良好な状態で遺構を検出することはできなかった。調査にあたっては、Ｉトレンチ東端で行った断面観察の結果と対照しながら道路遺構Ａ・Ｂの平面調査を行った。

道路遺構Ａには、北側溝ＳＤ56と南側溝ＳＤ31があり、Ｉトレンチと同じく現道路面から深さ約1.7ｍの濁褐色礫混粘土上面で、長さ約25ｍを検出した。両側溝はＩトレンチで検出したＳＤ03・ＳＤ02の延長線上にあり、同一の溝である。道路は北で約45°東に振れ、幅は両側溝心々間で約10ｍある。両側溝はいずれも幅約1.5～２ｍ、深さ約0.2～0.3ｍである。両側溝からの出土遺物はほとんど無かった。また、道路部分に石敷きなどの舗装や轍跡などはなかった。(注4)

道路遺構Ｂは、砂・礫・粘土などを堤状に積み上げたものである。前述のように、改修により３期に分けられる。積み上げ方に規則性などは見受けられなかった。Ｂ－３期の道路裾の両サイドでは杭列を検出した。道路の盛り土からの出土遺物は非常に少なく、道路の時期決定をするのに十分な資料は得られなかった。また、道路遺構の両側に広がる水平堆積土層は、花粉分析の結果、水田耕作に伴う堆積土であることがわかった。これらの水田耕作土および盛り土から出土した遺物により、この道路遺構の時期はおおよそ、Ｂ－３期は近代から現代にかけて、Ｂ－１期の構築時期は近世もしくは中世後半であると考えられる。

Ｉ－２トレンチは、他のトレンチに比べて攪乱部分が少なく、遺構の残り具合は比較的良好であった。遺構については、現道のすぐ下で道路遺構Ｂを、現路面から深さ約1.4ｍの青灰色粘土上面(注5)で道路遺構Ａの側溝であるＳＤ22(北側溝)とＳＤ06(南側溝)を検出した。

道路遺構Ａは北で約45°東に振れ、幅は両側溝心々間で約10ｍである。ＳＤ22とＳＤ06はいずれも幅約３ｍ、深さ約0.2～0.3ｍで、約17ｍ分を検出した。両側溝からの出土遺物はほとんど無かった。両側溝から１ｍ道路側(路肩)に杭列を検出した。また、道路部分には拳大の栗石が敷き並べられており、その上面および直下から宋銭が10点以上出土している。このことから、この路面は中世段階のものであるといえる。また、トレンチ西端では、両側溝が埋没したのち、ＳＲ07が道路を寸断している。この流路は幅10ｍ以上、深さ１ｍ以上で、Ｇ地点を挟んで南側のＨ地点で検出したＳＲ06とつながる。(注6)道路遺構ＢはＳＲ07が埋没してから構築されている。その規模な

どはⅠ－1トレンチと同様である。

以上のことから今回の調査概要をまとめると以下のようになる。

＜道路遺構Ａ：中世前半以前＞　道路の両側溝を約100m分確認した(第4図網かけ部分)。道路は北で約45°東に振れる。道路幅は溝の心々で約10mである。Ⅰ－1トレンチでは路面に石敷きを施してあった。石敷きの直上および直下では宋銭が出土しており、石敷きの路面は少なくとも12世紀中頃より後のものと考えられる。両側溝の出土遺物には瓦器や土師器などがあり、側溝の埋没時期は13世紀前半と考えられる。また、道路側溝検出面のさらに下層の面で奈良から長岡京期の建物が検出されていることから側溝の掘削時期が平安時代以降であることは確実である。なお、Ⅰ－1トレンチ西端で両側溝が流路によって寸断されていることから、久我畷が機能していない時期のあることがわかる。

＜道路遺構Ｂ：中世後半から現代＞　両側溝が埋没した後に粘土や砂礫を盛り上げて造った道路である。大規模な改修が少なくとも2回は行われていることから大きく3時期(Ｂ－1～3)にわけられる。規模はそれぞれ裾幅約6m、路面幅約2mで、裾部で道路遺構Ａの約半分の規模になっている(第4図斜線部分)。また、花粉分析により道の両側には水田が広がっていることが明らかになった。

このように、今回の調査地点における久我畷はその構造から4時期に分けることができ、Ａ→Ｂ－1→Ｂ－2→Ｂ－3の順に変遷していったと考えられる。

3．久我畷について

久我畷は、長岡京域を乙訓郡条里を斜断して鳥羽から大山崎に至る道で、歴史地理学では朱雀大路の延長線である「鳥羽作り道」(注7)と結びつく直線的道路であることから平安京造営に伴い建設された南海・山陽道併用道と推定されている。しかし、文献史料における初見は『徒然草』195段(注8)で、鎌倉時代以降のことである。平安時代については久我畷に関する記述はなく、むしろ西国街道を利用している例がみられる(注9)ことから、10世紀ごろには西国街道が実用的な道路として機能していたと考えられる(注10)。また、『太平記』に「さしも深き久我畷の、馬の足もたたぬ泥土の中」、「久我縄手は、路細く深田なれば」などと表現されているように、当時の久我畷は馬が脚をとられるような状態であったことがわかる。その後、応仁元(1467)年、応仁の乱の際には山名氏と細川氏が「久我縄手」において合戦をしている。少し時代は下って、天正10(1582)年に秀吉が明智光秀と天王山を挟んで対峙したとき、「青龍寺城」へ兵が行き来するのに「久我縄手」を使用している(注11)。近世には、部分的に参勤交代に使用されていたようであるが、「渺渺たる野径」であったという(注12)。このように文献史料では14世紀以降の久我畷の様子や利用状況はうかがえるが、それ以前の様相については不明である。また、文献には初見から「縄手」・「畷」と表現されていることや(注13)、『太平記』の記述から、14世紀前半にはそれまでの道路としての機能は低下し、水田地帯を通る畔道のようになっていたと考えてよいであろう。

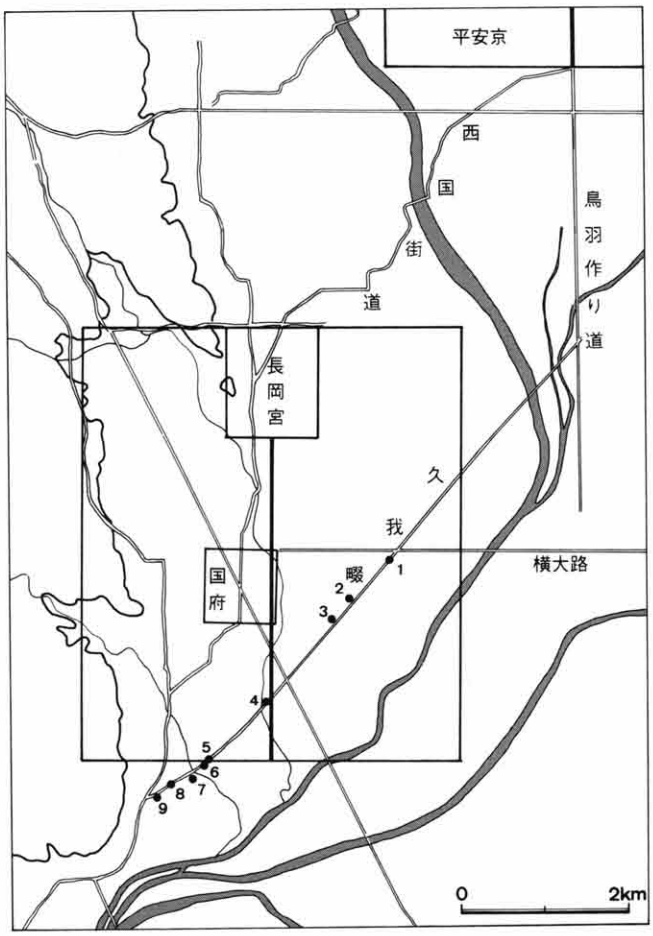
また、近世においては絵図などでも久我畷が描かれており、明治から戦後しばらくまでの地図

には久我から山崎までの約６km分の痕跡がよく残っている[注14]。その後、高度経済成長期に名神高速道路ができ、国道171号線沿いに工業地帯が発達すると神足から下植野にかけての一帯において久我畷は開発のためとぎれとぎれに痕跡を残すのみとなっている。

久我畷に関する発掘調査はこれまで９地点で行われた（第６図）。道路関連の遺構が確認された[注15]のは、長岡京跡左京第53・28・230、右京第466次調査および今回の調査で、そのうち、久我畷の変遷を現代まで追えるのは今回の調査と長岡京跡左京第53次調査の２件である。

まず、長岡京跡左京第53次調査では、４期にわたる道路遺溝が確認された。第１期の道路は、両側溝をもち、側溝心々で幅約９ｍである。側溝の出土遺物から「平安京遷都後の早い時期」に掘削されたと考えられている。第２期以降の道路遺構は砂礫を盛り上げて構築され、裾幅約６ｍ、路面幅約２ｍと狭くなる。出土遺物から第２期は12世紀以前、第３期は13世紀末から14世紀初頭と考えられている。第４期の道路は現在の農道である。

つぎに、長岡京跡左京第28次調査[注16]では、13世紀末から14世紀初頭の久我畷西側溝が約30ｍ分確認された。長岡京跡左京第230次調査[注17]では近世段階の久我畷西側溝が確認されたのみである。



第６図　久我畷の調査地点（注１文献より加筆・転載）
1．長岡京跡左京第53次　2．長岡京跡左京第28次
3．長岡京跡左京第72・73次　4．長岡京跡左京第230次
5．長岡京跡右京第466次　6．下植野南遺跡Ｉ地点
7．長岡京跡右京第156次　8．算用田遺跡（IK-60）
9．大山崎町遺跡確認調査第23次

長岡京跡右京466次調査[注18]では、現道直下で路肩保護をした近世の道路側溝１条と12世紀以前の道路側溝２条が検出されている。後者の道路幅は側溝心々で約８ｍである。

また、算用田遺跡（IK－16次調査[注19]）や大山崎町遺跡確認調査第23次調査[注20]では道路関係の遺構は無く、平安期の洪水堆積層が確認されている。

以上の考古学の成果から明らかにできる久我畷は、当初は両側溝を掘削する幅約８～10ｍの道路で、中世後半段階には砂や礫などを積み上げて構築した裾幅約５～６ｍの道路になり、現代にいたる。後者はまさに文献に見える畔道の久我畷であり、前者は文献史料に現れない時期すなわち14世紀以前の様相であるといえるであろう。

これまでの久我畷に関する研究は、歴史地理学を中心に進められており、大方は足利説によるものである[注21]。そして、長岡京跡左京第53次調査の成果を

受けて、久我畷の敷設を平安京造営時とする足利説が実証されたとした。これに対し、岩松は遺物の出土状況などから積極的な根拠とはならないとし、鳥羽離宮造営時に伴うものと考えた。[注22] 確かに、岩松が指摘するように、左京第53次調査の道路側溝出土遺物は小破片であり点数もわずかに過ぎないことなどから、考古学的には現在のところ久我畷の敷設時期を平安京遷都時に求める積極的な根拠はなく、推定の域を出ない。

この問題については、今後、久我畷敷設の歴史的意義をふまえたうえで西国街道や「鳥羽作り道」など周辺の道路交通網を視野に入れ総合的に検討していく必要があるだろう。

4．まとめ

今回の一連の調査では、中世後半から現代にいたる久我畷の規模、構造および変遷を追うことができた。具体的には、久我畷は、敷設当初は２条の側溝を掘削して路面を形成する幅約10mの道路で、部分的に石敷きが施されていた。その後、早くて中世後半段階には道幅を狭めて盛り土により道路を構築し、改修をしながら現代にいたっていることが明らかになった。中世後半以降の様相については文献史料から想定できる久我畷と大差ないものと考える。

本稿では久我畷の調査について概要を報告したが、整理作業が継続中であり、遺構の時期についてはさらに検討する必要がある。詳細については概報および報告書にゆずりたい。

これまでの道路関係の調査において、現道部分を調査し、その変遷を追うことができた例はほとんどない。そういう意味でも今回の調査は非常に貴重であり、道路遺構の研究に貴重な資料を追加したといえよう。

（なかじま（まつお）・ふみこ＝当センター調査第２課調査第１係調査員）

注１　足利健亮「第２節　国府と古道」（『向日市史』上巻　向日市）　1983
足利健亮「平安京南の計画道路体系」（『日本古代地理研究』大明堂）　1985

注２　戸原和人ほか「長岡京跡左京第53次（7ANMSB地区）調査概要」（『長岡京市文化財調査報告書』第14冊　長岡京跡発掘調査研究所）　1985

注３　石井清司ほか「名神大山崎ジャンクション関係遺跡平成10年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第90冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1999
松井忠春ほか「名神大山崎ジャンクション関係遺跡平成11年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第95冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2000
石井清司「平成12年度下植野南遺跡（上層）の発掘調査」（『京都府埋蔵文化財情報』第81号　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2001

注４　ＳＤ31（南側溝）の南側に薄く細かい石を敷いた面があったが性格は不明である。石敷き上面からは北宋銭が出土している。

注５　青灰色粘土層は30cmの厚さで、その下が奈良時代以前の遺構面である濁褐色礫混粘土上面となるが、その間には遺構・遺物はなかった。

注６　調査地の約100m西には小泉川が流れており、この流路についてはこれまでの調査成果から旧小泉川の洪水に伴うものであると考えている。ＳＲ06の埋没時期は出土遺物から13世紀代と考えられる。

注７　「鳥羽作り道」についても『徒然草』にみえることから14世紀には存在していたようであるがいつ敷設されたか明らかでない。

注９　『親信卿記』天延２(974)年閏10月25日条で、当時検非違使であった平親信が津巡りのため京から山崎や淀に向かう際に、また、『土佐日記』によると、承平５(983)年、紀貫之が土佐から都へ帰る途中、山崎で舟を降りて京に向かう際に、西国街道に相当するルートを辿っている。

注８　「ある人久我縄手を通りけるに」とあり、『徒然草』の書かれたときには久我畷が存在していたことがわかる。

注10　足利は『太平記』の記述より久我畷の大きな弱点として低湿性を指摘し、その性格を儀式的な通行の際の利用に限定。西国街道がそのバイパスとして実質的な機能を果たしていたとする。

注11　『豊鑑』(『群書類従』第20号)

注12　『山州名跡志』巻11、『拾遺都名所図會』巻４

注13　『大漢和辞典』によるといずれも「たんぼみち・あぜみち」の意味である。

注14　山口恵一郎ほか『日本図誌大系』近畿Ⅱ　朝倉書店　1973

注15　左京第72・73次調査および右京第156次調査では久我畷関連の遺構は確認されていない。竹井治雄「長岡京跡右京第156次調査」(『京都府遺跡調査概報』第15冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1985

注16　戸原和人ほか「長岡京跡左京第28次(7ANMSB地区)調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第14冊　長岡京跡発掘調査研究所)　1985

注17　小田桐淳「左京第230次(7ANMJN地区)調査略報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成元年度　(財)長岡京市埋蔵文化財センター)　1991

注18　戸原和人「名神高速道路関係遺跡平成６年度発掘調査概要(9)長岡京跡右京第466次　下植野工区Ｃ－６地区(7ANTTD-5)」(『京都府遺跡調査概報』第69冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1996

中川和哉・野島永『下植野南遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第25冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1999

注19　中川和哉「算用田遺跡発掘調査概要(IK-16)」『京都府遺跡調査概報』第53冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1993

注20　古閑正浩「大山崎町第23次遺跡調査(7YYMS'HK-3地区)略報」(『大山崎町文化財年報』平成７年度　大山崎町教育委員会)　1996b

注21　金田章裕「第３章　第４節　大山崎の条里」(『大山崎町史』大山崎町)　1983

高橋美久二『古代交通の考古地理』大明堂　1995

注22　岩松保「西国街道の成立と変遷」(『百々遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第24冊)　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1998

注23　戸原和人「平安京への山陽道新設の意義」(『京都府埋蔵文化財論集』第３集　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1996

共同研究

方形周溝墓の成立

藤井　整

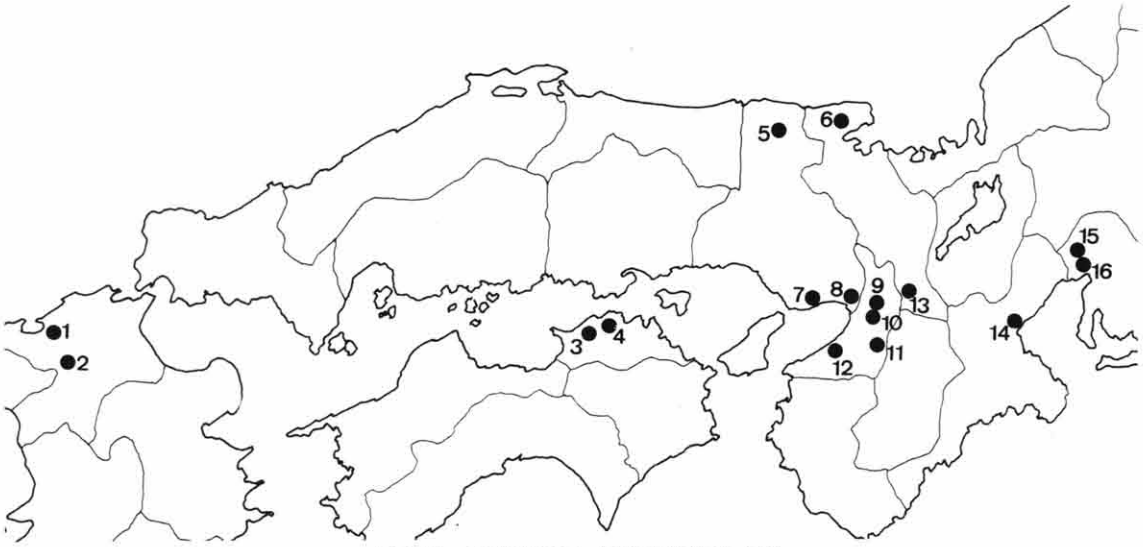
1．はじめに

近畿地方の弥生時代を代表する墓制である方形周溝墓は、その分布から畿内で成立した墓制と位置づけられてきた[注1]。そしてその起源については大陸や半島の系譜、あるいは渡来人の影響によるものとの理解が示されてきた[注2]。しかし近年、韓国忠清南道寛倉里遺跡[注3]で松菊里式段階にまで遡る可能性のある方形周溝墓群が報告されると、その関係についても積極的に評価されるようになった[注4]。

こうした状況に呼応するように、前期に遡る可能性のある方形周溝墓は、西日本を中心に報告例が増加している。しかし、この中には方形周溝墓の認定自体に問題があるものも散見される。小論では時期比定の根拠が少量の土器片によるものや、方形周溝墓の可能性はあるが、内容の明らかでないものを分析対象から外すことで、初現期の様相をより明確にしたい。その上で方形周溝墓の成立とその背景について考えることにしたい。

2．畿内の方形周溝墓

ここで問題とするのは、弥生時代前期に属する方形周溝墓である。この時期の方形周溝墓は、



第１図　前期の主な方形周溝墓分布図

1．板付田端遺跡　2．東小田峯遺跡　3．龍川五条遺跡　4．佐古川・窪田遺跡　5．駄坂・舟隠遺跡
6．七尾遺跡　7．雲井遺跡　8．東武庫遺跡　9．東奈良遺跡　10．古川遺跡
11．田井中遺跡　12．池上・曽根遺跡　13．稲葉遺跡　14．松ノ木遺跡　15．山中遺跡
16．朝日遺跡

近畿地方を中心に、瀬戸内東部地域や東海地方の一部、丹後・但馬などの日本海側の地域にも分布する。その中心となるのは畿内地域である。

畿内における方形周溝墓の初現となるのは、尼崎市東武庫遺跡である[注5]。東武庫遺跡では、前期中段階から中期初頭にかけての方形周溝墓22基が検出されている。うち６基の方形周溝墓で埋葬施設が確認されているが、いずれも木棺墓である。畿内では最も古い事例であり、中段階まで遡る可能性が指摘されている。この遺跡を嚆矢として、畿内の全域で次々と方形周溝墓が造営されることになる。近年八尾市田井中遺跡[注6]や京田辺市稲葉遺跡[注7]など、前期に比定される方形周溝墓の報告例が増加しつつある。未だ大和、河内といった地域の状況がやや不鮮明ではあるが、今後これらの地域でも前期に属する方形周溝墓の事例は、増加するものと考えられる。

埋葬施設数には単数埋葬と複数埋葬が、当初から両方とも存在する。神戸市雲井遺跡では、周溝内埋葬も報告されている[注8]。埋葬施設は、木棺墓、土壙墓、土器棺墓があり、集まって墓域を形成する。

棺内からの遺物としては、東武庫遺跡で竪櫛が、神戸市新方遺跡で鹿角製指輪や猪牙製腰飾が出土した事例があるが、副葬ではなく着装状態の可能性が指摘されている。埋葬施設から石鏃が出土する場合があるが、石鏃の先端が揃って出土しない、基部または先端を欠くものが多いなどの理由から、副葬品とは考えにくい。また、この地域では管玉などの石製装身具の出土報告例はない。

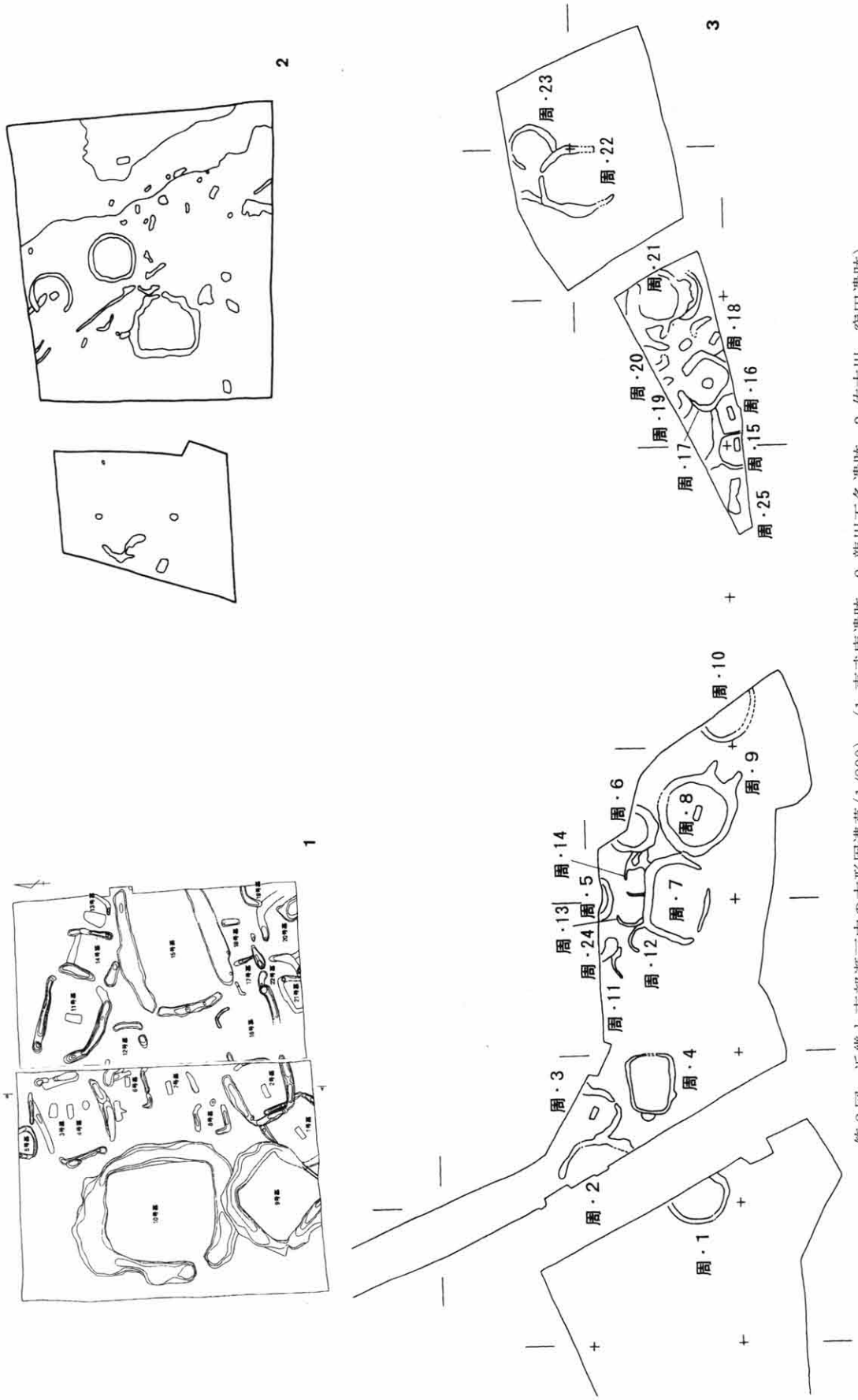
畿内の方形周溝墓の特徴は、以下のように整理できる。①最も古いものは、前期新段階には確実に存在し、一部は中段階まで遡る可能性がある。②埋葬施設数は、単数埋葬と複数埋葬が当初から両方とも存在する。③埋葬施設には木棺墓、土壙墓、土器棺墓がある。④石製装身具の類は埋葬時には身につけない。⑤中期、後期にも継続的に採用される。

３．東部瀬戸内の方形周溝墓

讃岐地域における方形周溝墓は、善通寺市龍川五条遺跡[注9]と、綾歌郡綾南町佐古川・窪田遺跡[注10]が挙げられる。龍川五条遺跡では、前期中葉から後葉にかけての方形周溝墓１基と円形周溝墓２基が報告されている。また、佐古川・窪田遺跡では、前期後葉から中期初頭にかけての方形周溝墓と円形周溝墓あわせて40基が報告されている。

２つの遺跡では、ともに若干の埋葬施設が検出されているが、いずれも木棺墓であると考えられている。特に佐古川・窪田遺跡周溝墓３と同周溝墓15では管玉がそれぞれ２点、龍川五条遺跡ＳＴ04方形周溝墓からは６点の管玉が出土しており、石製装身具を着装せずに埋葬する畿内でのあり方とは若干異なっている。

瀬戸内地域から山陰地域にかけては、礫石使用墓と木棺墓、土壙墓の組合せが基本的な墓制であり、方形周溝墓が検出された２遺跡より東に位置する徳島市庄・蔵本遺跡[注11]でも礫石使用墓が検出されている。つまり方形周溝墓が検出された２遺跡は、この礫石使用墓の分布範囲に嵌入するように位置し、かつ排他的に分布することになる。



第2図　近畿と東部瀬戸内の方形周溝墓(1/800)　(1.東武庫遺跡　2.龍川五条遺跡　3.佐古川・窪田遺跡)

東部瀬戸内の方形周溝墓の特徴は、以下のように整理できる。①時期的には前期中葉から中期初頭にかけて造営される。②埋葬施設数には単数埋葬と複数埋葬がある。③埋葬施設は木棺墓、土壙墓が確認されている。④中期初頭以降には継続しない。⑤周辺での墓制と排他的に存在する。⑥石製装身具は着装状態で埋葬される。

特に注目されるのは、周辺に礫石使用墓が分布する地域でありながら、方形周溝墓が検出された遺跡ではその墓制を共有せず、排他的に分布するという点である。

4．丹後・但馬の方形周溝墓

丹後・但馬地域では、中郡峰山町の七尾遺跡(注12)と豊岡市駄坂・舟隠遺跡(注13)が前期後葉の事例として報告されている。いずれも尾根上に位置する方形台状墓である。

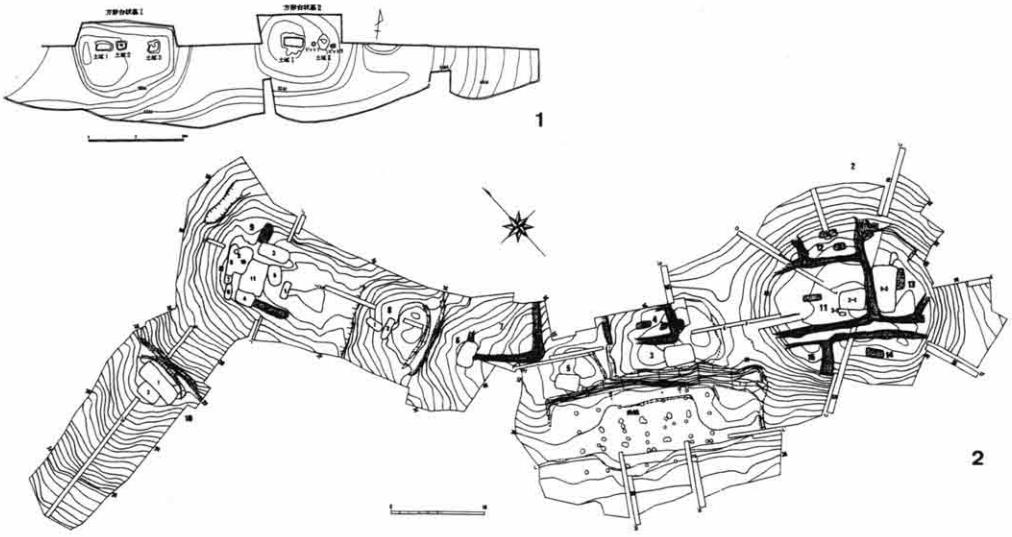
七尾遺跡では前期後葉の方形台状墓２基が、駄坂・舟隠遺跡では前期後葉から中期初頭の方形台状墓８基が検出されている。駄坂・舟隠遺跡13号墳では、先端が欠損した打製石鏃１点とともに、管玉125点以上が埋葬施設内から出土している。この地域も東部瀬戸内地域と同じく、石製装身具が着装状態である点において、畿内と異なる習俗を有しているといえる。

丹後・但馬地域の特徴は以下のように整理できる。①時期的には前期後葉に出現する。②埋葬施設数は単数と複数の両方が存在する。③埋葬施設は土壙墓、木棺墓、土器棺墓がある。④中期以降にも継続する。⑤石製装身具の副葬が認められる。⑥立地が丘陵上に位置し、方形台状墓となる。

5．前期における副葬墓の問題

以上のように各地域における出現期の方形周溝墓の状況を概観した。このうち、畿内とそれ以外の地域で認められた差異のうち、副葬品(着装品)の特徴について検討を加えることにしたい。(注14)

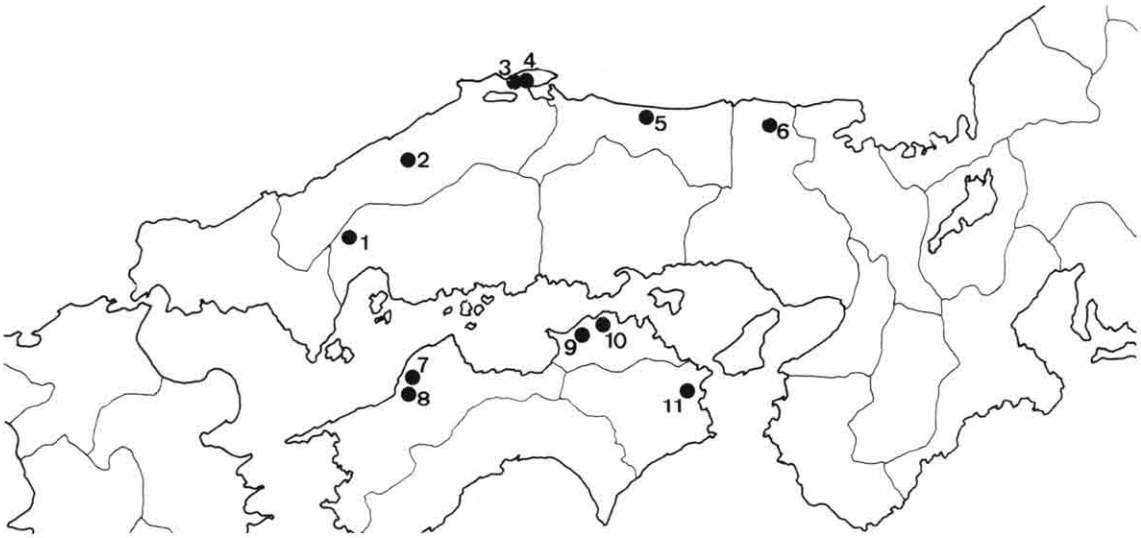
畿内地域で副葬品(着装品)が検出されたのは、東武庫遺跡の赤漆塗結歯式竪櫛(注15)と、新方遺跡の



第３図　丹後・但馬の方形周溝墓(1/800)　(1.七尾遺跡　2.駄坂・舟隠遺跡)

付表　弥生時代前期の石製装身具副葬墓（九州を除く）
（棺内出土のものに限る。数値のないものは１点）番号は第４図に準ずる

番号	遺跡名	所在地	遺構名	埋葬施設	副葬石製装身具
1	岡の段Ｃ地点遺跡	広島県山県郡大朝町	SK46	木棺墓	碧玉管玉49
			SK47	木棺墓	碧玉管玉12
			SK82	木棺墓	碧玉管玉
			SK90	木棺墓	碧玉管玉2
			SK91	木棺墓	碧玉管玉
			SK92	木棺墓	碧玉管玉15
			SK106	木棺墓	碧玉管玉5
			SK109	木棺墓	碧玉管玉
			SK115	木棺墓	碧玉管玉3
			SK126	木棺墓	碧玉管玉2
2	沖丈遺跡	島根県邑智郡邑智町	A群1号墓	－	凝灰岩製管玉36
			A群2号墓	－	凝灰岩製管玉16
			A群5号配石墓	木棺墓	凝灰岩製管玉16
			A群6号墓	－	凝灰岩製管玉44
3	古浦遺跡	島根県八束郡鹿島町	35号人骨	不明	管玉2
			49号人骨	不明	管玉7･勾玉
4	堀部第１遺跡	島根県八束郡鹿島町	2号墓	木棺墓か	管玉4
5	長瀬高浜遺跡	鳥取県東伯郡羽合町	SXY01	土器棺墓	碧玉製管玉42
6	駄坂・舟隠遺跡	兵庫県豊岡市	13号墓	木棺墓	管玉125点以上
7	持田町３丁目遺跡	愛媛県松山市	土器棺４	土器棺墓	管玉
			SK01	木棺墓	管玉
			SK02	木棺墓	管玉2
			SK03	木棺墓	管玉3･勾玉
			SK08	木棺墓	管玉18
			SK09	木棺墓	管玉2
			SK11	木棺墓	管玉2
			SK32	木棺墓	管玉10･磨製石剣
			SK40	木棺墓	勾玉
8	西野Ⅲ遺跡	愛媛県松山市	52号土壙墓	土壙墓	管玉15
9	龍川五条遺跡	香川県善通寺市	ST04方形周溝墓	木棺墓	碧玉製管玉6
10	佐古川・窪田遺跡	香川県綾歌郡綾南町	周溝墓03	木棺墓	管玉2
			周溝墓15	木棺墓	管玉2
11	庄・蔵本遺跡	徳島県徳島市	土壙墓3	土壙墓	管玉12
			配石墓11	土壙墓	管玉5



第４図　弥生時代前期の石製装身具副葬墓位置図

鹿角製指輪、猪牙製腰飾の事例[注16]である。これらは、出土状況からいずれも着装品と考えられるが、石製装身具の着装ないし副葬の事例は報告されていない。もちろんこの時期の畿内地域にも管玉などの石製装身具は存在しており、埋葬時にこれらの着装品が外されている可能性が高い。これらの装身具の着装、非着装は、それぞれの装身具のもつ呪的な性格による区別と考えられよう。つまり、東武庫と新方の事例は、遺物の分類としては着装品であるが、埋葬時に外されるものと外されないものが存在した可能性が指摘できることから、意味合いとしては副葬品としての側面を持つといえよう。

畿内の状況と異なるのが、讃岐、丹後、但馬の各地域である。先にも簡単にまとめたように、方形周溝墓が検出された4遺跡のうち、七尾遺跡を除く3遺跡では、埋葬施設から石製装身具が出土している。こうした管玉などの石製装身具を着装したまま埋葬するあり方は、瀬戸内地域から山陰にかけての礫石使用墓などに認められる特徴である(付表)。

山県郡大朝町岡の段C地点遺跡[注17]では、SK46に49個の碧玉製管玉が副葬されるのを最多に、複数の埋葬施設から管玉が出土する。管玉の多くは、胸部周辺と考えられる位置から集中して出土しており、胸部装身具を着装したまま埋葬されたものと考えられる。こうした状況は、邑智郡邑智町沖丈遺跡などでも同様であり、この地域の墓制における普遍的なあり方であるといえる[注18]。つまり、先述した3遺跡では、畿内的な方形周溝墓という墓制と、瀬戸内・山陰的な埋葬習俗の折衷的な様相をもっているといえるのである。

以上のような視点から見れば、畿内周辺部における方形周溝墓のあり方は、より純粋ではないと位置づけられよう。

6．方形周溝墓の成立

以上のように、方形周溝墓の分布する各地域の様相を簡単にまとめてきた。次に、これらの地域の特質から、方形周溝墓の成立について考えてみたい。

前期に遡る可能性の指摘される方形周溝墓は、近年増加する傾向にあるが、根拠となる遺物が少量の土器片であるなど、あくまで可能性の域を脱し得ないものが多い。また、その成立時期についても前期中段階に求められるものがいくつか報告されるようになったが、やはりこれも細片の土器を根拠とするもので、未だ可能性があるという所に留めておく必要があろう。確実なものとしては、前期新段階が成立時期とみておきたい。

この墓制の成立については、畿内自生説が最も有力であった。ただし、自生とはいえ大陸からの影響、系譜、伝播などが指摘されており、いずれも弥生文化の新来要素として評価されてきた。近年半島で寛倉里遺跡が報告されると、半島からの直接的な伝播も論議されるようになった。さらに各地域で前期に遡る方形周溝墓の事例が報告されるようになると、国内における多元的発生が考えられるようになり、そこに渡来人の直接的な関与も指摘された。これらの説は、それぞれ分布論からの考察によるものであるが、先に指摘したとおり、根拠となる遺物が墓に伴うと断定できないなど、あくまで可能性の域を脱し得ないものを評価している場合もあり、いずれも決め

手を欠く状況にある。

この諸説を整理すると、①「影響」ないしは系譜を国外に求めるもの、②文化要素として「伝播」すると考えるもの、③渡来人の「直接」的な関与によるとするものに大きく分類できる。今回の分析から、②「伝播」と③「直接」については、否定しうると考える。

方形周溝墓の「伝播」には、瀬戸内ルートと山陰ルートが想定される。前者の伝播経路となりうる北部九州では、いくつか墳丘墓の可能性が指摘されるものがある。東小田峯遺跡では、前期前葉に遡る墳丘墓が報告されているが、この地域でもその後の継続性は乏しい[注19]。また、東小田峯遺跡を基軸とする瀬戸内地域を介しての伝播も、地理的、時間的な開きが大きく、かつこの地域でも継続性は乏しい。

また、山陰ルートの経路と考えられる丹後・但馬地域では先にも触れたように、畿内以西の墓制や習俗の影響を受け、折衷的な様相を見せており、この地域が主体的に方形周溝墓成立に関与したとは考えられない。また、方形周溝墓と礫石使用墓は互いに排他的な分布を示しており、山陰地域を経ての伝播も現時点では根拠を欠く[注20]。つまり、墓制の伝播という考え方では説明できないのである。

また、この墓制の成立にあたり、渡来人が「直接」何らかの役割をはたしたか否かという問題については、この墓制が現時点では瀬戸内ルートでも、山陰ルートでも半島に行き着かないことから、否定的な立場をとりたい。ただし、「方形に区画する」という思想に外来的要素があることは否定できない。方形周溝墓が畿内で成立すると考えても、その「方形に区画する」という思想そのものは、最終的には半島ないしは大陸に求める必要があるだろう。しかし、これはあくまで思想の根源をもとめるということであり、半島からの移住者、つまりは渡来人がこの墓制に直接関係したということを意味しない。もちろん北部九州やその周辺地域における渡来人の存在については否定するものではないが、畿内においては、北部九州と比較してもいくつかの弥生文化要素が欠落しており、また渡来人が形成したと考えられる集落も未だ報告されていないのである。

以上の理由から、渡来人の足跡を認めることはできず、また墓制だけが畿内に直接影響を与えるといった考え方も困難であろう。方形周溝墓の継続性や墓制の属性は、畿内が最も純粋な形で継続することが明らかであり、方形周溝墓は、半島ないしは大陸の「影響」を受け、畿内で成立したものと位置づけるのが、最も妥当であるといえよう。

7．まとめ

磯城郡田原本町唐古・鍵遺跡では、中期初頭に建てられた大型掘立柱建物跡が検出されており、さらに遡る大型建物の存在も予想されている[注21]。その首長の性格については今おくとしても、すでに突出した首長が前期末の段階には存在していたことが想定できよう。北部九州では同じ時期に、福岡市吉武高木遺跡など首長層の台頭が認められ、同様に畿内においても首長層が台頭し始めていたものと考えられる。

こうした階層差は、墓域の中における子供の埋葬からも読みとることができる。つまり、乳幼

児の中にも土器棺墓に埋葬される者とされない者が、前期の段階で存在していたことが東武庫遺跡の事例などから指摘できる。[注22] また、墳丘上に埋葬された小児の数が、予想される子供の死亡率に比して低いことから、埋葬対象者が選択的なものであったと判断できる。すなわち、階層差が前期後半の段階には、すでに明確に表示される社会であったと考えられるのである。[注23] つまり、方形周溝墓そのものが、首長共同体による農民層支配を表示するものであるといえ、前期後半にはそうした階層差は、すでに醸成されていたものと考えられよう。

共通する墓制の広がりが、支配共同体の大きさと重なると考えてよければ、方形周溝墓は間違いなく畿内における支配共同体の範囲を示していることになる。つまり、畿内における首長層が、共通する墓制として採用したのが方形周溝墓である。こうした状況の中で、サヌカイト交易の拠点となる讃岐地域に方形周溝墓が早い段階で造営されるのは、畿内地域がその土地を重要視していたからにほかならない。また、畿内のサヌカイト石材が金山から二上山にシフトしていくのにあわせるように方形周溝墓の築造が絶えていることも、この墓制の主体が畿内にあったことを暗示している。

位置的に近畿の周縁部に当たる丹後・但馬地域でも、讃岐と同様の理由で方形周溝墓が造営される。この地域は中郡峰山町扇谷遺跡で前期～中期前葉に属する鋳鉄板片が出土するなど、早い段階から大陸ないし半島との交易を行っていた可能性が高い。[注24] つまり、北部九州を介さずに半島との交易を可能にするという点において、丹後・但馬地域は畿内にとって重要な位置を占めつづけ、中期以降も方形周溝墓が造営され続けることになる。すなわち畿内周辺地域における方形周溝墓の存在は、畿内の支配共同体による主体的な選択の結果によるものと評価できよう。

では、方形周溝墓は畿内で自生的に発生したものと考えて良いだろうか。先にも触れたように韓国でも方形周溝墓が確認されるようになったが、寛倉里遺跡の方形周溝墓については、未だ無文土器と瓦質土器の共伴関係や地域差など解決すべき問題があり、この方形周溝墓群と畿内の方形周溝墓を直接的に比較することは、現時点では避けたい。

しかし、北部九州の東小田峯遺跡の事例から、墓を方形に区画するといった縄紋時代に存在しなかった規範が、弥生文化の成立とともに国内に持ち込まれた可能性は高いと考えられる。つまり、「方形区画の思想」である。中国においては秦代に方形周溝墓の存在が指摘されており、[注25] 半島でもその時期に若干の問題を残すが、おなじく方形周溝墓が検出されている。それぞれ、周溝の形態や、埋葬対象が異なり、同列に扱うことはできないが、文化段階としてはいずれも鉄器時代であり、その根底にある思考が共通している可能性が高いと言えよう。

大陸や半島に方形周溝墓と同様の論理を持った墓が展開する以上は、近畿地方の方形周溝墓と無関係と断ずることは難しい。しかし、先にも述べたように現時点では北部九州や瀬戸内、山陰地域をへて伝播したものとも考えることはできない。また、渡来人による直接的な伝播とするには、磨製石剣や丹塗磨研土器など、北部九州でも出土するいくつかの要素が畿内では欠落する点に問題があるといえよう。

以上のことから、仮に今後大陸や半島で方形周溝墓の検出例が増え、それらが弥生時代前期を

遡ることになっても、畿内の方形周溝墓が、渡来人の直接的な影響によって成立するものとは考えられない。むしろ、丹後・但馬地域を介した大陸や半島との交流の中で、畿内の首長層が主体的にその墓制、あるいはその思想、つまりは文化要素を選択的に導入した結果と考えるのが妥当ではなかろうか。(注26)

方形周溝墓は畿内で成立し、首長層によって畿内を中心に展開した。その背景には大陸や半島からの直接的な人の流れや、墓制の伝播といったものは、現時点では見つからないというのが小論の結論である。

(ふじい・ひとし＝当センター調査第２課調査第４係調査員)

注１　弥生時代前期に属する資料は、現時点では数量的な問題などから周溝墓・台状墓・墳丘墓といった論議は困難である。小論では、すべてを含め用語として方形周溝墓を用いている。

注２　小田富士雄「弥生時代墳丘墓の出現－佐賀県・吉野ヶ里墳丘墓をめぐって－」(『古文化論叢』児島隆人先生喜寿記念論集　児島隆人先生喜寿記念事業会)　1991
広瀬和雄『縄紋から弥生への新歴史像』角川書店　1997

注３　尹世英・李弘鐘『寛倉里　周溝墓』(『高麗大学校埋蔵文化財研究所研究叢書』第６輯　高麗大学校埋蔵文化財研究所・(株)大宇)　1997

注４　渡辺昌宏「方形周溝墓の源流」(『平成11年春季特別展　渡来人登場－弥生文化を開いた人々－』大阪府立弥生文化博物館)　1999

注５　中村弘編『尼崎市　東武庫遺跡　県公営住宅尼崎武庫之荘団地改装に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(『兵庫県文化財調査報告』第84冊　兵庫県教育委員会)　1991
中村弘『尼崎市東武庫遺跡　尼崎武庫元町団地建設に伴う』(『兵庫県文化財調査報告』第150冊　兵庫県教育委員会　1995

注６　本間元樹「弥生時代前期の区画墓」(『田井中遺跡(１～３次)・志紀遺跡(防１次)陸上自衛隊八尾駐屯地内施設建設事業に伴う発掘調査報告書』(財)大阪府文化財調査研究センター)　1997

注７　鷹野一太郎・鳥居幸一『京都府京田辺市　稲葉遺跡第４次発掘調査概報－アル・プラザ京田辺店建設地の調査－』(『京田辺市埋蔵文化財調査報告書』第24集　京田辺市教育委員会)　1998

注８　西岡巧次・福島孝行『雲井遺跡(第８次調査)－震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査概要－』　神戸市教育委員会　1998

注９　宮崎哲治『龍川五条遺跡Ⅰ』(『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』第23冊(財)香川県埋蔵文化財調査センター)　1996

注10　佐藤龍馬・川井国博・中山尚子「佐古川・窪田遺跡」(『国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報平成９年度』　香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局)　1998
乗松真也「佐古川・窪田遺跡」(『国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成10年度』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局)　1999

注11　北條芳隆・中村豊『庄・蔵本遺跡１－徳島大学蔵本キャンパスにおける発掘調査－』　徳島大学文化財調査室　1998

注12　田中光浩・林和広『七尾遺跡発掘調査報告書』(『京都府峰山町文化財調査報告』第８集　峰山町教育委員会)　1982

注13　瀬戸谷晧『駄坂・舟隠遺跡群』（『豊岡市文化財調査報告書』22　豊岡市教育委員会）　1989

注14　石鏃が出土する埋葬施設は前期にも認められるが、先端が揃っていない、出土位置が集中しない、先端ないしは基部を欠損したものが散見されるなどの理由から、体内に射込まれたものである可能性が高いと判断し、ここでは扱わない。

注15　前掲注５

注16　山口英正「新方遺跡の調査概要」（『シンポジウム新方遺跡からの新視点　瀬戸内弥生文化のパイオニア』シンポジウム講演資料集　「文部省科学研究費（地域連携推進研究）古人骨と動物遺存体に関する総合研究」シンポジウム実行委員会）　2000

注17　梅本健治・辻満久『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』Ⅳ　（『広島県埋蔵文化財センター調査報告書』第132集　広島県埋蔵文化財センター）　1994

注18　牧田公平「島根県邑智町沖丈遺跡」（『島根県考古学会誌』第17集　島根県考古学会）　2000

注19　甘木市史編纂委員会「夜須町東小田沼尻遺跡」『甘木市史資料考古編』1984
福岡県立朝倉高等学校史学部『埋もれていた朝倉文化』　1984

注20　この地域を介しての伝播に関しては、晩期に遡る可能性のある飯石郡頓原町門遺跡がその候補となるだろうが、周溝内での遺物の出土状況など不明な点が多く、また地理的にも時期的にもこの事例だけが突出していることから、現時点では同列に論じることはできないと考えている。　内田律雄『志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財調査報告書３　門遺跡』　島根県教育委員会　1996

注21　豆谷和之「唐古・鍵遺跡第74次発掘調査概要報告」（『みずほ』第33号　大和弥生文化の会）　2000
桑原久男「唐古・鍵遺跡西地区の調査と大型建物」（『みずほ』第33号　大和弥生文化の会）　2000

注22　藤井整「近畿地方の弥生土器棺墓」（『古代文化』第53巻第２号　古代学協会）　2001

注23　藤井整「方形周溝墓の被葬者－下植野南遺跡の調査から－」（『京都府埋蔵文化財情報』第79号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2001

注24　田中光浩他『扇谷遺跡発掘調査報告書』（『京都府峰山町文化財調査報告』第10集　峰山町教育委員会）　1984

注25　兪偉超「方形周溝墓与秦文化的関係」（『中国歴史博物館館刊』21）　1993

注26　河野の再定義する刺激伝播という概念がこれに相当する。河野一隆「刺激伝播と国際秩序－倭王権形成過程２つの画期－」（『考古学研究』第48巻第２号　考古学研究会）　2001

この小文は当調査研究センターの共同研究「弥生時代前期の墓制」による成果である。小文の発想は共同研究員の福島孝行氏の御教示によるところが大きい。記して感謝したい。

また、小文をまとめるにあたっては、次の諸学兄に資料調査の便宜や、有益な御教示をいただきました。記して深謝申し上げるとともに、私の不勉強のためにその意を十分にくみとれなかった事をお詫びします。

赤澤秀則、伊藤実、内田律雄、岡田敏彦、片岡宏二、河野一隆、河村裕一郎、佐藤正義、鷹野一太郎、崔完奎、中村弘、中村豊、西岡巧次、西岡達哉、野島永、深澤芳樹、藤田三郎、豆谷和之、森岡秀人、森下英治、禰宜田佳男、（順不同・敬称略）　（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター、（財）香川県埋蔵文化財調査センター志摩歴史資料館、前原市立伊都歴史資料館、鹿島町教育委員会、島根県埋蔵文化財センター、（財）広島県埋蔵文化財センター、広島県立歴史民俗資料館

4．東禅寺古墳群

所 在 地　宮津市須津東禅寺

調査期間　平成13年５月14日～８月３日

調査面積　約900㎡

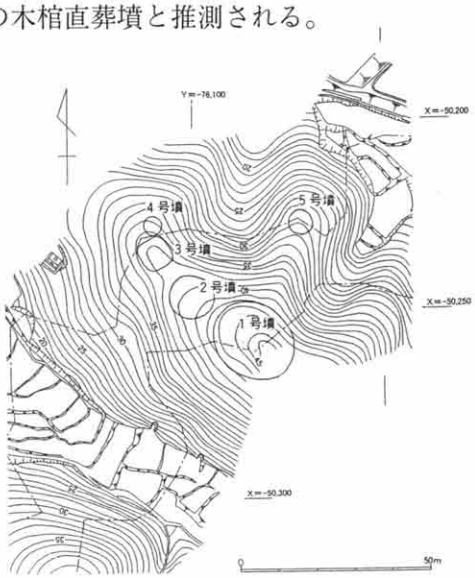
はじめに　東禅寺古墳群は、野田川河口域と阿蘇海西半部を望む標高約30～45mの丘陵上に位置する。野田川河口域と阿蘇海西半部を望むことができ、眺望に優れた立地である。今回、この丘陵で鳥取豊岡宮津自動車道に関係する道路建設が計画されたことから、当調査研究センターでは京都府道路公社の依頼を受けて、古墳群の発掘調査を実施した。

調査概要　東禅寺古墳群は５基以上からなる古墳群である。このうち、工事予定地内に位置する１号墳、２号墳、３号墳、５号墳について発掘調査を実施した。

１号墳　最も高い場所に築かれた長軸約21mの円墳である。工事にかかる墳丘の約2/3を調査対象とした。墳頂部平坦面と墳丘の一部を調査し、墳頂部で３基の埋葬主体(第１～第３主体部)を検出した。主体部は、３基とも箱形木棺が埋葬されていたと考えられる。埋葬主体と木棺の規模は別表のとおりである。第１・第３主体部で遺物を検出した。第１主体部では布留式の土師器高杯２点を墓壙上面で検出した。また、木棺上面にあたる位置で柳葉式鉄鏃１点を検出した。第３主体部では、木棺底中央(被葬者の胸上にあたる場所)で鏡を検出した。径約3.6cmの小型の櫛歯文鏡である。

２号墳　墳丘の一部が遺存していたが、形状や規模は明らかでない。墳丘上で古墳時代後期後半頃の須恵器杯身の破片を採取した。古墳時代後期の木棺直葬墳と推測される。

第１図　調査地位置図(1/25,000)



第２図　東禅寺古墳群分布図

3号墳　低墳丘の方形墳である。墳丘中央で箱形木棺を納めた墓壙を検出した。墓壙内には、土師器杯2点、土師器壺1点、刀子1点、滑石製勾玉1点がまとめて置かれていた。供献品として被葬者の頭部付近に置かれたものであろう。古墳時代後期のものである。

5号墳　1～4号墳の造られた主尾根から北側に張り出す尾根先端部に造られた古墳である。尾根を削り出して半円形の墳丘としたものである。長軸が5m以上の大型墓壙を埋葬主体としている。

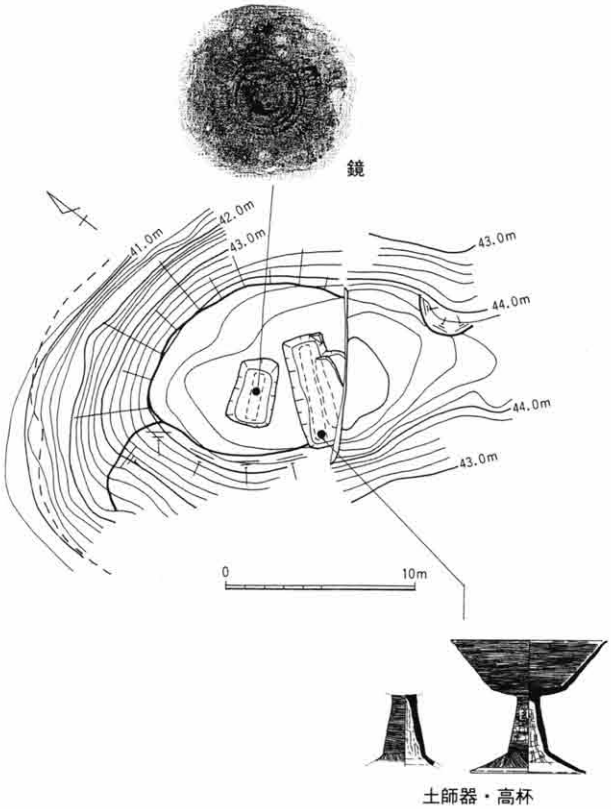
まとめ　調査の結果、1号墳は古墳時代前期、2・3号墳は古墳時代後期に築造されたことが確かめられ、東禅寺古墳群は古墳時代前期から後期にかけて断続的に形成された古墳群であることが判明した。1号墳は墳丘規模径21mという大型の墳丘をもつ古墳であり、中心主体である第1主体部の規模の大きさ、第3主体部の鏡の存在などからみて、有力家族の墳墓とみられる。阿蘇海沿岸では、宮津市霧ヶ鼻古墳群・柿ノ木古墳群、岩滝町丸山古墳・日ノ内古墳などの前期古墳が知られているが、東禅寺1号墳はこうした古墳群の被葬者とともに阿蘇海沿岸域の古墳時代前期社会において活躍した人物の墳墓と考えられる。　（田代　弘）

表　埋葬主体部と木棺の規模

古墳名称	主体部名称	墓壙規模			木棺形状	木棺規模	
		長軸長	短軸長	深さ		長軸長	短軸長
東禅寺1号墳	第1主体部	約6m	2.1m	約1m	箱形	約4.7m	約0.6m
	第2主体部	約6m	約2.1m	約0.6m	箱形	約2.8m	約0.6m
	第3主体部	約6m	約2.1m	約0.8m	箱形	約2.9m	約0.6m
東禅寺2号墳	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
東禅寺3号墳		約3.2m	約2.1m	約0.2m	箱形	約2.9m	約0.6m
東禅寺4号墳		約5m	2m以上	約0.8m	箱形	不明	不明

第3図　古墳群全景（北西から）

第4図　1号墳全景



第5図　1号墳遺物出土状況

5．杉北（すぎきた）遺跡第７次

所 在 地　亀岡市旭町樋ノ口93・94・95・100番地

調査期間　平成13年７月４日～８月20日

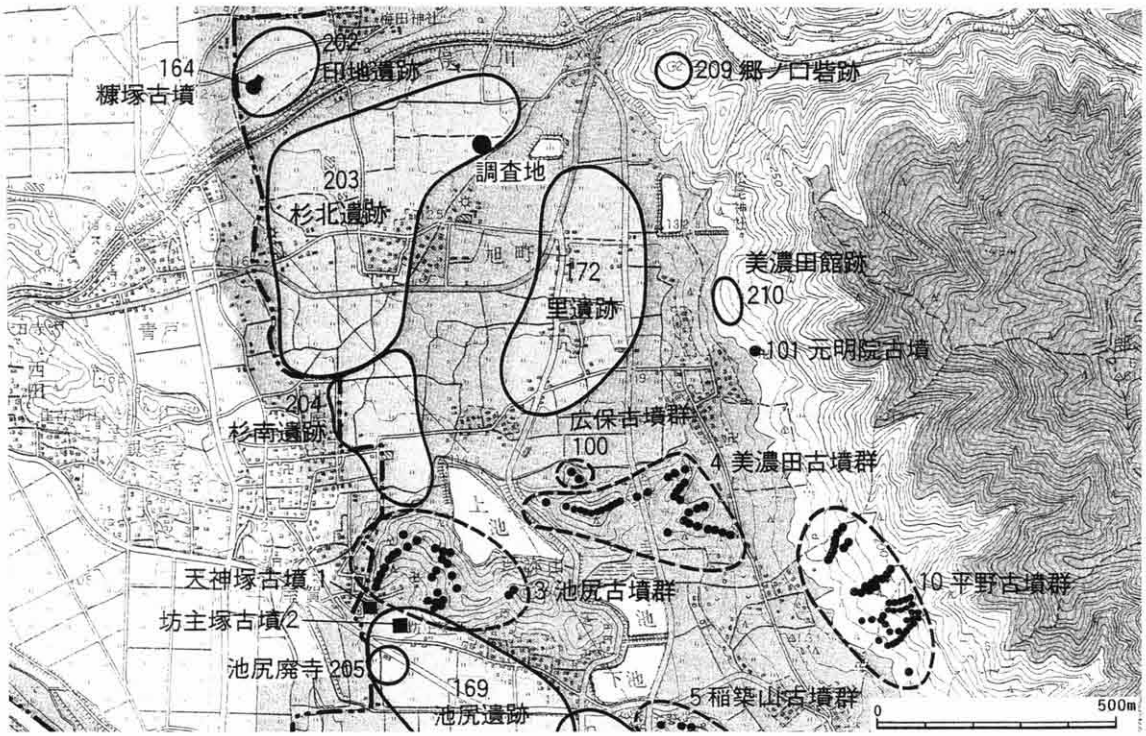
調査面積　約600㎡

はじめに　杉北遺跡の所在する亀岡市旭町の樋ノ口周辺は、遺跡の東で標高613.7mの三郎ヶ岳を頂とした南北に連なる山稜に端を発する三俣川水系によって形成された扇状地形を呈している。当遺跡の発掘調査は、府営ほ場整備に伴うもので、平成７年度に亀岡市教育委員会、平成８年度には京都府教育委員会によって試掘調査が行われた。それを受けて、平成11年度から当調査研究センターが発掘調査を実施してきた。

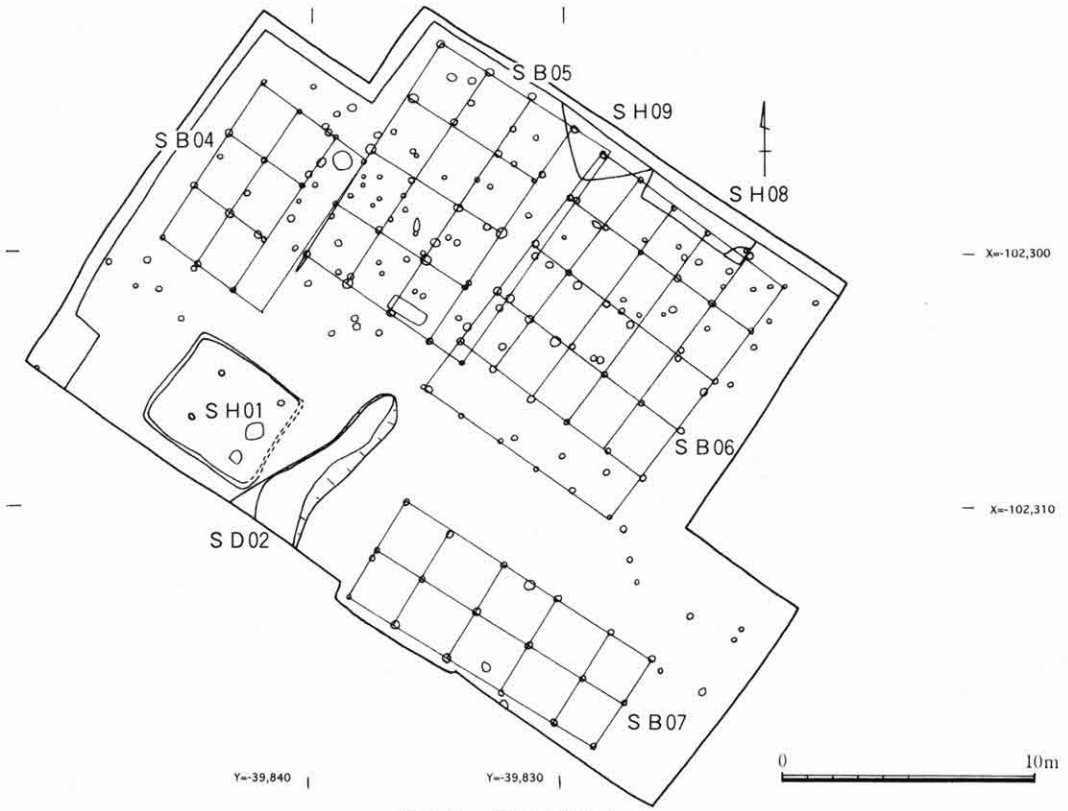
調査の概要　今年度の調査では、古墳時代の竪穴式住居跡３基、鎌倉・室町時代の掘立柱建物跡４棟、溝などを検出した。以下では検出遺構のうち、まとまって検出した中世の掘立柱建物跡について報告しておきたい。

掘立柱建物跡ＳＢ04　東西約3.6m、南北約7.5mの南北棟である。柱は、東西２間×南北３間で、柱穴の径0.3～0.4m、深さ0.2～0.3mを測る。柱間は、南北約2.0m、東西約1.8mを測り、建物の東側には幅約1.5mの庇が取り付く。瓦器椀や土師器の皿・羽釜などが出土した。

掘立柱建物跡ＳＢ05　東西約6.2m、南北約9.8mの南北棟である。柱は、東西３間×南北４間で、柱穴の径0.3～0.4m、深さ0.2～0.4mを測る。柱間は、南北約2.5m、東西約2.0mを測る。



第１図　調査地位置図（「亀岡市の遺跡地図」（『新修　亀岡市史』資料編第１巻付図）に加筆）



第２図　遺構配置図

建物の東側には幅約1.5～1.6mの庇が取り付く。中国製の白磁椀や丹波産の瓦器椀、土師器の皿などが出土した。

掘立柱建物跡ＳＢ06　東西約9.0m、南北約11.5mの東西棟である。柱は、南北５間×東西５間で、南辺の柱列は廂と考えられる。柱穴は径が約0.3m、深さ0.1～0.3mを測る。柱間は、南北約2.3m、東西約1.8mを測る。緑釉陶器の椀や、瓦器椀・皿、土師器皿などが出土した。

掘立柱建物跡ＳＢ07　南北約4.2m以上、東西約11.6mの総柱建物である。柱は南北に２間、東西に５間分確認したが、南に広がると考えられる。柱穴は径約0.2m、深さ約0.2mを測る。柱間は、東西約2.3m、南北約1.8mを測る。瓦器椀や土師器皿などが出土した。

まとめ　調査地の西には北東から南西に流れ出した旧三俣川の自然堤防上に形成された里道が残っており、地元では周山街道と呼ばれ、山からの材木を馬で引いて出していたそうである。鎌倉・室町時代の建物跡もこの里道に沿って建てられていることが判明し、古来からの幹線道路と考えられる。

また、出土遺物では、瓦器椀・皿などの日常雑器のほかに平安時代の緑釉陶器や中国製の白磁椀などが出土していることが注目される。

（戸原和人）

6．長岡京跡右京第704次（7ANGSK－1地区）・井ノ内遺跡

所 在 地　長岡京市井ノ内白海道1－2・2－5

調査期間　平成13年7月17日～9月7日

調査面積　約300㎡

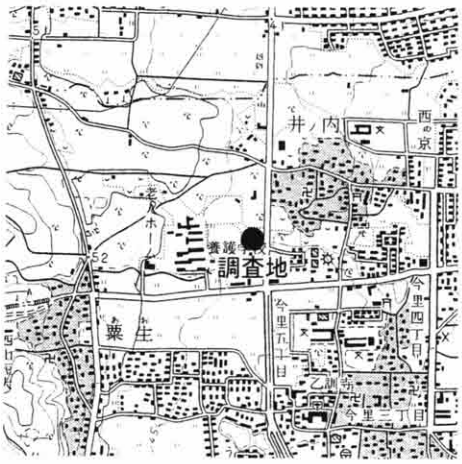
はじめに　今回の調査地は長岡京の条坊復原図によると西三坊大路と南一条大路（新条坊二条大路）との交差点付近にあたる。また、弥生時代から中世にかけての複合遺跡である井ノ内遺跡の範囲にも該当している。調査は、主要地方道大山崎大枝線緊急地方道整備事業に伴って、京都府土木建築部の依頼を受けて行った。

調査の概要　調査は進入路を確保する関係上、調査地が北・中央・南の3か所に分かれている。以下に各調査区の概要を述べる。

北調査区　調査以前に遺構検出面が削平を受けており、遺構を検出できたのは全体の1/3程度である。検出した遺構には土坑、ピットなどがある。

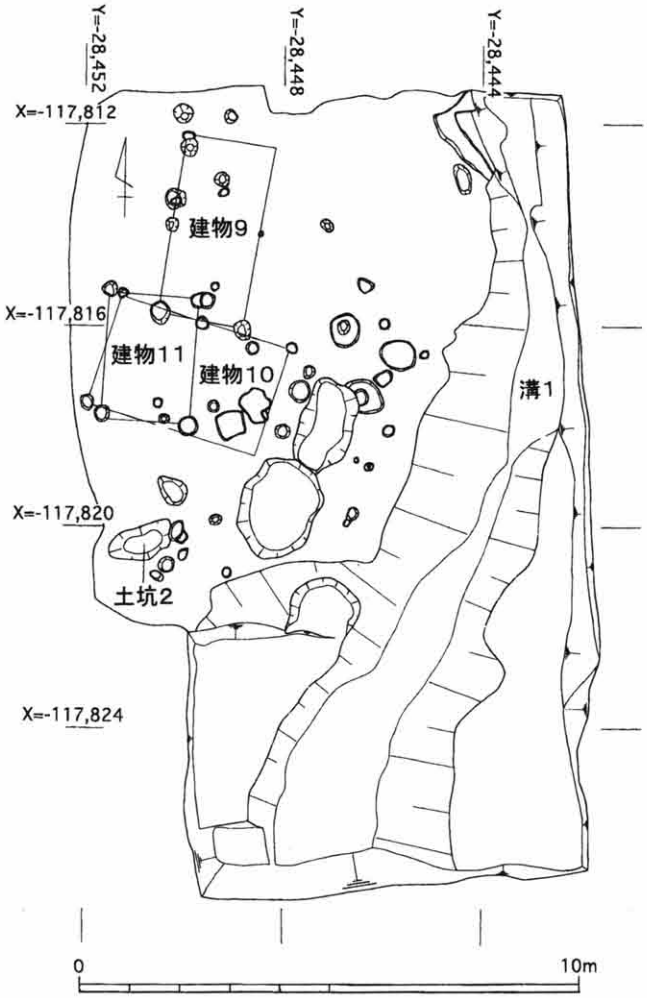
中央調査区　遺構としてのまとまりが見られた調査区である。検出遺構には、掘立柱建物跡・土坑・溝がある。

溝1は調査地東側にあり、北東―南西方向に主軸を持つ遺構である。検出長は約11m、幅約4m、深さは最大で約1mを測る。深さは一定せず、北側は浅く、中ほどから南側にかけて深くなる。遺構の北東側延長部、および遺構の東肩部は現代の攪乱により削平されている。一方、南側の延長部は南調査区では確認できないため、進入路部分で大きく東側に屈曲するか、終息するものと思われる。斜面、および底部付近には、人頭大から子どもの拳大の角礫が多数散乱していた。埋土中からの出土遺物には、大量の土師器皿・瓦器椀のほか、須恵器椀・黒色土器・緑釉陶器、鉄釘などの鉄製品などもある。出土した遺物の総量は遺物整理コンテナに10箱分ある。また、埋土を採取し水洗洗浄したところ、炭化米や小豆と思われる種子などが出土した。そのほか小鍛冶を行っていたと思われる鍛造剝片や湯玉、砂鉄なども出土している。この溝の所属時期は平安時代後期である。建物9は、東西1間、南北2間の南北棟の建物である。東西1.8m、南北3.6mを測る。建物は真北から東に振っており、溝1の振れに沿うものと思われる。柱穴の中から瓦器椀や土師器皿の小片が出土した。建物10は、東西2間、南北2間の東西棟の建物



第1図　調査地位置図（1/25,000）

である。東西は3.6m、南北は2.1mを測る。柱穴の中から瓦器椀、土師器皿などの小片が出土した。建物11は、東西・南北とも１間の南北棟の建物である。東西は2.1m、南北は2.4mを測る。柱穴から瓦器椀の小片が出土した。また、土坑群は、掘立柱建物跡と溝状遺構に挟まれるように配置されている。土坑２は短軸0.4m、長軸1.2mの楕円形の土坑で、深さ30cmを測る。この土坑から瓦器椀や土師器皿の破片とともに重郭文軒平瓦片が出土した。



第２図　中央調査区平面図(1/150)

南調査区　現在の坂川の護岸擁壁に接する調査区である。耕作に伴うと見られる東西方向の素掘り溝を数条確認したにとどまった。

出土遺物　土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・白磁などの土器、陶磁器のほか、鉄釘などの鉄製品、瓦、および鍛造剝片・湯玉・砂鉄といった鍛冶関連遺物がある。また、自然遺物として炭化米などの種子も出土している。

まとめ　今回の調査において、中央調査区で遺構のまとまりを確認することができた。時期は12世紀前半を中心とするものと考えられるが、遺物には10世紀のものも若干含まれている。特に、溝１から多量の中世土器資料が出土した。また、鍛冶関連遺物が出土したことは、調査地付近が鍛冶工房を伴う生活域の一部であったことを示唆している。

今回の調査地を含めて井ノ内遺跡周辺で平安時代から鎌倉時代にかけての遺構が確認されている。また、付近には荘園の存在したことも文献資料から知られている。それらの成果を総合的に判断して中世集落の復原を考える必要がある。

（柴　暁彦）

7．内里八丁（うちさとはっちょう）遺跡第17次

所 在 地　八幡市内里今福ほか

調査期間　平成13年４月18日～９月27日

調査面積　約1,700㎡

はじめに　この調査は、府道八幡木津線の整備事業に伴うもので、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。内里八丁遺跡は木津川左岸の自然堤防上に営まれた、弥生時代から中世にかけての複合集落遺跡である。これまでの第二京阪道路建設に伴う調査で、弥生時代後期の集落・水田跡、古墳時代の集落跡、飛鳥・奈良～平安時代前期の掘立柱建物跡・溝、平安時代後期～鎌倉時代の集落跡などが検出されている。

調査の概要　今回の調査では、建設中の第二京阪道路を挟んで東西２か所の地点を調査した。東側の調査地を17Ａ地区、西側の調査地を17Ｂ地区と呼称する。

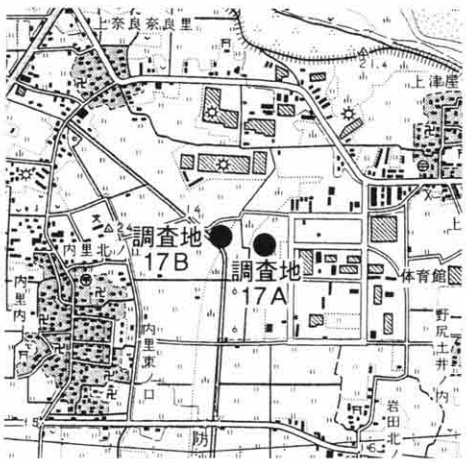
17Ａ地区　用水路をはさんで南北２か所にトレンチを設定した。上層では中世以降の島畠を、下層では平安時代後期～末頃の南北方向の素掘り溝、井戸などを検出した。その下層には粘質土と砂層が互層に堆積しており、遺構・遺物は確認されなかった。こうした状況から、平安時代後期から耕作地として土地利用されたものと考えられる。

17Ｂ地区　この地区では複数の時期にわたる遺構・遺物を確認した。以下、時代順に記述する。

弥生時代後期末～古墳時代前期・古墳時代中期末　この時期の遺構としては、竪穴式住居跡10基と溝・土器だまりなどを検出した。竪穴式住居跡は調査地の全域で確認され、調査地の北・西に、さらに多数の住居跡があると推定される。竪穴式住居跡は平面が方形を呈する。これまでの調査成果を合わせると、総数40基以上の竪穴式住居跡を検出したことになり、この時期の集落としては非常に規模の大きなものになる。

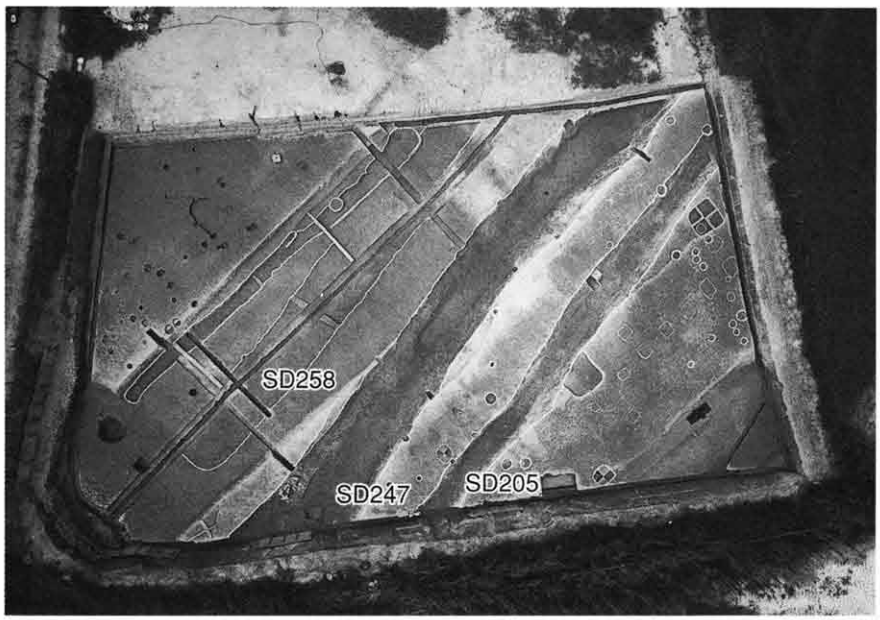
また、竪穴式住居跡を１基検出した。方形の住居跡で西側に造り付けの竈をもっている。

飛鳥・奈良時代～平安時代　この時期の遺構としては、平行して掘削された溝３条と方向が異なる溝、掘立柱建物跡、土坑などがある。掘立柱建物跡は飛鳥～奈良時代前期のものと推定される。また、炭・焼け土が混入した小土坑３基を検出した。近隣で火を使用した後、廃棄した遺構と推定される。



第１図　調査地位置図(1/25,000)

溝のうち、平行する溝ＳＤ205と溝ＳＤ258は、これまで道路状遺構の両側溝と考えられてきた遺構の延長であるが、中央に位置する溝ＳＤ247との出土遺物の比較から、この３条の溝が同時に存在している期間があったと



第２図　17Ｂ地区　飛鳥～平安時代の遺構(右上が北)

考えられる。この遺構を道路状遺構と見るか、水利に関連するものと見るか、今後の詳細な遺物整理を行ったうえで判断したい。

出土遺物には多量の土師器・須恵器のほか、溝ＳＤ205から石帯・銅製帯飾り(巡方)裏止め金具、溝ＳＤ247から和同開珎・隆平永寶、墨書土器などが出土した。また、各遺構から瓦・鉄滓・フイゴの羽口、漆が付着した土器などが出土していることから、近隣に官衙や寺院などの公的施設および、製鉄や漆器製作に関連した工房が存在した可能性が高い。

平安時代末期～鎌倉時代　この時期には平行する溝が埋没し、新たに耕作地として利用された。また、西側では掘立柱建物跡３棟以上、井戸跡３基などを検出した。耕作地の中にいくつかの建物群がまとまり、小さな村落を形成していたと思われる。出土遺物には瓦器・土師器・白磁などがある。

鎌倉時代以降　この時期には遺跡全体が島畠と呼ばれる耕作地に変貌をとげる。島畠とは、大きく溝状に掘削した土を隣接地に盛り上げ、盛り上げた部分を畑地に、掘削した部分を水田に利用するものである。今回は、島畠間の窪地から複数の溝と稲株痕跡を検出した。

まとめ　今回の調査で、以下のようなことが明らかになった。

①弥生時代後期～古墳時代前期には集落の範囲がさらに西側に広がることが判明した。今後、墓域などの検出が期待される。

②飛鳥時代から平安時代前期では掘立柱建物跡の広がりを確認したほか、従来、道路状遺構とされてきた遺構について新たな知見を得た。この問題に関しては、今後の整理作業の過程で検証していきたい。また、出土遺物から、周辺に官衙・寺院などの公的施設が存在する可能性がさらに高くなった。

③中世には、耕作地の中に点在する建物群を新たに確認でき、中世の景観復原に新資料を得た。このように内里八丁遺跡は弥生時代から中世にかけての遺構が良好に残り、時代ごとの集落変遷を考える上で貴重な遺跡と言える。

(石尾政信)

8．女谷（おんなだに）横穴Ｃ支群

調 査 地　八幡市大字美濃山小字荒坂

調査期間　平成13年４月11日～６月28日

調査面積　約630㎡

はじめに　調査は、第二京阪道路および国道１号京都南道路建設に伴い日本道路公団関西支社の依頼を受けて実施した。調査地は、周知の遺跡である女谷横穴群と荒坂横穴群の間に位置する（第１図）。平成11・12年度の試掘調査によって埋没した谷地形を検出し、新たに約50か所にもおよぶ横穴状の遺構を検出した。調査地は昨年度に調査を行ったＢ支群（15基）の分布する丘陵の北東に位置し、８基の横穴について調査を実施した。

第１図　調査地位置図（1/50,000）

調査概要　女谷横穴Ｃ支群の横穴は、遺骸や副葬品を納める玄室と丘陵斜面を切り通して掘り込まれた墓道、閉塞部にあたる部分の玄門で構成される。８基の横穴は、Ｂ支群から続く丘陵の北側斜面に造られ北方向に開口する（第２図）。１～４号横穴は丘陵斜面の低い位置に、５～８号横穴は高い位置に造られており、約1.5mの高低差がみられる。すべての横穴の玄室天井部は崩落していたが、残存する奥壁や側壁の形状からアーチ状を呈し、約1.5～２mの高さであったと推測される。玄室の平面形態は、細長いフラスコ形を呈する。奥壁の幅は平均２m、長さは平均３mの規模である。玄門の天井部も残存していないが、壁面の残存状況から約1.2mの高さであったと考えられる。玄室は、玄門部に土を盛って塞いでいることを確認した。

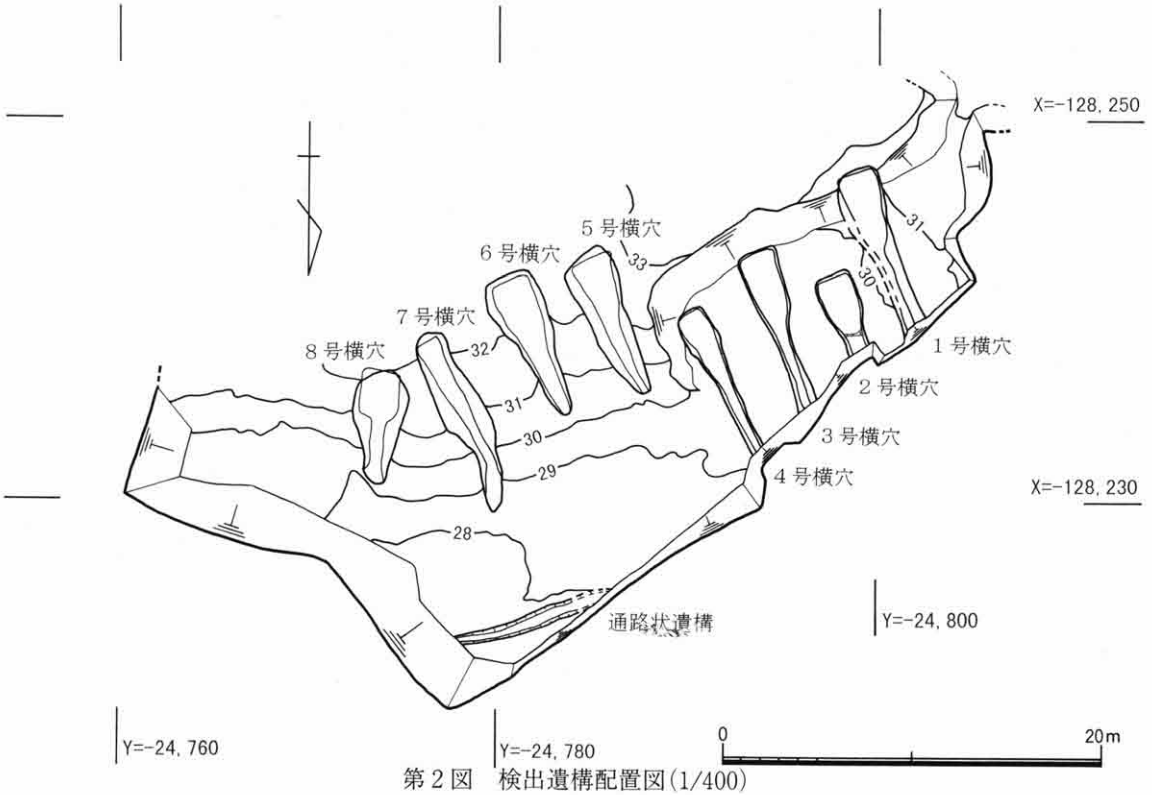
この支群における遺骸の埋葬方法には、追葬時に先葬者の遺骨を集骨して片づけ、同一埋葬面上に埋葬空間を確保し埋葬するといった、従来、各地域で確認されている追葬方法と、同一面上に追葬するのではなく、前回の埋葬面の上に盛り土をして、新たに埋葬面を構築する追葬方法がみられる。前者の追葬方法をとる５号横穴では、良好な状態で残存する人骨を３体分検出した。２体分は集骨して奥壁側に片づけられ、もう１体は伸展葬の状態で玄室のほぼ中央に葬られていた。また、副葬品も集骨された人骨と同様に奥壁側に片づけられた形跡がうかがえる。また、後者の追葬方法をとる２・６号横穴では、３面の埋葬面を検出した。

横穴のほかには、７・８号横穴の墓道の北側斜面において、Ｃ支群の横穴の墓道に繋がる東西方向の通路状遺構の一部を検出した。

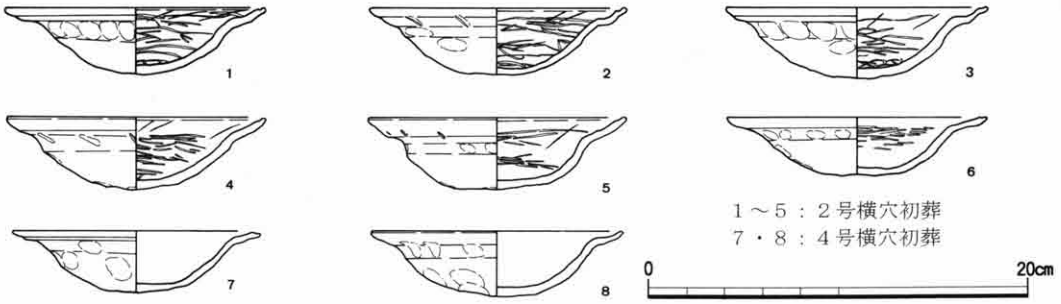
出土遺物としては、須恵器(杯・高杯・短頸壺・提瓶など)・土師器(杯・高杯・甕など)、鉄製品(刀・鏃)、金環(耳環) がある。また、２・４号横穴の初葬面から、特殊な器形をした土師器の杯が出土した(第３図)。この杯は、ヘルメットを逆さにした形で、調整は外面にはナデと指押さえ、内面にはナデののち暗文が施されている。

まとめ　出土した遺物からみて、女谷横穴Ｃ支群の存続時期はＢ支群と大差がなく、古墳時代後期後半(６世紀末～７世紀前半)と考えられる。女谷横穴Ｃ支群は、近接した２～４基単位で小群を構成し、２～３世代にわたって埋葬されたと推測する。今回の調査では、先葬者の人骨を片づけて追葬する通有の埋葬方法のほかに、盛り土によって複数の追葬面を構築する埋葬方法を確認することができた。後者の埋葬方法は女谷横穴Ｂ支群でも数基確認されており、地域的な特徴なのかどうかを含め、今後、横穴の埋葬方法を検討する上で良好な資料になるものと思われる。

この地域の丘陵一帯には、女谷横穴群・荒坂横穴群を含め、美濃山横穴群、狐谷横穴群など多くの横穴群が分布していることから、横穴群の周辺には古墳時代後期後半の時期に横穴を墓制とする集団が居住していた可能性が指摘できる。　(村田和弘)



第２図　検出遺構配置図(1/400)



第３図　２・４号横穴出土土器実測図(1/4)

9．稲葉（いなば）遺跡第７次

所 在 地　京田辺市田辺久戸

調査期間　平成13年５月９日～８月10日

調査面積　約910㎡

はじめに　今回の調査は、平成11年度から実施している西日本旅客鉄道株式会社（ＪＲ西日本）の、片町線輸送改善計画による、京田辺駅改良工事に伴う発掘調査の３年目にあたる。

稲葉遺跡はＪＲ西日本京田辺駅西側から、近鉄新田辺駅西側にかけて広がる縄文時代から近世までの複合遺跡である。今回の調査地に隣接して第４～６次の調査が行われている。第４次調査では弥生時代前期と考えられる方形周溝墓が検出されており、第６次調査３・４区からは弥生前期の遺物・遺構が検出されている。

調査概要　発掘調査は南北ふたつの調査区に分けて実施した。

南部トレンチ　近世の遺構としては地割遺構ＳＸ01、溝ＳＤ02がある。ＳＸ01は近世の耕作地と考えられる地割の南西隅と考えられる。遺構の２辺の方位は真東西・南北の方向を向いており、条里地割を踏襲している。出土遺物は18世紀のものが多く、染付椀、平瓦、丸瓦などが認められる。ＳＤ02は真東西方向を向く坪境にあたる近世の溝跡である。調査区西壁付近で花崗岩の列石が見られた。また、木材による護岸工事の跡も認められた。第６次調査１区のＳＤ01とつながるものと考えられる。出土遺物には17・18世紀の陶磁器類、瓦などがある。

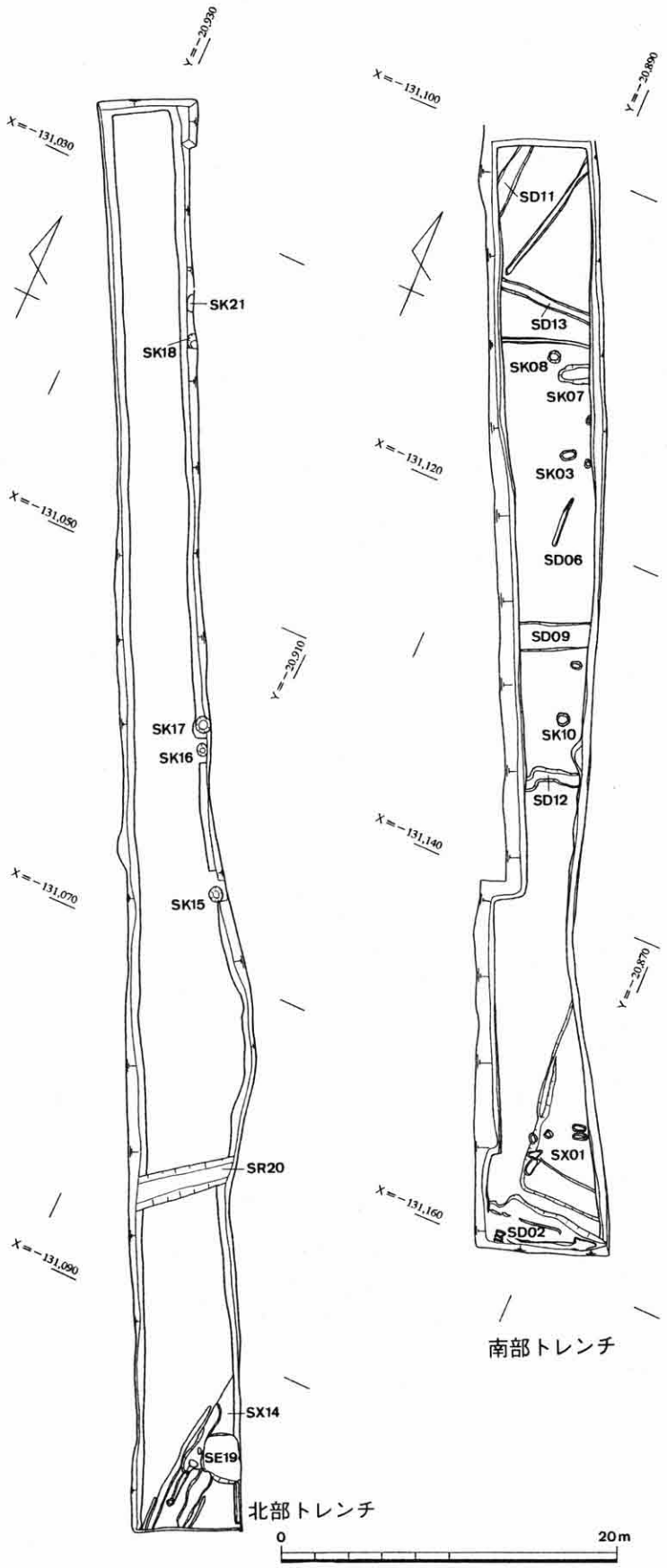
中世の遺構としては溝ＳＤ11がある。内部からは瓦器椀が発見されている。

古墳時代の遺構には、ＳＫ03・08・10、ＳＤ09がある。ＳＫ03は長楕円形を呈する土坑で、埋土の状態から古墳時代以前のものと考えられる。ＳＫ08は隅丸方形を呈する土坑で、内部からは古墳時代前期の土師器甕、高杯、ミニチュア土器が出土している。ＳＫ10は隅丸方形を呈する土坑で、内部からは底からやや浮いた状態で広葉樹製の板材が出土している。出土遺物から古墳時代と考えられる。ＳＤ09は古墳時代の溝である。内部から土師器の高杯、甕が出土している。

第１図　調査地位置図（1/25,000）

弥生時代前期のＳＫ07は長楕円形を呈する土坑で、遺構内からは弥生土器、サヌカイト製の石錐剝片が出土している。

北部トレンチ　南部トレンチに比べ地層の堆積状況が複雑で、遺構検出面の地層の様相が部分に



第２図　遺構平面図

よって異なっていた。

ＳＸ14はＳＸ01同様の地割遺構と考えられる。導水施設の関連遺構と考えられる溝や土管、丸瓦などが検出されている。隅部には野井戸と考えられる落ち込みが認められた。

古墳時代の遺構には土坑ＳＫ16～18がある。ＳＫ18からは土師器の高杯、壺、甕が出土した。ＳＫ21は弥生時代の土坑で、蓋形土器が出土している。

今回の調査によって稲葉遺跡における弥生時代前期の遺構の広がりが追認されたこととなった。また同時に、遺構の密度や性格から今回の調査地は弥生時代前期の集落の縁辺部である可能性が高いことがわかった。また、これまで希薄であった古墳時代中期の遺構も検出でき、周辺に集落が想定できるようになった。

（中川和哉）

10. 井手寺跡・栢ノ木遺跡

所 在 地　綴喜郡井手町大字井手小字中溝他

調査期間　平成13年７月12日～８月９日

調査面積　約150㎡

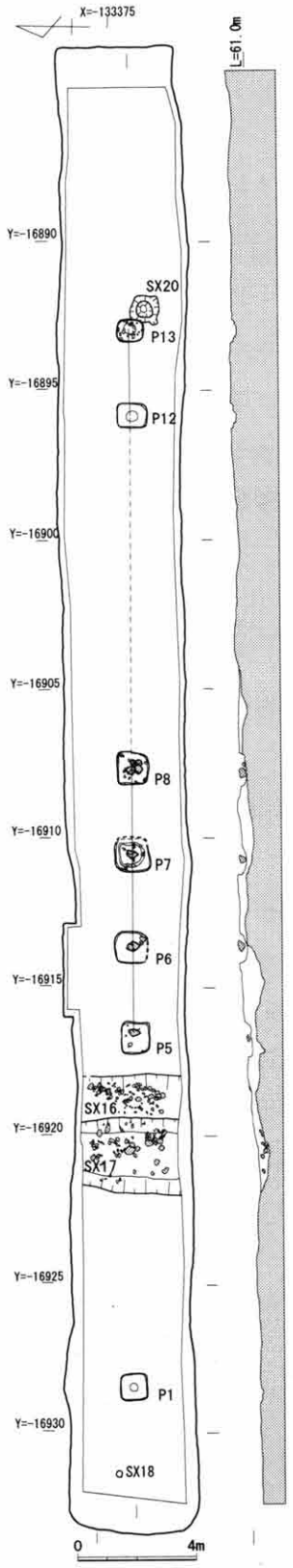
はじめに　井手寺は、古くから円提寺(井提寺)跡と称され、山背大兄王の創建ののち、橘諸兄が再建し、のちに氏寺としたと伝えられる。広大な寺域で、皇族から臣籍に降下した貴族の氏寺にふさわしく、壮麗な塔や金堂が建立されていたとされる[注1]。天平12年当時右大臣であった橘諸兄は、相楽別業で宴を開き、聖武天皇を招いたが、円提寺の落慶法要を兼ねたものとも推測されている[注2]。今日その法燈を受け継ぐ寺はなく、往時の寺域や伽藍配置など、当時の様相については不明であった。

大正年間に井手町高月地区で１辺５ｍ、高さ１ｍの土壇がみつかり、当時京都府の文化財調査の委託を受けていた京都大学梅原末治氏により、礎石のほか、軒瓦や海獣葡萄鏡、隆平永寶など、奈良時代から平安時代にかけての遺物が紹介された[注3]。

今回の発掘調査は、京都府の計画した府道和束井手線の改良工事(歩道併設工事)にともなう事前の調査である。

調査の概要　府道の改良範囲を調査対象地とし、幅約３ｍ、全長50ｍの細長い調査区を設定した。重機による表土層の掘削後、人力による精査を行った。地表下わずかのところから掘立柱建物跡と思われる一列に並ぶ柱穴７基(Ｐ１・５～８・12・13)と焼土坑１基(ＳＸ20)、溝状遺構(ＳＸ16･17)を検出した。掘立柱建物跡の柱穴は、一辺が90～120㎝前後の方形掘形をもつものである。後世の削平により遺存部分は少なかったが、掘形内中央には、柱の礎盤となる人頭大の石や、直径20㎝前後の柱の痕跡を確認した。そのうちの３間分は、約３ｍ(10尺)ごとに並ぶ(第２図)。検出した柱列は、柱痕跡を検出したＰ１・12・13と、掘形底部の礎盤を検出したＰ５～８に分けられる。礎盤を検出した柱穴は、いずれも地業積土に穿たれている。柱掘形の遺存状況からすれば、地業の積土は1.5ｍ以上となろう。柱筋は、ほぼ東西方向に沿っているが、真東西方向よりも東側で北に１度足らず、振れている。地業積土の中には、基壇外装石材の破片と考えられる加工面をもつ凝灰岩が大量に放棄されており、壇上積基壇をもつ荘厳な建物が付近に存在していた可能性が高い。

第１図　調査地位置図(1/50,000)



第２図　調査区実測図(1/250)

出土遺物は、多くはなく、奈良時代の瓦類や９・10世紀の土師器甕などの破片などわずかであった。今回検出した掘立柱建物跡の時期を直接確定する遺物は見つからなかったが、西側の遺構面直上の包含層から出土する土器が平安時代のものであることから、奈良時代以降、平安時代前半ごろまでに建てられたと考えられる。

まとめ　現状の地形でも調査区の西端は、一段低くなっており、寺域の西限に近かったものと想定できる。調査区の南東側一帯の東高月地区や宮の前地区(通称「堂の上」)は、南方を西流する玉水川から一段高くなる河岸段丘の平坦面を形成しており、礎石や奈良時代の瓦類がみつかっている。このことからも調査区が寺域の北西隅近くに位置していたと想定することができる。柱筋の通るＰ５～８とＰ12・13が同一建物の側柱であったとすれば、東西に10尺等間、８間以上の規模をもつことから、寺域の北西に位置した東西棟の僧房などが想定できる。調査区付近で発見された礎石が、調査区の南東側に位置する井手寺記念の四阿に集められているが、その東南東150mあまりの地点でも礎石が見つかっており、井手寺の伽藍は少なくとも南北150m以上にも及ぶものと見られ、白鳳･天平寺院の密集する南山城でも、屈指の規模を誇る寺院であることを再認したといえよう。

今回の調査では、井手寺の北西域にあたると考えられる地点において、10尺等間の柱間をもつ掘立柱の存在を確認した。今後、伽藍配置やその規格などの実態を把握するための、重要な定点を得ることができたものと考える。なお、当該地点は奈良時代の遺物散布地である栢ノ木遺跡に含まれているが、上述のように、顕著な遺物は出土しなかった。

(野島　永)

注１　『興福寺官務牒疏』山城国条に、「井堤寺。在綴喜郡井堤郷。僧坊八宇。神人四人。推古廿九辛巳年。山背大兄王本願也。本尊千手大士。号観音寺。左大臣橘諸兄公再建。」とある。

注２　胡口靖夫「橘氏の氏寺について－伝橘諸兄建立の井手寺を中心として－」(『古代文化』第29巻第８号　(財)古代學協会)　1977

注３　梅原末治「綴喜郡　第八　井手寺址」(『京都府史蹟勝地調査曾報告』第四冊　京都府)　1923

長岡京跡調査だより・79

前回『たより』以降の長岡京連絡協議会は、平成13年８月29日・９月26日・10月25日に開催された。報告のあった京内の発掘調査は宮内２件、左京域２件、右京域19件であった。京域外の７件を併せると、合計30件となる。

調査地一覧表(2001年10月末現在)

番号	調査次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第408次	7ANEHI-3	向日市鶏冠井町東井戸18	(財)向日市埋文	8/1～8/9
2	宮内第409次	7ANEYT-8	向日市鶏冠井町山畑19-3、他	(財)向日市埋文	9/20～11/30
3	南条遺跡第３次	6JNANJ-3	向日市物集女町南条43-1他	(財)向日市埋文	6/20～8/3
4	中海道遺跡 第57次調査	3NNANK-57	向日市物集女町北ノ口69-4	(財)向日市埋文	8/1～8/17
5	野田遺跡第５次	3NDDND-4	向日市森本町野田1-5、2	(財)向日市埋文	9/11～10/12
6	野田遺跡第６次	3NDDND-5	向日市森本町野田1-5、2	(財)向日市埋文	10/1～10/12
7	左京第465次	7ANFGT-1	向日市上植野町後藤17番地	(財)向日市埋文	9/12～10/12
8	左京第466次	7ANFBD-6	向日市上植野町伴田2-6	(財)向日市埋文	9/25～10/19
9	右京第701次	7ANIKU-5	長岡京市今里五丁目31	(財)長岡京市埋文	5/21～8/3
10	右京第706次	7ANMSC-2	長岡京市神足三丁目804	(財)長岡京市埋文	7/2～8/3
11	右京第707次	7ANISY-3	長岡京市今里二丁目115他	(財)長岡京市埋文	7/9～8/9
12	右京第709次	7ANJKD-3	長岡京市長法寺川原谷21	(財)長岡京市埋文	7/10～7/23
13	右京第710次	7ANQSE-5	長岡京市久貝２丁目118	(財)長岡京市埋文	8/1～8/10
14	右京第711次	7ANINC-12	長岡京市今里三丁目3-6	(財)長岡京市埋文	8/1～8/31
15	右京第712次	7ANQNM-1	長岡京市久貝３丁目125-5	(財)長岡京市埋文	8/20～9/10
16	右京第713次	7ANMMK-6	長岡京市神足三丁目205	(財)長岡京市埋文	8/22～9/18
17	右京第714次	7ANRHM-4	長岡京市調子三丁目1-1	(財)長岡京市埋文	9/3～11/21
18	右京第715次	7ANNYK-2	長岡京市友岡二丁目6番5	(財)長岡京市埋文	9/10～10/24
19	右京第716次	7ANINC-13	長岡京市今里三丁目地内	(財)長岡京市埋文	8/20～9/7
20	右京第717次	7ANKST-9	長岡京市開田二丁目207他	(財)長岡京市埋文	9/10～10/24
21	右京第719次	7ANMSC-3	長岡京市神足三丁目827-1他	(財)長岡京市埋文	10/1～11/29
22	右京第720次	7ANKHT-7	長岡京市開田四丁目706、704	(財)長岡京市埋文	10/9～11/30
23	右京第721次	7ANKST-10	長岡京市開田二丁目208-2他	(財)長岡京市埋文	10/3～11/22
24	右京第722次	7ANOKT-1	長岡京市下海印寺岸ノ下1-11	(財)長岡京市埋文	10/15～11/8
25	右京第723次	7ANIFC-7	長岡京市今里更ノ町19他 長岡京市井ノ内下印田9-1	(財)長岡京市埋文	11/1～ 2002.1.25
26	大山崎町第44次 遺跡確認調査	7YYMS'SS-6	大山崎町字大山崎小字白味才 39-2	大山崎町教委	9/4～9/14
27	大山崎町第45次 遺跡確認調査	7YYMSGE-2	大山崎町御所前地内	大山崎町教委	10/10～10/22
28	下植野南遺跡		大山崎町下植野門田地区 土辺、五条本地区	(財)京都府埋文	2001.4/9～
29	右京第704次	7ANGSK-1	長岡京市井ノ内白海道1-2他	(財)京都府埋文	7/17～8/30
30	右京第718次 五塚原古墳 (第２次調査)	7ANBMS-2	向日市寺戸町芝山	五塚原古墳 発掘調査団	8/1～8/末

長岡京跡発掘調査抄報

宮内第409次　調査地は朝堂院西第四堂の東端および朝堂院南門(会昌門)に当たるところである。調査の結果、第四堂については、段丘(地山)と整地層との境界線が検出された。この境目を西第四堂の基壇の東辺に相当するものとすれば、第四堂の規模は桁行10間が想定されることになる。しかし、その評価については、従来の11間とする見解と異なること、整地層に遺物(瓦片、凝灰岩など)が包蔵されていること、東端の根石抜き取り穴の痕跡が未確認であることなどから、その判断は今後の調査に委ねられた。朝堂院南門については推定西端部で逆L字状の溝が検出された。特にその南北溝は推定される南門基壇の西辺にあたる雨落溝と思われる。また、東西溝は過去の調査成果からも朝堂院南面回廊の北側の雨落溝の延長部分であることが追認できた。

左京第465次　調査地はわずか80㎡の面積ではあるが、三条大路の南側溝、東一坊大路の東側溝を検出し、大路の交差点(三条大路が優先)や四条二坊一町の西北隅の様相が明らかになった。

右京第706次、713次　調査地は開田遺跡内であるが、近年、長岡京期の遺構、遺物が数多く発見され、注目されつつある。706次調査では長岡京期の掘立柱建物跡２棟(２間×３間南北棟、８尺等間)が南北に並立して検出された。713次調査で確認された長岡京期の溝ＳＤ09は幅1.5mを測り、溝の北肩側は石組みの護岸が施されている。溝内からは荷札木簡(「久米(郡？)白×」)が１点出土した。杭列３列を伴うシガラミ構造はＳＤ09の南方で検出された。その性格は「水汲み場や洗い場としての機能が考えられる」と報告された。シガラミ構造からは習書木簡、加工木、桜樹皮などが出土した。掘立柱建物跡の柱穴内からは中央に円孔を穿った円形の墨書土製品(「石上朝」)が出土した。この遺物、遺構の出土傾向は右京688次調査成果によく似ており、これらの調査成果によって、その付近に「西市」が想定できる可能性が高まった。

右京第715次　鎌倉時代の溝ＳＤ01は幅４ｍ、深さ１ｍの真東西方向の大溝である。この溝は空堀状の施設と考えられ、第88次調査でも同様の大溝(南北方向)が検出されていることから、城、館あるいは環濠集落と想定はされるものの確定には至っていない。今後周辺の調査が待たれる。

大山崎町遺跡確認調査第44次　調査地は観音寺境内「桜の広場前公園」の東斜面である。斜面裾部から瓦だまりが見つかった。瓦には平安時代初期の吉志部瓦窯産の瓦当が２点含まれていた。

南条遺跡第３次　遺跡は南条古墳群東側の集落遺跡である。調査の結果、当遺跡内では初めて弥生時代後期の円形竪穴式住居跡２基、五角形竪穴式住居跡１基、溝跡などが検出された。

右京第718次　五塚原古墳(前方後円墳)の調査は昨年度に引き続き墳丘の規模、葺石の構築方法などを主目的に行われた。調査の結果、古墳の規模は従来の測量成果では全長94mであったが、91.5m前後であることが判明した。また、葺石の構築方法は斜面の位置によって異なり、①墳丘の急斜面では人頭大の礫を葺く、②斜面には偏平な石材を「立て掛けるように貼り」、③緩斜面には拳大の礫を葺く。②の構築方法は向日丘陵に位置する元稲荷古墳のクビレ部にも認められることや弥生時代の貼石墳丘墓に類似があることなどから、当古墳の築造時期については古墳時代前期でも早い段階に溯る可能性があるとされた。しかし、昨年度と同様、今回の調査においても土器、埴輪など古墳に伴う遺物の出土が無かったため、詳細を明らかにできなかった。(竹井治雄)

センターの動向(01．8～10)

1．できごと

8．1　稲葉遺跡(京田辺市)関係者説明会

3　東禅寺古墳群(宮津市)発掘調査終了(～5．14)

6　中尾芳治理事、井手寺跡(井手町)現地視察

7　井上満郎理事、井手寺跡現地視察

9　井手寺跡、現地説明会

藤井学理事、佐山遺跡(久御山町)現地視察

10　稲葉遺跡、発掘調査終了(5．9～)

井手寺跡、発掘調査終了(7．12～)

16　増田富士雄理事、佐山遺跡(久御山町)現地視察

17　中谷雅治常務理事・事務局長、木津城山遺跡(木津町)・椋ノ木遺跡(精華町)現地視察

杉北遺跡(亀岡市)関係者説明会

18　第18回小さな展覧会開催(於：向日市文化資料館、～9．2)

20　杉北遺跡、発掘調査終了(7．6～)

22　理事協議会(於：当センター)川上貢副理事長、中谷雅治常務理事、上田正昭、井上満郎、都出比呂志、高橋誠一、太田信之、杉原和雄各理事出席、第18回小さな展覧会視察

23　里遺跡(亀岡市)発掘調査開始

24　佐山遺跡現地説明会

全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議(於：京都市)小山雅人調査第1課長、水谷壽克調査第2課課長補佐出席

27　企業内同和問題啓発推進員研修会(於：京都市)福嶋利範事務局次長出席

29　長岡京連絡協議会(於：当センター)

30　長岡京跡右京第704次・井ノ内遺跡(長岡京市)関係者説明会

佐山遺跡、発掘調査終了(4．17～)

9．4　保津車塚古墳(亀岡市)発掘調査開始

6～7　埋蔵文化財担当職員等講習会(於：神戸市)小山雅人調査第1課長出席

7　高橋誠一理事、内里八丁遺跡(八幡市)現地視察

長岡京跡右京第704次・井ノ内遺跡、発掘調査終了(7．17～)

11　都出比呂志理事、女谷横穴群(八幡市)現地視察

12　井上満郎理事、女谷横穴群現地視察

13　樋口隆康理事長、女谷横穴群現地視察

14　職員研修(於：当センター)講師：柴暁彦調査員「奈良・平安期の集落構造に関する基礎的研究」

18　中谷雅治常務理事・事務局長、女谷横穴群現地視察

古屋敷遺跡(京田辺市)発掘調査開始

木津城山遺跡関係者説明会

20　内里八丁遺跡現地説明会

荒坂横穴群(八幡市)現地説明会

25　木津城山遺跡、発掘調査終了(6．1～)

26　上田正昭理事、女谷横穴群現地視察

長岡京連絡協議会(於：当センター)

27　里遺跡(亀岡市)関係者説明会

内里八丁遺跡、発掘調査終了(4．18～)

10．3　女谷・荒坂横穴群、発掘調査終了(4．11～)

4　平成13年度出土品整理事業終了(5．21～)

4～5　全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会(於：盛岡市)安田正人総務課主幹 、奥村清一郎調査第2課課長補佐、杉江昌乃総務課主任出席

5　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック埋文研修会(於：向日市)伊野近富調査第2係長、引原茂治主任調査員、伊賀高弘主査調査員、森島康雄調査員、福島孝行調査員出席

6～7　日本考古学協会大会(於：盛岡市)石井主任調査員出席

9　里遺跡、発掘調査終了(8．23～)

15　赤ケ平遺跡(木津町)発掘調査開始

18　三山木遺跡(京田辺市)現地説明会

木津川河床遺跡(八幡市)発掘調査終了(6．8～)

19　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックＯＡ委員会(於：(財)八尾市文化財調査研究会)小山雅人調査第1課長、森島康雄調査員出席

22　川上貢副理事長、椋ノ木遺跡現地視察

23　池上遺跡(ほ場整理、八木町)発掘調査開始

愛宕神社古墳(丹後町)発掘調査開始

24　長岡京連絡協議会(於：当センター)

池上遺跡(農道建設、八木町)発掘調査開始

26　桑原口遺跡(宮津市)関係者説明会

三山木遺跡、発掘調査終了(5．21～)

2．普及啓発活動

8．25　第91回埋蔵文化財セミナー開催(於：向日市民会館)『平成12年度京都府内発掘調査成果から』講師：三好博喜綾部市教育委員会文化財係主任「長砂南遺跡出土角杯形土器の周辺」、野々口陽子調査員「佐山遺跡の発掘調査」、福島孝行調査員「今林古墳群の発掘調査」

受贈図書一覧(01．8～10)

青森県埋蔵文化財調査センター

青森県埋蔵文化財調査報告書第306集　黒坂遺跡

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第341集　石持Ⅰ遺跡発掘調査報告書、同第342集　沢田Ⅰ遺跡発掘調査報告書、同第343集　尿前Ⅱ遺跡Ｂ地区発掘調査報告書、同第344集　似内遺跡発掘調査報告書、同第345集　大崎遺跡発掘調査報告書、同第346集　秋浦Ⅰ遺跡発掘調査報告書、同第347集　秋浦Ⅱ遺跡発掘調査報告書、同第348集　稲村Ⅱ遺跡発掘調査報告書、同第349集　南畑遺跡発掘調査報告書、同第350集　市部内遺跡発掘調査報告書、同第351集　清水ヶ野遺跡発掘調査報告書、同第352集　志羅山遺跡発掘調査報告書、同第353集　篠遺跡発掘調査報告書、同第354集　中野台遺跡発掘調査報告書、同第355集　中和田遺跡発掘調査報告書、同第356集　成谷遺跡発掘調査報告書、同第357集　ゴッソー遺跡発掘調査報告書、同第358集　宮沢遺跡発掘調査報告書、同第359集　上野遺跡発掘調査報告書、同第360集　石持Ⅰ遺跡発掘調査報告書、同第361集　西長岡長谷田遺跡・沼田遺跡発掘調査報告書、同第362集　中居俵Ⅱ遺跡発掘調査報告書、同第363集　栗林遺跡発掘調査報告書、同第364集　堀切遺跡発掘調査報告書、同第365集　台太郎遺跡第22次発掘調査報告書、同第366集　東舘Ⅱ遺跡発掘調査報告書、同第367集　長谷堂貝塚遺跡発掘調査報告書、同第368集　島田Ⅱ遺跡発掘調査報告書、同第369集　台太郎遺跡第18次発掘調査報告書、同第370集　岩手県埋蔵文化財発掘調査略報、紀要ＸＸ

(財)いわき市教育文化事業団

夏井廃寺　平成12年度範囲確認調査概報、いわき市埋蔵文化財調査報告第73冊　松ノ下遺跡、同第74冊　石坪遺跡、同第78冊　横山古墳群Ｂ・金波遺跡・北ノ作Ｂ遺跡、研究紀要11

福島県文化財センター

まほろんガイド、はにわ一座がやってきた、福島県文化財センター白河館要覧、復元！三角縁神獣鏡

(財)茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第181集　滝坂横穴墓群、年報20、研究ノート10号

(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター

研究紀要第９号、年報第11号、栃木県埋蔵文化財発掘調査報告第121集　鹿沼流通業務団地内遺跡、同第134集　免の内台遺跡、同第197集　藤岡神社遺跡、同第242集　栃木県埋蔵文化財保護行政年報23、同第243集　鴨田Ａ遺跡Ⅱ、同第245集　馬門南遺跡Ⅱ、同第246集　竜地遺跡、同第247集　古橋Ⅰ・Ⅱ遺跡、同第249集　那須官衙関連遺跡Ⅶ、同第251集　大関台遺跡、同第252集　北の前遺跡、同第255集　谷向・国谷馬場・中の内・惣宮・鍋小路、同第256集　上神主・茂原・茂原向原・北原東、同第257集　権現山遺跡・百目鬼遺跡、同第258集　蛇ヘビ塚遺跡

(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第242集　まま上遺跡、同第258集　小池館跡、同第259集　大木前／小栗／日向、同第260集　南久我遺跡Ⅱ、同第261集　村中遺跡、同第262集　神ノ木遺跡、同第263集　下野田稲荷原遺跡、同第264集　如意遺跡、同第265集　中尾緑島遺跡、同第266集　堂地遺跡、同第267集　箱石遺跡、同第268集　大寄遺跡Ⅰ、同第269集　原遺跡、同第270集　馬場裏遺跡Ⅱ、同第271集　深作稲荷台遺跡、研究紀要第16号、年報21

(財)印旛郡市文化財センター

(財)印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第80集　獅子穴Ⅸ遺跡、同第172集　岩名古墳群、同第174集　佐倉城跡、同第175集　六崎貴舟台遺跡、同第177集　馬場遺跡(第１地点)・北台塚、同第178集　戸ノ内遺跡第５地点、同第179集　柳沢牧西光明坊野馬土手・柳沢牧北神田向野馬土手、同第180集　六崎外出遺跡、同第181集　上本佐倉上宿遺跡、同第182集　大生城跡・関戸砦跡、同第184集　松井松葉作遺跡第２地点、研究紀要２、第４回遺跡発表会発表要旨

(財)東京都生涯学習文化財団東京都埋蔵文化財センター

東京都埋蔵文化財センター調査報告第100集　多摩ニュータウン遺跡

(財)かながわ考古学財団

かながわ考古学財団調査報告102　神明久保遺跡

(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
新潟県埋蔵文化財調査報告書第106集　松影A遺跡、同第107集　正尺A遺跡、年報平成12年度

富山県埋蔵文化財センター
縄文のたくみ　弥生のたくみ、とやまたくみノロジー

金沢市埋蔵文化財センター
金沢市文化財紀要178　金沢市大桑町アナグチ遺跡

(財)滋賀県文化財保護協会
30年のねんりん

能登川町埋蔵文化財センター
能登川町埋蔵文化財調査報告書第50集　石田遺跡(6次)・中沢遺跡(13次)・斗西遺跡(17次)、同第51集　斗西遺跡(16次)・石田遺跡(8次)・石田遺跡(9次)・石田遺跡(10次)

(財)大阪府文化財調査研究センター
太井遺跡、(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第20-2集　野々井遺跡、同第29集　船橋遺跡、同第51集　小阪合遺跡

(財)大阪市文化財協会
研究紀要第4号

(財)八尾市文化財調査研究会
(財)八尾市文化財調査研究会報告67、平成12年度事業報告

(財)和歌山県文化財センター
下津二中校庭遺跡、高尾遺跡、熊野本宮旧社地大斎原試掘調査報告、小松原Ⅱ遺跡発掘調査報告書、金剛峯寺遺跡、小松原Ⅱ遺跡、根来寺坊院跡、溝の口遺跡発掘調査報告書、和歌山城跡、秋月遺跡発掘調査概報、西庄遺跡発掘調査Ⅱ、田荘庄(窪・萩原遺跡)、荒田遺跡第6次発掘調査、年報1996～2000

(財)鳥取市文化財団鳥取市埋蔵文化財調査センター
服部墳墓群、史跡鳥取城跡附太閤ヶ平楯蔵跡発掘調査報告書、天神山遺跡・横枕所在遺跡2・3・横枕古墳群ほか

島根県埋蔵文化財調査センター
布志名大谷Ⅰ遺跡、布志名大谷Ⅲ遺跡、塩津丘陵遺跡群・小久白墳墓群、恵良遺跡・堂々炭窯跡・上条遺跡・水戸(三戸)神社跡・立女遺跡、飯田A遺跡・長東坊師窯跡、上府八反原窯跡、堂床遺跡、茂芳目遺跡・布志名遺跡・大堤Ⅱ遺跡・大堤Ⅰ遺跡他、岩屋遺跡・平床Ⅱ遺跡、上野遺跡・竹ノ崎遺跡、荒畑遺跡・ラント遺跡・野田遺跡、湯の奥遺跡・登安寺遺跡・湯後遺跡・土井・砂遺跡、熊谷遺跡・要害遺跡、戸井谷尻遺跡・長老畑遺跡、丸山遺跡・大槙鈩跡、古志本郷遺跡Ⅱ、蟹田谷遺跡・上沢Ⅲ古志本本郷遺跡、長廻横穴群・長廻遺跡、西川津遺跡Ⅷ、御崎谷遺跡・大床遺跡、石見銀山　妙正寺跡、山代二子塚古墳、山代二子塚古墳整備事業報告書、年報Ⅸ、いにしえの川津を掘る、斐伊川放水路発掘物語　PART 7

岡山市埋蔵文化財センター
史跡岡山城跡本丸下の段発掘調査報告、足守藩武家屋敷跡・Ⅱ、三手向原遺跡、岡山市埋蔵文化財調査の概要1999(平成11)年度

(財)広島市文化財団
(財)広島市文化財団発掘調査報告書第6集　成岡A地点遺跡、同第7集　鯛之迫遺跡、第23回文化財展　古墳発掘、平成12年度事業報告記録集

(財)香川県埋蔵文化財調査センター
県道関係埋蔵文化財発掘調査概報平成12年度、国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報平成12年度、八幡遺跡・中森遺跡・香川郡条里D地区・谷遺跡、汲仏遺跡Ⅱ、浜ノ町遺跡・高松城跡(西の丸町)・西打遺跡、年報平成12年度、研究紀要Ⅸ

(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
埋蔵文化財発掘調査報告書第92集　犬除遺跡2次調査

(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
松山市文化財調査報告書第77集　大渕遺跡、同第83集　播磨塚天神山古墳、同第84集　福音寺地区の遺跡Ⅲ

鵡川町教育委員会
北海道勇払郡鵡川町　米原3遺跡

仙台市教育委員会
仙台市文化財調査報告書第241集　沼向遺跡第1～3次調査、同第248集　平成11年度文化財年報21、同第249集　王ノ壇遺跡、同第250集　郡山遺跡21

石岡市教育委員会
常陸国衙跡

前橋市教育委員会
平成8年度文化財調査報告書第27集、平成9年度同第28集、平成10年度同第29集、平成11年度同第30集、平成12年度市内遺跡発掘調査報告書、横手湯田Ⅵ遺跡、総社閑泉明神北遺跡、内堀遺跡群XⅡ、村中Ⅱ遺跡・西田Ⅴ遺跡、前箱田村西Ⅱ遺跡、横手湯田Ⅴ遺跡・徳丸仲田Ⅳ遺跡、山王若宮Ⅱ遺跡、元総社宅地遺跡・上野国分尼寺寺域確認調査Ⅱ、前田Ⅶ遺跡

鳩山町教育委員会

鳩山町埋蔵文化財調査報告第20集　天沼遺跡、同第21集　町内遺跡Ⅲ、同第22集　町内遺跡Ⅳ、同第23集　鳩山町の埋蔵文化財(3)、同第24集　愛宕遺跡

印西市教育委員会

天神台遺跡(第８地点)

白井市教育委員会

白井木戸遺跡

文京区教育委員会

平成12年度文京区の文化財

あきる野市教育委員会

松海道遺跡

鎌倉市教育委員会

鎌倉の埋蔵文化財４、切通周辺詳細分布調査報告書、鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17　平成12年度発掘調査報告、鎌倉大仏周辺発掘調査報告書、国指定史跡永福寺跡

八田村教育委員会

八田村文化財調査報告書第３集　榎原・天神遺跡

茅野市教育委員会

家下遺跡Ⅱ、久保御堂遺跡、神ノ木遺跡、山之神沢遺跡、特別史跡尖石遺跡(平成８年度)、特別史跡尖石遺跡(平成10年度)、八幡坂遺跡、威力不動尊東遺跡、鹿尾根遺跡・鹿垣遺跡、師岡平遺跡、牛ノ児遺跡、向林遺跡、買地遺跡、トクアミ遺跡、林の峰遺跡

金津町教育委員会

金津町埋蔵文化財調査報告書第２集　遺跡発掘事前総合調査

魚津市教育委員会

吉野遺跡発掘調査報告書

舟橋村教育委員会

舟橋村埋蔵文化財調査報告書６　利田横枕遺跡発掘調査報告、仏生寺城跡発掘調査報告

多治見市教育委員会

多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書第63号　高田大ザヤ古窯跡群発掘調査報告書、同第64号　野中遺跡発掘調査報告書、同第65号　多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ、多治見市文化財保護センター研究紀要第６号

古川町教育委員会

古川町埋蔵文化財調査報告第６集　上町遺跡金子地点・氷見地点発掘調査報告書

菊川町教育委員会

菊川町埋蔵文化財報告書第19集　杉森横穴群Ｄ群発掘調査報告書、同第63集　土橋遺跡発掘調査、同第63集　白岩遺跡2001北

滋賀県教育委員会

20世紀近江発掘ベスト10展

草津市教育委員会

草津市文化財調査報告書41　平成11年度草津市文化財年報、同43　門ヶ町遺跡

日野町教育委員会

日野町埋蔵文化財発掘調査報告書第14集　松尾遺跡、同第15集　松尾遺跡

藤井寺市教育委員会

藤井寺市文化財報告第21集　石川流域遺跡群発掘調査報告ＸⅥ、文化財保護の手引き

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

平成11年度年報、兵庫県文化財調査報告第184冊　白沢３・５号窯、同第193冊　福島古墳群、同第200冊　北摂ニュータウン遺跡調査報告書Ⅶ、同第203冊　志方窯跡群Ⅰ、同第206冊　丸塚遺跡発掘調査報告書、同第208冊　大釜向山遺跡、同第210冊　亀田遺跡、同第211冊　外野野遺跡、同第212冊　大亀谷山古墳、同第213冊　高松町遺跡、同第214冊　木之内城跡

神戸市教育委員会

平成10年度神戸市埋蔵文化財年報、上沢遺跡発掘調査報告書、松野遺跡発掘調査報告書、二葉町遺跡発掘調査報告書、御蔵遺跡第４・６・14・32次調査発掘調査報告書、御蔵遺跡第17・38次調査発掘調査報告書、萩原城遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書、住吉町遺跡(第19次・20次)、住吉町遺跡第24次・32次発掘調査報告書、昔むかしのたべものは？、古代のメインロード

三木市教育委員会

三木市文化研究資料第17集　三木市遺跡分布地図

龍野市教育委員会

龍野市文化財調査報告23　北山遺跡

中町教育委員会

中町文化財報告15　多哥寺遺跡Ⅱ

岩出町教育委員会

根来寺坊院跡発掘調査概報

出雲市教育委員会

下古志遺跡、天神遺跡第11次発掘調査、斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書Ⅲ、出雲市歴史博物館、埋蔵文化財発掘調査報告書第11集　中野美保遺跡・藤ヶ森遺跡・荻杼Ⅱ遺跡

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財報告31　里山田下谷遺跡・二宮遺跡・旧閑谷学校

総社市教育委員会

総社市埋蔵文化財年報11

豊浦町教育委員会

豊浦町の文化財第17集　川棚条里跡、同第18集

川棚条里跡２

今治市教育委員会

今治市埋蔵文化財調査報告書第59集　市内遺跡試掘確認調査報告書ＸⅡ、同第60集　市内遺跡試掘確認調査報告書ＸⅢ、同第61集　伊予国分寺跡確認調査、同第62集　阿方中屋遺跡Ⅲ、同第63集　旦勇龍遺跡・宅間馬場口遺跡

本山町教育委員会

本山町埋蔵文化財調査報告書第11集　松ノ木遺跡Ⅴ

豊前市教育委員会

豊前市文化財調査報告書第14集　狭間宮ノ下遺跡

熊本市教育委員会

池辺寺跡Ⅲ、神水遺跡Ⅳ、熊本市埋蔵文化財調査年報第４号、熊本市埋蔵文化財発掘調査報告書平成11・12年度、熊本城跡石垣保存修理工事・発掘調査報告書

佐伯市教育委員会

萩山遺跡群

宮崎市教育委員会

宮崎市文化財調査報告書第46集　史跡生目古墳群、同第47集　深田遺跡、同第48集　間越遺跡

高城町教育委員会

高城町の文化財、高城町文化財調査報告書第10集　山城第１遺跡

田野町教育委員会

田野町文化財調査報告書第38集　黒草第２遺跡、同第39集　元野河内遺跡、同第40集　畑田遺跡、同第41集　ズクノ山第１遺跡

(社)日本金属学会附属金属博物館

金属博物館展示品あんない

栃木県立なす風土記の丘資料館

東山道

かみつけの里博物館

くにのはな　国華

国立歴史民俗博物館

国立歴史民俗博物館研究報告第89集

千葉県立中央博物館

研究報告－人文科学－通巻14号

出光美術館

館報　第115号

(財)新宿区生涯学習財団新宿歴史博物館

四谷二丁目遺跡、市谷田町一丁目遺跡

調布市郷土博物館

新・調布案内

氷見市立博物館

年報第19号、石橋西虹展

石川県立歴史博物館

利家とまつをめぐる人々

静岡市立登呂博物館

館報第11号

浜松市博物館

館報第14号

名古屋市博物館

年報No.24

鈴鹿市考古博物館

年報第２号、伊勢国府跡３、天王山西遺跡・三宅刃神社遺跡・梅田遺跡

滋賀県立安土城考古博物館

紀要第９号

大阪歴史博物館

大阪市立博物館報No.40、研究紀要第33冊、近世大坂画壇の調査研究Ⅱ

大阪府立弥生文化博物館

弥生クロスロード、弥生都市は語る

大阪府立近つ飛鳥博物館

館報６、モノクロームの守り神

柏原市立歴史資料館

館報12、河内国分寺と国分尼寺

岸和田市立郷土資料館

新島襄と山岡家の人々

吹田市立博物館

吹田市立博物館とその周辺

太子町立竹内街道歴史資料館

聖徳太子御廟と地域信仰

西宮市立郷土資料館

研究報告第５集、館報平成12年度、道具の記録／道具の記憶

独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所飛鳥資料館

飛鳥のイメージ

香芝市二上山博物館

シンポジウム『邪馬台国時代の近江と大和』資料集、香芝市埋蔵文化財発掘調査概報14

下関市立考古博物館

弥生時代・日本海地域の交流

徳島県立博物館

年報第10号

芦屋町歴史民俗資料館

芦屋町文化財調査報告書第11集　芦屋町山鹿地区芦屋層群漸新世化石群調査報告、年報　第２号

熊本市立熊本博物館

館報No.13

ミュージアム知覧

鹿児島県知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書第10

集　登立遺跡、紀要第７号
國立濟州博物館
韓國美術七千年、濟州の歴史と文化

千葉大学文学部考古学研究室
本寿寺洞穴・長兵衛岩陰
大正大学史学会
鴨台史学第２号
立正大学考古学研究会
立正考古第40号
大手前女子大学史学研究所
大手前大学考古学研究会報告第１冊　南所３号墳試掘報告、瓦－近代の酒蔵所用－
近畿大学文化会考古学研究室
七古歩第23号
慶北大學校人文大學考古人類學科
慶北大學校考古人類學科20周年紀念論叢、碩晤尹容鎮教授定年退任紀念論叢

東邦考古学研究会
東邦考古第25号
(株)山川出版社
日本史リブレット10　平安京の暮らしと行政
(株)講談社
再現日本史　第19、23号
(株)ジャパン通信情報センター
文化財発掘出土情報　第234～236号
リメックス株式会社
西早稲田三丁目遺跡Ⅴ
加藤建設(株)埋蔵文化財調査部
東京都青梅市　Ｋ－５遺跡
国立国会図書館
日本全国書誌　通号2340、2351号
府中市埋蔵文化財整理事務所
武蔵国府の調査18、同19、大量出土銭の調査概報、武蔵国分寺跡関連遺跡
玉川文化財研究所
長谷曽野遺跡発掘調査報告書、倉見才戸遺跡第４次調査発掘調査報告書、月見野遺跡群上野遺跡第12地点発掘調査報告書、御組長屋遺跡第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ地点発掘調査報告書
久が原グリーンハイツ内遺跡発掘調査団
久が原グリーンハイツ内遺跡
木曽広域連合埋蔵文化財調査室
吉野遺跡群
桜町遺跡発掘調査団
桜町遺跡調査概報
浜松市埋蔵文化財調査事務所
八ツ面遺跡、阿弥陀遺跡、又七遺跡

東海考古学フォーラム実行委員会事務局
東海の後期古墳を考える
高月町出土文化財センター
高月町埋蔵文化財調査報告書第５集　古保利古墳群
(財)古代學協會
古代文化　第53巻第７～９号
大阪の弥生遺跡検討会
大阪の弥生遺跡Ⅲ
庄内式土器研究会
３・４世紀日韓土器の諸問題
西近畿文化財調査研究所
西近畿文化財調査研究所調査報告書第３集　平安京跡(左京四条一坊四町)発掘調査報告書
朝鮮学会
朝鮮学報　第179輯
東大寺
東大寺防災施設工事・発掘調査報告書
博物館等建設推進九州会議・編集委員会
文明のクロスロード　Museum Kyushu通巻69、70号

(財)向日市埋蔵文化財センター
むこうまち往来こばなし、第７回近畿ブロック埋文研修会資料集
(財) 長岡京市埋蔵文化財センター
長岡京市埋蔵文化財調査報告書第21集　長岡京跡右京第668次調査報告
京都府教育委員会
重要文化財　冷泉家住宅座敷及び台所ほか３棟修理工事報告書、重要文化財　福王子神社拝殿及び本殿修理工事報告書
大宮町教育委員会
大宮町文化財調査報告第18集　久住遺跡調査概報、同第19集　今市古墳群・墳墓群・経塚発掘調査概報
(財)泉屋博古館
紀要第18巻、近代の日本画
京都府立山城郷土資料館
京阪奈丘陵の今と昔、山城・お茶の100年、花と鬼と仏、南山城の鉄道100年、古墳時代の鉄、館報第14～17号
亀岡市文化資料館
川からもたっらもの
宇治市歴史資料館
収蔵文書調査報告書３、同４、平成11年度・1999年報、宇治の名宝
城陽市歴史民俗資料館
城陽の自然－地形からみた城陽－

京都府立大学文学部考古学研究室
　中町文化財報告25　東山古墳群Ⅱ
同志社大学歴史資料館
　館報第４号
佛教大学総合研究所
　紀要別冊　日・韓・中における社会意識の比較
　調査
佛教大学文学部
　文学部論集　第85号
両丹考古学研究会
　北近畿の考古学
乙訓の文化遺産を守る会
　乙訓文化遺産８号

鍋田　勇
　歴史考古学第16号、舞鶴、古文化談叢第15、16、
　18、24、29集、日本の古代遺跡８　香川、同９
　鳥取、同22　愛媛、同23　岡山
濱田延充
　ヒストリア第174号、韓式系土器研究Ⅶ
北條朝彦
　動物考古学第17号
堀田啓一
　日本古代の陵墓
村川行弘
　川西市　加茂遺跡
森岡秀人
　庄内式土器研究ＸＸＩ、芦屋市文化財調査報告
　第26集　月若遺跡、同第37集　津知遺跡
山本祐作
　東播磨第８号

編集後記

年の瀬も押し迫り、寒い季節となりました。情報82号が完成しましたのでお届けします。

さて、本号では、今年度前半に行った発掘調査の成果についての抄報を中心に掲載しました。佐山遺跡の中世居館を囲む濠は全国的に見ても屈指の規模で、今後の整理作業の進展が楽しみです。また、若手調査員による共同研究の成果も掲載でき、充実した号になりました。よろしくご味読下さい。

（編集担当＝森島康雄）

京都府埋蔵文化財情報 第82号

平成13年12月26日

発行 （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189

印刷 （株） 大 光 社

〒604-0086 京都市中京区小川通丸太町下ル中之町76
Phone (075)222-1333 (代)

『京都府埋蔵文化財情報』第82号　23ページ第１図のキャプションの差し替えをお願いします。

第１図　調査地位置図

１.鳥居前古墳　２.石倉遺跡　３.脇山遺跡　４.大縄遺跡　５.南栗ヶ塚遺跡　６.葛原親王屋敷跡
７.硲遺跡　８.境野古墳群　９.西法寺遺跡　10.円明寺跡　11.久保川遺跡　12.里後古墳
13.金蔵遺跡　14.松田遺跡　15.宮脇遺跡　16.山崎城跡　17.百々遺跡　18.算用田遺跡
19.下植野南遺跡

KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER